

江妻と松前

前 遺 分

▽ 平民文學の白眉 △

『忍路崎及ひもないが、せめて歌麩磯谷まで』と悽愴悲痛の情を合ひ一篇の哀詠に之れ、邦國平民文學の白眉とも言ふ可き、名詠松前追分節の一節である。

曲の凄艶、調の哀傷は言はずもあれ、幽婉なる節廻し、纏綿の情緒、聴く者誰乎、紛糾極まりなき愛世の煩患をも忘れて、斷腸の泪に咽ばずには居られ

やうか。都大路の夏の月、遠音にながす尺八にさへ、遊子はそとろに袂を濡
ほすとか、無心の蟹女が袂にも、轉た愛世の哀れは宿す。况んや萬里の滄溟
遠くして、寒雲北に駛れば一痕下弦の月、秋靜の碧空に利鎌の如く懸る。此
時凍り切つた空氣から透き徹るやうな聲で、悲痛極まりなき此の哀曲を唄ひ
出されたならば、心ある程の者は我を忘れて、熱き涙に咽ぶであらう。吁、
この言い能はざる無限の感慨、餘韻嬌々たる無量の詩趣、恐らくは、北國の
人ならずば想像だも及ばぬ所であらう。東北一帯の荒涼たる自然を背景にし
て、更に此の哀謠に一段の價值を覺ゆるのである。

▽追分節の今昔△

されば怒濤逆巻く北海の地、早く既に文化文政の頃より、舟子歎乃の間に傳
へられ、今尙ほ人口に膾炙されて居る。北は宗谷根室より、南は庄内秋田か

ら北越地方まで、陸は馬士唄となり海は歎乃として、月冴えわたる芒の路、
嶋なくなる浪の上、或時は鈴のねと和して或時は櫓の音と交つて、哀々の曲
悲愴の調、常に人の腸を絶つた。

實に本道松前は、追分節の本場として、其名天下に普く、松前と言へば追分
節を思ひ出し、追分節と聞けば松前を思ひ起す位。然かも星移り物變つて
往時の榮華は夢と残るばかり、哀れや城下松前は、今、僅かに餘喘を保つに
過ぎず、従つて追分節の名手も四方に散じて昔日の偉も無く、現今では、殆
んど本場には之を完全に唄ひ得る者が無い。

翻つて我が江差を見るに、嘗ては、江差追分の名を博し、又た、追分節數十
篇の中、尤も悽愴無限の調を含む逸品として、人口に膾炙されつゝある『忍
路高島』の名詠草創の地として、追分節とは實に、離る可からざる關係を有

し、又た之が歌曲を能くする者にも乏しくなかつたが、前者同様の理由の下に、今では甚だ心細い次第となつて居る。

然るに近者、追々と此の名謠追分節を研究する者出て來り、今や憧憬者東西に普く、何れも其の眞箇の哀韻に接せん事を望んで居るが、如何せん之が眞味を傳へる者に乏しいは、誠に遺憾な次第だが、遮莫、片々たる一篇の此の俗謠は、千古に朽ちざる生命を有し、永劫に、悠々として悉きざる無限の情緒は聞く者の腸を斷つ事であらう。

▽起

源△

年々歳々花、相同じ——然れ共過ぎゆく年は流るゝ水の如く去つた。幾十年のその昔、いかなる嘆きを抱いて、如何なる人が堪え兼ねる胸の哀しみを斯くは唄ひ出たのであらう。

懐ふに、此の一篇は純乎たる哀謠である。

調の悲痛、曲の哀憐、纏綿の想——、縷々悉きざる萬斛の涙が、其の背面に横溢して居るでは無いか。

而かも、春風秋雨幾百星霜、名曲いたづらに埋れて、能くその起源を知る者だも無い。我、久しく之を遺憾とし、どうかして世に紹介するの機會を得たいと欲し、或は傳説に、或は口碑に、古墨を探り古記を渉り、斷簡零墨の細をも之を空しくせず、辛ふじて、蒐集し得た材料に依つて、今茲に、臆氣ながらも、這箇、一篇の哀謠の起源について、頗る興味ある、しかも可憐なる一場の悲劇を物語らうと思ふ。

蒙昧なる土人より棲む人もなかつた蝦夷地時代の、北海の哀史、そも、如何なる事實が諸君の眼前に展開さるゝか、請ふ、暫く待ち給へ。

榮華の夢の早や覺めて、悲しき没落の日を見るもの哉——實にや、有爲轉變は世の習へなれども、平家一族而已の榮華盛衰の理ならねど、去年は九重の雲に見し秋の月をば、今日は八重の潮路に打ち眺め、心細くも世を明けたりし壽永二年。頼朝義仲の争を機逸す可からずと、福原の舊都までへは攻め上つたが、一の谷の一戦に、脆くも九郎がために打破られ、須磨の浦曲の朝風に、散りしく花のあとや先き、落ちゆく果ても白波の、一族郎黨百八十騎、七千餘旒の赤旗抱いて、壇の浦に哀れ、二十餘年の驕りの夢も茲にさめて、空しく底の藻屑と消えてより、世は時めく源氏の手握られ、頭大公頼朝が幕府を鎌倉に開き、暫し世は兵馬の難を免れた。

扱ても源頼朝は、根が猜疑深い性質なのに、佞人梶原景時が「四海波靜まり

て世は我君の御進退なるべしとは覺ゆれど、但し九郎判官殿には、お心許し後ろめたし、彼の、一の谷落さるゝ事、鬼神の仕業と覺えさ。誠や戦にかけては、進む事を知つて退く事をしらず、かて、御心剛に、謀すぐれ給へり。實に怖ろしき人にまします。尤も、御心得こそ然る可し。』などと、渡邊の船汰の時の、逆櫓の口論を深く含んで、切りに讒訴したから堪らない。遂には現在血を分けた、然かも勳功類なく、恩賞最も深くす可き、第九郎判官を、討ち取らんと企たるこそ、實に淺猿しい次第である。

あわれ、弓矢とつては恐るゝ者もなき流石の九郎義経も、現在兄の頼朝には、刃向ふ術もあらなくに、都を後に落ち給ふた、心の中は如何であつたらう——大物浦にさまやふては、波上の雑魚と追はれ、吉野の山に隠れては、雪間の若葉と探られつ、茲に靜の姫と愛苦の袂を分ち、幾夜寝さめの假枕、世を

日蔭なる落人の、空ゆく雁の啼く音にさへ、つい我身の果の思はれて、夕を送る鐘の音にも、轉た浮世の哀れは宿るのであつた。斯くて、辿りたどつて陸奥の、清原秀衡卿に身を寄せ、暫しが程は世を忍んだが、文治五年の卯月半ば、最後の戦平泉に敗れてより、或は自刃したとも言へ、蝦夷地に渡つた瀟洲へ走つた、いや然矣ではない斯うでもない、遂に四海の中、其消息を失つて了つた。あゝ稀世の英傑、九郎判官、源義經。渠は果して、何處へ姿を悔したのであらうか。

▽狂 瀾 怒 濤 △

今は昔、未だ本道を蝦夷と稱し、棲む者としては無智蒙昧なる土人ばかり、千里の深林、漠々として寒雲鎖し、曠野空しく荆棘の莽々たる而已。秋静萬里

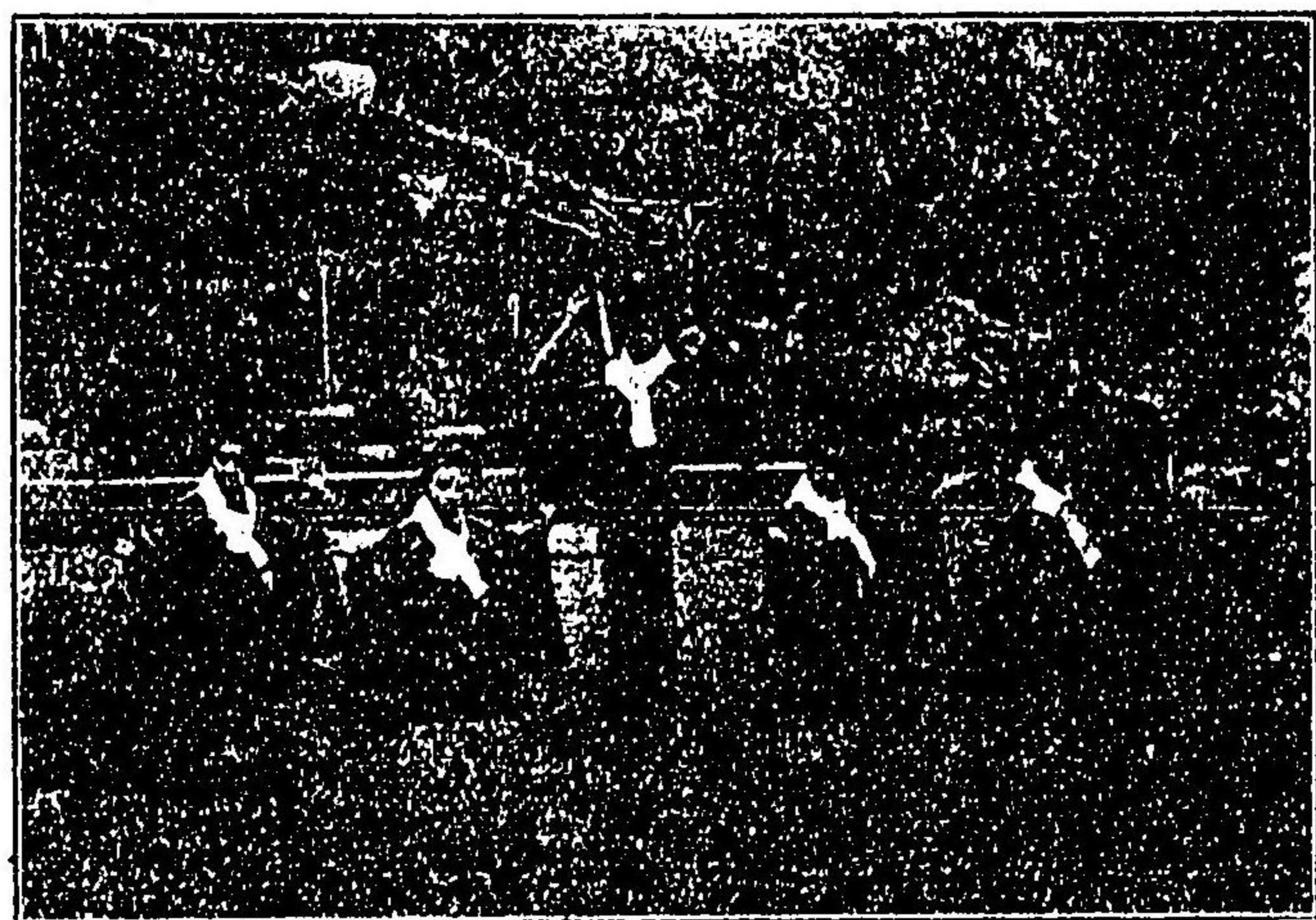
の碧空に、一痕の寒月淋しく懸れば、巨熊徒らに肥え猛つて、吼聲河嶽を震はすと言つた時代、時は今を距る事七百二十餘年前、文治五年の秋も暮れんとする頃の出来事である。

今の後志、積丹半島の北端に、カムイ岩と土人等の呼び順らしてゐた一個の巨巖があつた。(余別村の沖合、神威岬に在り。現今は神威岩と稱す。) 此邊一體、有名なる峭險積丹半島の一部で、後ろには余別嶽遙かに天空を摩し、蜿蜒たる山脈、直ちに海洋に迫つて、盡頭は削り取つたる如き百尺の斷崖、俯しては物凄さままでの深淵、碧黒の潮を湛えて長蛇のうねるが如く、グルと渦を巻くの様、夏猶ほ思はず肌粟する程の恐ろしさである。かて、數知れざる奇石怪石、瓶器を微塵に打ち砕いたかの如く羅列して、一朝、西米利亞嵐飛雪を捲いて、山の如き狂瀾怒濤が、蔀地に襲ひかゝるが如き日

にも會さば、十丈の白沫を擧げて激浪粉
碎する所、百雷等しく落つるが如き響、
鞞々耳を聳して恐ろしいと言はんか、凄
まじと信ふ可きか、殆んど筆にす可から
ずである。

流石の土人等も、暗の淵と稱えて、又た分
近寄る者も無かつた。

カンムイ岩は丁度此の沖にあるので、高
さ十餘丈、元として聳えた其の形は、恰如
も衣冠を正しうした神代時代の貴顯が、
一心に何事をか祈願を置めても居るか



のやう。然かも渦潮常に脚下に碎けて、霧の如き飛沫天に沖し、怒號の響き
晝夜絶ゆる暇もなく、自ら一種の崇嚴を覺ゆるので、土人等は之を、堅く神
靈だと信じ、婚禮、其他の大禮を行ふ際は、巖頭に跪坐して遙かに此の巨岩
を拜し、祝詞をあげた。

一日、晩秋のそれでなく共稍々ともすれば、險惡な日のみ多い霜枯時を、
名にし負ふ北海蝦夷地の空、暗嶮たる密雲、矢の如く北に飛ぶよと見る間に、
忽ちにして横に降りつくる寒雨！烈風激して見る間に怒濤は山の如く起つた。
怪しむ可し此時、遙かの沖合をこの邊りには曾て見受けぬ一葉の遍舟を操取
つて、丈餘の帆は濤に浸らんばかり、沈むと見れば忽ち浮き、浮くかと思へ
ばあなや！隠れて、翻々激浪怒濤に掀翻されつゝ、西北を指して蕪地に駛走
する船があつた。

當時此の、積丹半島の土人の酋長を、緇餒簡邊と言ひ、身の丈六尺八寸、眼球突出して一度之に睨まれるれば、鳥獸も又た怖れ戦いて聲を秘めた。南下十餘里、敷島内の村落より、東は遠く余市古平、高島の邊まで悉く其領土に屬し、界限、誰知らざる者も無き、猛漢であつた。

然かし、刺、恐ろしき身にも人をまどはず、あの艶やかな薔薇のはな！此の蠻漢とは打つて變つた、優しいひとりの娘があつた。芳紀は十八、婦塚几姫といつて、肌えの白い、愛奴人種には珍らしい眞珠のやうな瞳を持つた少女であつた。早くから母を失つて、野邊の花にも尙ほ涙をそぐ優しい心根は一層弱々しくなつて、何とはなしに紫紺のみ空に光る、あの、懐しい眸のやうな星を仰いで、細い胸を抱いてホッと溜息を洩らす事さへあつた。

蟲の鳴くねの、そろ／＼聞かれる時分から、何うしたものか氣分勝れず、此

頃では其得意の美しい聲を絞つて、唄をうたふ事すら絶えて無くなつた。愛奴なれば連、親子の心に何異なりがあらうぞ、緇餒簡邊は此頃これのみ苦に病んでゐた。

▽武 勇 の 神 △

怪しき帆影が、矢の如く西北を指して馳せて行つた翌る日である。昨日の暴風はいつか終まつて、名残の浪の寄せてはかへす計り、雲間を洩るゝ月かけが、折々遠く海洋を照らした。

夜も更け亘つた子の刻に、彼のカムイ岩の蔭より忽如！一艘の小舟が斷崖目掛けて漕いで來た。——何者ぞ、折柄雲の吐き出す月影に、瞳を定めてよく／＼凝視すると、そは疑ふかた無き昨日見た、あの怪しの舟！そも、其舳にうづくまるは魔か人か、但しは神か。

果然、此宵は恰かも緇倭備邊の娘、琢丸姫と、髪は黒く長い、唄をうたはせては向ふへ廻るもの、無い同族の若者と、芽出度く千代萬代と契りを結ぶべく、巖上には籬りをたいて、遙かに彼のカムイ岩の神靈へ誓ひの言葉を述べてようとしてゐた所であつた。

見れば正しく内地人に相違ない！恐ろしい渦巻きをも見る間に乗り切つて、船を着けようとするのだ。事を好む蝦夷土人の、何でう黙過す可き、それ！と計り、各々鎗や刀を持ち出して、もう誓言も何もあつたもので無い、奴、我が領分へ内地人などに、何で一步も踏ましてならうか………。

斯くとも知るや知らずや彼人影は、猿のごとく攀ち登つて巖上に現はれた。疾し、遅し、紫電一閃、憐れや無法の切尖に、唐竹割りの眞つ二つ！血煙颯と立つた、かと思ひの外、瞬間人影は遙か距つて叫々と笑つた。

却つて緇倭備邊は、翻筋斗打つて投げ出され、折れん計りに腕を打たれて笑止や剣は、遠く飛んで暗に空しい光を放つて居る。——一場の活劇！方四十里間に鬼と畏られた其酋長が、こ、こ、此の有様は之は！とたゞく呆る計り、無智なる彼等は早くも之れ人間に非ず、暫し身を内地人に扮したカムイ岩の神靈ならんと、唯々恐懼して了つた。然う思つて見れば此の絶壁を、苦も無くスル／＼と攀ち登つたのも人間業ではなく、又た此の荒海を、今頃シャモの来る可き謂れも無い。残るはたゞ神罰を免るゝ祈禱のみと、一同は岩上に跪いて額から汗を流し、一生懸命に命を請ふた。

緇倭備邊も、苦悶の軀を起して、婦琢丸姫と共に祈りを捧げた。——時、薄れ行く雲を逃れし月の光に、恐る／＼仰ぎ見ると、最早や前程の勇猛な所は微塵もなく、溢る／＼計りの温顔に、一歩々々、静かに近づく人影は、至つて

背の低い、色白な若い内地人であつた。やがて、緋袴筒邊と婦塚几姫とを従へて、其棲家に案内された。

之から後といふものは、毎日のやうに海に釣したり、或は山に狩りを試み、従者の如く緋袴筒邊を作れて歩いたが、彼は只管此の内地人を神の化身だと信じて居るので、苟且にも意に忤らざらん事をのみ心掛け、唯々として事へて居たから、勿論其他の愛奴共の、無禮を加へる筈も無かつた。

或る日内地人は、何處よりか一片の草の根を携へて来て、健康勝れず、ぶらぶらしてゐた婦塚几姫に與へて服せると、驚く可し奇効忽ち顯れたので、姫の悦びは例へんものも無かつた。——その身體の回復と共に、愈々姫と合歡の式を擧ぐる筈の、彼の若者も、飛び上る迄に嬉しがつた。

斯くして内地人は、いつか土人等の間に武勇の神として崇められ名をヨシッ

ネ様と呼ぶるゝようになった。

▽月夜巖頭の悲劇△

制縛多き我が世の習ひは、常に悪戦を経ざる可からず、事々に障害は横たはるのであつた。さはれ！戀愛は、人の世に於いて絶體の自由を附與されてゐた——然かも、かるが故に、抑もいくその青春の子女が涙は、あの、花の下に零るゝ露のやうに、人しれず注がれ來つたのであらう。成らぬと知れば猶更に、暮るる焔の胸に焦るゝ苦しさは、戀するものゝ常態では無いか。——メノコなればとて、うら若き身の、胸にはあたゝかさ血潮も湧かう！婦塚几姫は、此のごろ物思ふ身とはなつた。

空ながれゆく夕雲の、行衛いづくと眺むれば、果ても得しらぬかな——お、然う言つた、いふ計りも無い頼りないような……かと思ふと何か知ら、物に

憧憬るゝような、もつれ／＼ては唯だ果敢なくうら淋しく、哀しい思ひが胸に充ち來て、我にもあらず落す一としづく、實に此の夜頃夢おだやかならず現つに、醒めては幻に、たゞ其の君の慕はしく。——斯くて、彼の若者とは次第に疎々しくなつた。

あはれ、落花こゝろ有らば、流水などか情なかる可き。ヨシツネ様も、婦琢几姫の眞ごゝろを、憎からず思ふに至つた。

深夜巖頭に活劇を演じてより、斯くして一ヶ月ばかり、夢のごとく流れ去つた。此頃始終、巖頭にヨシツネ様の影を見る日が多くなつた。以前のやうには狩りにも出でず、海は荒るゝので舟をも出せず、たゞ一日、肌を劈く吹雪をも物ともせず、黙して沖遠く眺め入つてる、嗚呼其心中の大望は、誠天地間濶しと雖も、固より知る人のある可き道理が無い。

ある夜、婦琢几姫は怪しい夢に眼を醒した。それは、どこか知ら、遠い／＼國へ漂泊の身となつて、鞆々と凄まじく碎くる浪の音を耳にしつゝ、海岸近く足に任せて歩いて行くと、遙かに笙の音が物懐しく聞えて來たかと思ふ、と、俄かに、四邊は薄暗くなる。怪しんで居るとわが懐より、一疋の銀蛇が躍り出て、あなやと思ふ暇もなく、山なす濤を蹴破つて、沖遠く奔りゆく跡は何處までも、眼も眩め計り銀の光を漂はした。——と思ふと、夢は破れて、渾身はどつぶり汗に染れ、全身言ふばかりも無い勞れを覺えた。

何となしに、姫はヨシツネ様の事が氣が／＼りに成つて、居ても起つても居られ無くなつた。物狂はしく、つと起ち上るよと見る間に、寐沈まつた眞夜中を、鉢巻のヘトマエに黒髪くろがみの亂れかゝる様、暗にも物凄く、ひた走りにかの巖頭目掛けて走つて行く。

あゝ、姫の戀は破れたるよ！

醒めしは夢か、こは幻か。折から雲間を洩るゝ冬の月、青き光に透し見る、北蝦夷灘の激浪怒濤、たゞ見る涙々涯もなき海原に、揉まれくゝて沖を心ざす、一葉の扁舟の舳に起つは！あゝ、愛ほしの、ヨシツネ様では無いか。

半ば狂した如く、巖頭に聲を限りに叫んで、狂ひ廻つたが、無情なや、船はかへす模様も更になく、矢の如く馳せて今やカムイ岩の邊りにかゝるよと見る中、ヨシツネ様はつと起ち上がつて最後の訣別に高く手を振つた。かと思ふ間も無く濤はさらふ如く舟を岩影へ拉し去つて早や影も無い。

餘りの悲しさに、姫は巖頭に臥して身を挽いて慟哭したが、たゞ冬の月、凍れる如く照らす而已、脚下には恐ろしい響を立て、碎くる浪が、何だか人をも待つようグル／＼と渦を巻いてはかへつて行く。――

今は身も世もあらざる婦塚几姫、戀の炎に眼も眩み、哀れにも断ち難き愛の絆の、荒海に身を投じて後を追はんと心を決した。

百尺の絶壁より、軀を躍らせんとする突嗟、少いささ身體は何者にかグツと抱き止められた。

『こらッ姫、何をするッ』

あゝ其は、餘人ならぬ父の緇儼簡邊であつた。その荒くれた、鬼の如き手の甲に、婦塚几姫の熱い泪はハラ／＼と零れた。

姫はもう口も聞き得ぬ。唯だ身を悶えて嘆き悲しむのであつた。今、恁うして別れたら、もう／＼、死んだ未來迎も逢ふ瀬はあるまいものを――と思へば、胸も張り裂くる計り、涙の泉も枯れよとばかり、よゝと泣き沈む頬を瀧津瀬なして紅涙は溢るゝ。

何と問へど賺せど、初めは哭くより外に無かつたが、辛ふじて涙に洗はれた半顔を擧げて、(ヨシツネ様)と言ひさし、狂氣の如く沖を指さした。

緇餒箇邊扱てはと、其のヨシツネ様が何うしたと聞けば、舟へ乗つて漕いで行つたと言ふ、そしてカンムイ岩の影になつて其なつかしい姿を見失つたと涙乍ら告げる。

「妾の夫！わらはの夫！」

と再び沖を見入つて叫ぶ。

膽もつぶさん計りに呆れた緇餒箇邊、カンムイ岩の神靈が、今再び岩に還られたのを見送つて、斯く泣き悲しむさへ訝かしいに、『わらはの夫』とは何事ぞ、憐れや日頃の病苦萌して、氣や狂ひけん？

そとろに聲を震はして「こりや婦塚儿姫！心を落つけて能く聞け——そうし

て泣くさへ此の父には、何やら合點も行かざるに、言ふにも聞くにも這は又た事缺さし、御神靈に對して、今の無禮の言葉はナ、何とした事ぞ、氣でも狂ふたか、若し神罰下らば何とする、瞬時も速く之を謝すべし。」

飽く迄、ヨシツネ様を、カンムイ岩の神靈が化身と信じ込んだる緇餒箇邊、

眼には涙さへ溜めて姫の顔を覗き込みながらさとした。

姫は、今は之までと、残らずヨシツネ様と自分との間を語つて、夫に相違が無いのだと、何を言ふてもはやせぐれ来る涙を拂ひくやつと語つた。

驚くまい事か、呆れまい事か、眼を慎らし雷のやうな聲で『馬鹿ッ』と怒鳴つた。

「え、此の……氣が狂つたか！馬鹿者奴！三十日前に、此の巖の上で箒りを焚いて、御神靈に對して誓言建てた男が、お前には有つた筈ぢやないか、こ

りや一體汝は何うしたんだ？！情ねえ奴だ、いろ／＼気が狂つてか、但しは夢か、然かもヨシツネ様などに對して……あゝ畏れ多い事だ。これ程言ふても分らなければ汝は娘ぢやないぞ、己れ悪魔奴ツむ、悪魔だ、／＼悪魔は退治しなけりや無らぬ！』

月に露も凍らん秋水を、ギリリと抜いた。

恰かも雲霧散じて寒月氷を割つたごとく、脚下の深淵に鞆々と碎くる怒濤の響きは、百雷の落つるが如くである。

姫は悲し氣に唯た泣いた。——緇佞邊は聲を荒らげて、「さア何うだ、神靈に罪を謝すか、未だ寐言をほざくか、ひい。」

今はこれ迄と、無智なる土人の憐れむ可し、一箇の神靈と言ふ幻影に目も眩み、一刀の下に最愛の娘が命を絶たんとした。吐嗟、間一髪婦孺几姫、體を

交はすよと見る間に、削りなしたる如き盡頭より身を躍らせんとして、脱兎の如く遁れんとするを疾し遅し、背後より浴せたる白刃一閃！悲鳴と共に颯と立つ血煙の中に姫は敢えなく斃れた。

片破れ月、氷の上に流れた血潮を、黙して照らした。

それから後、此の巖頭に彼の、カムイ岩に對して誓言を婦孺几姫と共に擽げた若者の姿を、たゞの一日として見ない事は無くなつた。

永劫に變らぬ大洋の濤は、今日も脚下に凄まじく碎くれど、あゝ姫遂に來らず——若者の胸は、常に新しい悲愁を以て閉ざされて居た。

此の界限、誰知らぬ者もなき其美音は、この日から常に悲しい唄を歌ふに振り絞られた。

やがて懐しい春がまた運り来て、花も咲く、鳥も歌ふ、流石に寒い積丹半島にも人の心を浮き立たすやうな暖かい日が多かつた。若者は此頃でも巖頭へ来る事は曾つて缺かしない。

所が不思議な草が、婦塚几姫が取えない最後を遂げた趾に、生い生した。扁平な葉が簇生して、高さ三尺から四尺計り、土人等は姫の名を直ちに其儘、婦塚几草と稱えた。(現今の名稱詳かならず、口碑漢として知る可からざるは遺憾なり。)

ある夕べ、いつものやうに彼の失戀の若者は、巖頭に來て佇立んだ。今宵も濤はいつに變らずドボン／＼と寄せては返してゐる。

不圖彼は、腰からマキリ(小刀)を取り出して、何と言ふ事なしに婦塚几草の葉を切り落してゐたが、一枚、美しいのがあつたのを取り上げて吹くと、何

とも言へぬ微妙な音がする。——一生懸命に吹き荒んでゐると、心の儘、自由自在に曲を奏する事が出來た。

彼の悦喜は一方ならず、婦塚几姫を追想して自分の作つた悲しい曲を吹奏すると、一片の草の葉を洩るゝ美妙の音は、何だか姫が側へ來て泣いてゐるかのやう、堪らなく成つて彼は胸を抱いたまゝ、絶倒して哭いた。

然かも脚下に叫ぶドボン／＼と言ふ濤の音を、其の一句々の曲節の高低に合せて調べる時、朦朧なる土人等も、一人として涙を流さずに聞き得る者が無かつた。

そして之は、海上へ去つた神靈に執着した姫の魂が、今なほ空に漂浪ふて行くに行き得ず、浪の音となつて巖下に碎くるので、それが若者の追想の曲と合致するので、斯くは口にもされぬ、言ふに言はれぬ憤絶な、幽美な曲とな

つて聞かれるのだ、と彼等は解釋した。

我も我もと、争ふて婦塚几草の葉を取つて、其の曲を真似て見たが、何だか情が籠らず、若者の吹奏するのとは、自ら及ぶ可からざる差異があつた。之れ、實に哀謠松前追分の濫觴である。

口碑と傳説、必ずしも又た捨つ可からず、這謠一片の哀曲が、北海の荒涼たる自然と狂瀾怒濤を背景として、初めて其の悲愴幽婉、曠く類を斷つての哀曲として世人に推奨されるの所以のもの、又た、故無さに非ずである。

▽追分の唄△

抑々追分節の唄は、城下松前、わが江差、或は函館等諸所に於いて作られたので、其中、どれが前か後か、明瞭に分らない。左に數十篇の中、秀でたるものを七八つ摘記して見よう。

……色の道にも追分あらば、こんな迷ひはせまいもの……

天保年間、我が江差の一藝妓が、計らず客の胤を宿して、それを苦に病み快快として樂しからざる日を送つて居た。是より先き、按摩の佐の市といふ者が、けんりよ節といふのを創作して、いろ／＼な新文句を作つてゐたが此由を聞いて、直ちに「色の道にも」の歌を得た。是江差追分の濫觴であると傳へられて居る。一篇の意は解釋する迄もなく、即ち、戀の道にも追分があつたならば、こんな迷ひはしなかつたものを——詰り、餘り、深入りしたゝめに遂に胤をまで宿し、線香は落ちる、働けない、試に物憂い日のみ送らなければならぬ場合に陥つたのも、戀路の闇に踏み迷つた自分の誤り、もしも此の道にも、追分があつたならば、こうして踏みまよひはしなかつたものを——と嘆じたのだ。餘り知られてない唄だが、慥かに秀れた作である。

……忍路高島及びもないが、せめて歌棄磯谷まで……

追分唄數多しと雖も、其の尤も人口に膾炙さるゝは此の唄である。御維新前迄は、女は不淨のものであるとし、積丹以北には渡れぬ海神の掟があつた。男は遠く奥地へ稼ぐに行くが、自分は後に一人残らなければならぬ。悲しくても辛くとも仕方が無い——若しも激しい寒さに身體でも痛めたならば何とせう、濤あれば舟も揺れよう、一朝覆つたら千尋の底の藻屑となるばかり、あゝ开れを思ひ之を思ふと、居ても立つても居られない。忍路高島——そは及びもあらざれ、せめて、——せめて歌棄磯谷までも一緒に行く事が叶はないのであらうか……と言ふ意味だ。僅々二十六字に、四箇所も地名を入れてあつて而かも人を感動せしむる力がある。之れ其の、眞に偽らざる眞心を、直ちに唄ひ出でたる情緒そのもの、人の心の琴線にふるゝ故であらう。

……大島小島のあひ取る舟は江差通ひかなつかしや……

津輕の人間が唄つたものである。遙かに白帆が見える——一ぱい風を孕んで威勢よく波を切つて進んでゆくのだ。はて何處を差して行く船かと瞳を定めると、大島と小島との間を目掛けてずん／＼進む、あゝ、江差へ行くのだなと思ふ。と追想は飛んで、去年稼ぎに渡航つた時、濱小屋の夕暮に買つた、あの眼のくり／＼と愛らしい、背も低いし髪もちぢれて居たけれ共、口許に何とも言へない愛嬌のあつたあの女……來年も來て頂戴、て何遍も／＼別れる時繰り返したつけ、あゝ今年も未だあの女は居るだらうか、それとも國へも歸つたか知ら、思へば江差の空が懐しい、江差を指してゆくのかと思へばあの白帆の影がなつかしい。

……蝦夷のアツシは寒さを凌ぐちよいと着て見よ都人……

蝦夷と云ふのは蝦夷土人の事ではなく北海道を指して言つたのだ。アツシと言ふのは木綿の茂尻に紺糸で刺繡したので、其の模様は一定の型がある。愛奴は、之を刺繡するのに獨特の腕前を有してゐる相な。唄の意味は至つて淺い讀んだ丈の奥行に過ぎない。但し取りやうに依つては、都人士の奢侈を暗々裡に諷刺したものとも解釋が出来る。

……江差照る／＼函館曇る花の福山華が咲く……

此唄は、例の津から生れた有名な俗謡、『阪は照る／＼鈴鹿は曇る。』を真似て地名をはめたのである。追分節の唄としては茲に至つて其價值はゼロになる譯だが、唄つて心地よく耳に響く。當時の三港の消息は、これに依つて其一部を窺ふ事が出来るでは無いか。

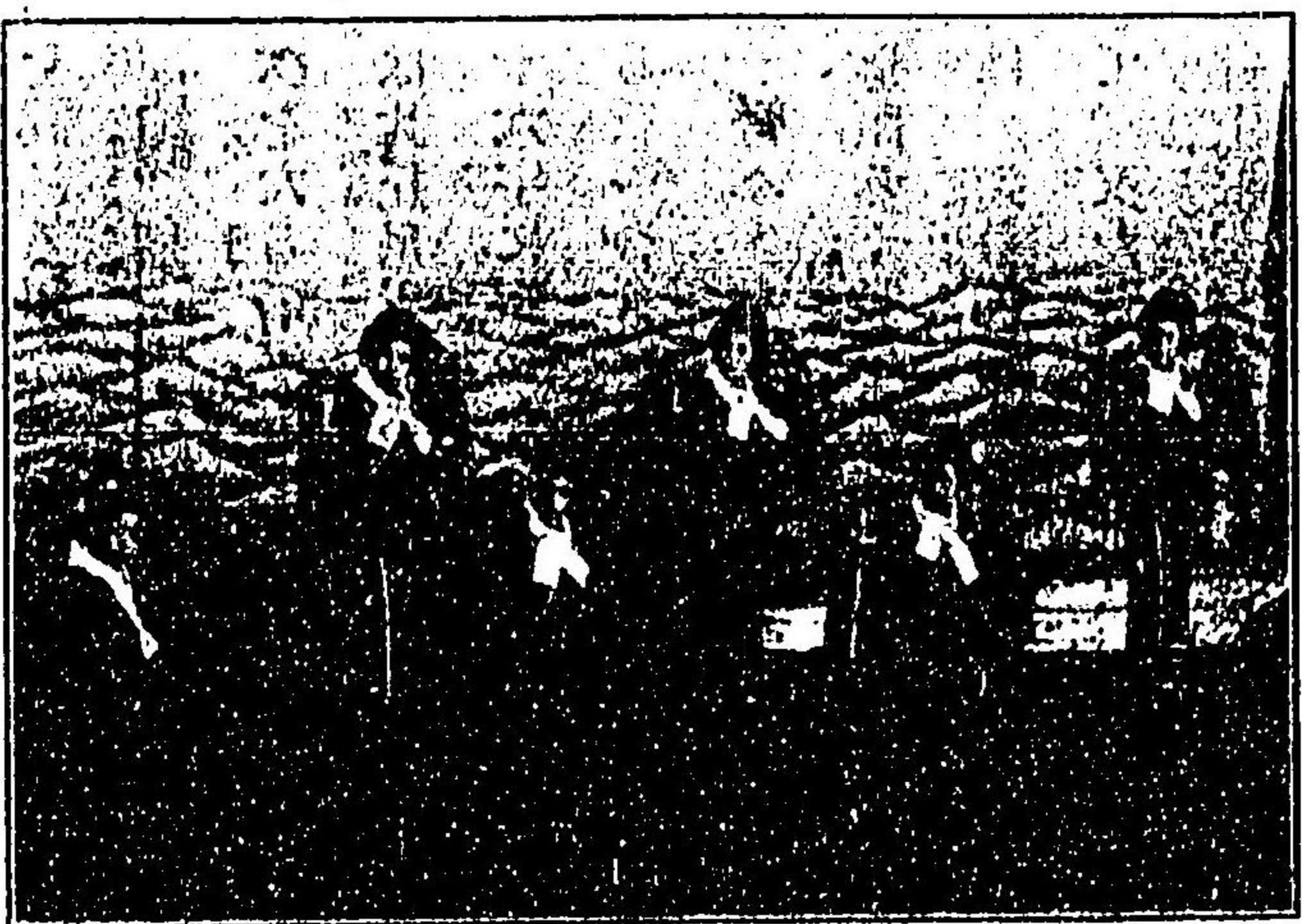
……大島小島は兄妹島よ何故に奥尻はなれ島……

大島と小島は、兄妹のやうに二つ並んで睦まじ相にしてゐる。それに奥尻島ばかり一人ポツチに、斯うして淋しく湖の絶えぬ流れにじつとしてゐる。何だから悲しい心持がする。——と言ふので、之を直ちに取つて人事の葛藤に用ゐる事が出来る。唄としては大した物では無い。

……何卒／＼かなはせ給へ

……お禮参りは二人づれ……

之も簡單なものだ。何卒／＼叶はせて下さい。お禮参りは二人で致します——と



早くも決めて居る所に、並々ならぬ相愛の情を認める事だけは出来る。

……帯も十勝に其まゝ根室落つる泪は幌泉……

……聲はたかしま静かにあしよる忍びをたるの中ちやもの……

……添ふや添はずに別るゝならば末は比丘尼となる覺悟……

此の三謠は共に、地名を使つて哀々の情を二十六字に唄つたのである。尤も『聲は高島』だけは、艶つぽい側の唄に屬する。一つも解釋は要るまい。

▽江差藝妓と追分△

流石は江差追分の名を博した丈けあつて、今を距る十數年以前迄は、其妙手に必らずしも乏しく無かつた。然かし現今では、(追分節の今昔)の項に述べた通り、土地の衰退から彼等も諸所に流轉して、又た昔日の俤も無い。回顧すれば、明治二十六年の八月、時の内相井上伯、宮相土方子は、參事官

都築馨六水上秘書官其他の諸氏を従へて、本道漫遊の途次當地に來遊された事がある。

越えて同じく二十八年の夏、矢張り八月に、御料局長川村通俊氏と竹内泰臣氏などが來遊された。當時新地の繁盛は、到底慶應や維新當時の面影は無かつたろうけれ共、猶ほ今日などは比較にならず、藝妓の數の如きも、百數十名を算して居た。

其中から選り抜かれて、宴席に侍つた十有數名の藝妓の中、特に江差藝妓中の粹なるものとし、將た追分節の巧妙なる者として、此の賓客の寵を蒙つたのは、吉野、小三、小高、小澄、浪安の五妓であつた。

美しい聲に唄ひ出された哀謠追分、其の纏綿の情調、怡楽の曲節、いたく貴賓の心を動かし、實に追分節の妙手よ！と賞嘆の聲を放たれた。——之は今

に傳はる話で、然かも揃ふて、五人ともに江差の水で産湯をつかつたのであるのだ。

斯くして歸京後、いづれよりか洩れて、江差藝妓と追分の名、満都に普ねかつたのである。若し今日の如く通信機關が完備してあつたならば、恐らく此の五人の名は、廣く帝國中に唄ひはやされた事であらう。而かも既に今日迄年を閲する事十數年。當時の五人中江差に止まる者小三吉野の二名而已。彼等も疾くから廢業して了つた。

斯くて江差藝妓と追分節は、忘る可からざる之等の歴史を有してゐるにも係はず、目今は秋風落寃の嘆は免れない。残念の事だ。——
然かし、翻つて又た考ふるに、一昨年、昨年。ハルビンに非命の最後を遂げられた伊藤公や、或は後藤遞相岡部法相、其他の顯官貴人が本道に來遊され

た時、小樽や札幌で、追分を聞かれた事は當時全國の新聞雜誌に其記事が記載された。其追分を唄つた藝妓は、殆んど江差から行つた藝妓のみに限られて居たのは事實である。

現に藤公が、酔つばらつて膝を枕に假り乍らうとくして居ると、退屈まぎれに其藝者がそゝろに口吟んだ追分の一節を耳にして、言ふ計りもなき哀感に搏たれ、『うまい！』と嘆賞の聲を我れ知らず放たれたと言ふ、其唄のぬしの三勝は、七八年前迄まだ當地の見番に居たのだ。

▽追分と踊り△

追分の踊りがある。

踊りであるから、筆で説明する事は、却つて其の眞趣をきづくくるの懼れがあるし、又た完全に紙上に述ぶると言ふことは殆んど不可能であるしするか

ら、其の代りに、寫眞を二箇入れて置いた。圖の如くアツシを着て、疊んだ手拭ひを首に掛け、帯を前結びにして、洗足になつて踊るのだ。背景を荒浪の荒涼たる幕で垂れ、地引を小舟の中で弾かせ、さうして白い素足を痛々しう哀曲に連れて踊る、この追分踊！其の謂ふに言はれぬ情趣は、到底筆や口で言い顯す事の出来るものでない。荒涼たる北海の自然！神威巖頭の悲劇！

追分の唄と踊りは、正に此の縮圖である。——若し北海に遊ぶの士あつて、津輕海峡に四時間の風光を賞で、足、函館の地を踏まば、一日の閑を割いて是非江差の町に立ち寄り給へ。鷗島、その眉の如き優しい姿は、先づ喜んで迎えるであらう。果ても知らざる遠き日本海の蒼波を點綴して、しろき鷗のはなの如く翫る翼は、寂しき旅

情を慰むるに充分である。

旅宿に着き、一風呂浴びて、さつぱりしたならば、町の夕べを散策に出でたまへ。敗殘、壞敗、沮頹、あらゆる亡滅的文字に接し得よう。

更に杖を、寂びれ果てた紅燈綠酒の巷にひいたならば、丁度昔の色香を自慢の姥櫻に對すると一般の、言ふに謂はれぬ哀愁を覺えるであらう。——然かし、此所で追分を聞いて、初めて其眞韻に接する事が出来る。北海の荒濤は日夜碎けて、それ、其の如く鞆々と響いて来る。——遙かに小牛の寝た如き島は「江差かよひか懐しや」と唄れた大島だ。其大島と小島とは兄妹島なのに、俺は孤り離れて、と嘆じたのは濃紫色に、長く横はる、それ、其の島——奥尻島だ。札幌見たいな平原で唄ふ追分と、大島小島に對して、浪の音を聞きつゝ唄ふ江差追分と、其差はどれ程であるのだらう。——

(完)

▽江差沿革誌▽

白帆の影

荒れなば山をも崩す巨浪が、喚き叫んで打ち寄る陸は、芒の誰をか招ぐ——いたづらに、嵐に弄るゝもみぢめな……。烟る潮は遠く對岸の津輕は海路幾十里、蝦夷地には、蒙昧な土人より棲んで居るものも無かつた。それが一日、秋の天高く晴れた沖合遙かに、鳥の翼か？雲のちぎれか？白い帆影が見えるのである。これぞ、内地人の木道に渡つた最初で今を距る事七百二十一年前、後鳥羽天皇の文治五年、頃は秋のはじめであつた。之等は、源頼朝が奥州を征した時、津輕地方の人間の遁れて渡航したのである。所は明瞭には分らぬが、今の福山吉岡邊りであつたらしい。

渡黨

彼等移住した内地人は、其土人とは一際婚嫁相通せず、別

に群を樹て、兩者の間截然たる區別があつた。史上に見ゆる『渡黨』と言ふのは、實に此の最初の渡來人を稱したのである。後殆んど五十年、文暦年間、鎌倉兇徒の捕はれて木島に流された者が多かつた。この頃から漸々、内地人の移住する者が増加して、今を距る四百六十七年前、後花園天皇の嘉吉三年、安部貞任の後裔安東盛季なる者が渡來して、自ら下國氏と號して島民を慰撫したので、威望一身に集り、をのづから其の棟梁を以て推さるゝに至つた。

胡奢慶允の亂

後十一年、享徳三年に若狭の國、武田の族武田信廣は、其臣工藤祐長佐々木繁綱等を率ゐて、上の國の蠣崎季繁に倚つた。此信廣こそ即ち、松前家の始祖である。長祿元年東部夷酋胡奢慶允、兵を擧げて大いに寇した、勢猛烈を極め、中々沈歴し兼ねて見えたので、茲に信廣は決然と

して起ち、季繁及び下國盛季の子、安東恒季等と力を戮して討伐の軍を進め
た。六月、胡奢魔允の兵と大いに七重濱に戦つたが、衆寡敵せず、味方は散
々に討ち破られて、あはや危ふい場合となつた。信廣偽り走つて朽木の中に
匿れたのを、斯くとも知らず胡奢魔允父子は、後を逐ふてたづね來り、朽木
の邊で所在を捜す所を、信廣、獲たりと弓を射て難なく胡奢魔允父子を斃し
た。衆事の不意に驚いて神だと信じ周章狼狽する所を、信廣忽ち大刀を揮つ
て躍り出し、電光石火賊酋の首數人を斬り落した。膽をつぶした賊等はどつ
と潰れ出したのを追撃し、それから連戦連勝、夷の諸部落を震懾せしめて、
同年無事凱旋した。

下國氏亡ぶ 信廣の此効績、大いに季繁に惚れこまれる所となつて、遂
に其請を容れ、彼の跡を嗣いだ。長祿元年七月、上の國天の川の畔り、新た

に築いた勝山の壘に於いて、盛大なる建國の大禮を行つた。當時移住民士民
雑居の地、東西五十里、其間莊司あるもの十一箇所、皆、砦を擁して信廣に
服従した。其子光廣の時代、恒季の暴戻を怒り、家臣と謀つて明應五年遂に
之を殺した。かくして後五年、明應十年に至つて下國の一族は、全く亡びて
了い、東龜田より西熊石に至る間、悉く其の領土に歸してしまつた。

松前と改姓す 慶長四年(三百十一年前) 信廣四世の孫、慶廣、大阪に上
つて徳川家康に謁見し、携ふる所の家系と蝦夷全島の地圖を上つた。此時渡
島地方を凡べて當時松前と呼んで居たから、直ちに取つて其姓を松前と改む
る事とした。此年江差に檜山番所が置かれ、お奉行が來た。

江差の開闢 抑々江差はいつ頃から開かれたであらうか? 既に慶長年間
檜山番所が置かれた所を見ると、此時は既に蠣崎氏が最初據つた上ノ國より

開けてあつた事は勿論だが、扱て其開闢の年月となると、茫漠として分明しない。史を調べると、上ノ國村に眞言宗の僧秀延が上ノ國寺を開基し、同じく眞言宗の僧旭威が泊村に觀音寺を創めたのは、共に今を距る凡そ四百七十年前、嘉吉年間の事であるが、翻つて江差を見ると、其頃未だ寺院も神社も何も無かつた、現在の寺院中、尤も古い歴史を有してゐる金剛寺さへ、創立されたのは寛永元年（二百七十七年前）であつた所を見ると、上ノ國村、及び泊村の開闢は、江差に約二百年を先んじたものと言つて能い。

島

然かも江差沿革誌を茲へ書くに於いて忘る可からざるものは鷗島である。蓋し松前氏は、海利を以て歳入となす故に、管下の二要港江差と函館に、奉行所を置き船舶搭載の貨物に課税した。厭でも應でも近海を航行する船は江差へ入港しなければならぬ、之が繁盛の根源となつた。此

事は産業の篇にも書くから茲にはたゞ之だけにして置く。

行政上の變遷

或時は幕府に屬し、又た松前氏にかへり、煩さい程の變遷を重ねた。文化四年（紀元二千二百六十七年）幕府、松前氏の蝦夷全道を收め、直轄する事となつたので、松前には奉行を置き、江差には上計及市正などと言ふ吏を置いた。後文政四年、再び松前氏に復したので、江差を以て、代官勤番所とした。ところが安政二年二月、又もや幕府で直轄する事になり同時に江差も幕府の管轄となつたのである。越えて元治元年七月、乙部から以北熊石迄は、三度松前氏に屬したが、江差は尙ほ幕府の所轄に屬し、そのまゝ維新の後に及んで、或は弘前縣に併せられ、或は青森縣に編入され、遂に函館縣の管轄に屬したが、十九年同縣は廢せられ、北海道廳が置かれて三十三年に及んだが、同年七月自治制の施行と共に、從來の二十六町即ち、東

新町、北新町、中新町、川原新町、片原町、詰木石町、豊部内町、九艘川町、中歌町、姥神町、津花町、濱茂尻町、酒田町、彌陀堂町、切石町、影の町、佐平治町、上の町、法華寺町、新地町、新地裏町、澤茂尻町、中茂尻町、小平澤町、碓町、寺小屋町と、五勝手村を合して初めて江差町と稱せられた。

戸口

今を距る百四十九年前、寶曆十一年に調べられた記録によると、江指村家數三百六十軒と有り、後二十年を経て、天明年間には、既に戸數八百餘戸に増加した事が同じく記録にある。ずつと飛び越えて、明治元年頃には、戸數二千戸に人口約一萬人を有してゐた。其尤も増加した三十一年には、戸數四千三百數十戸に、人口二萬三千八百、本道西海岸では、小樽に次ぐの戸口を有してゐたが、鯨漁の減退と共に、漸時衰微して、又た前日の例もなく、最近の調査は人口一萬に戸數二千弱である事を報じた。

▽地 貌△

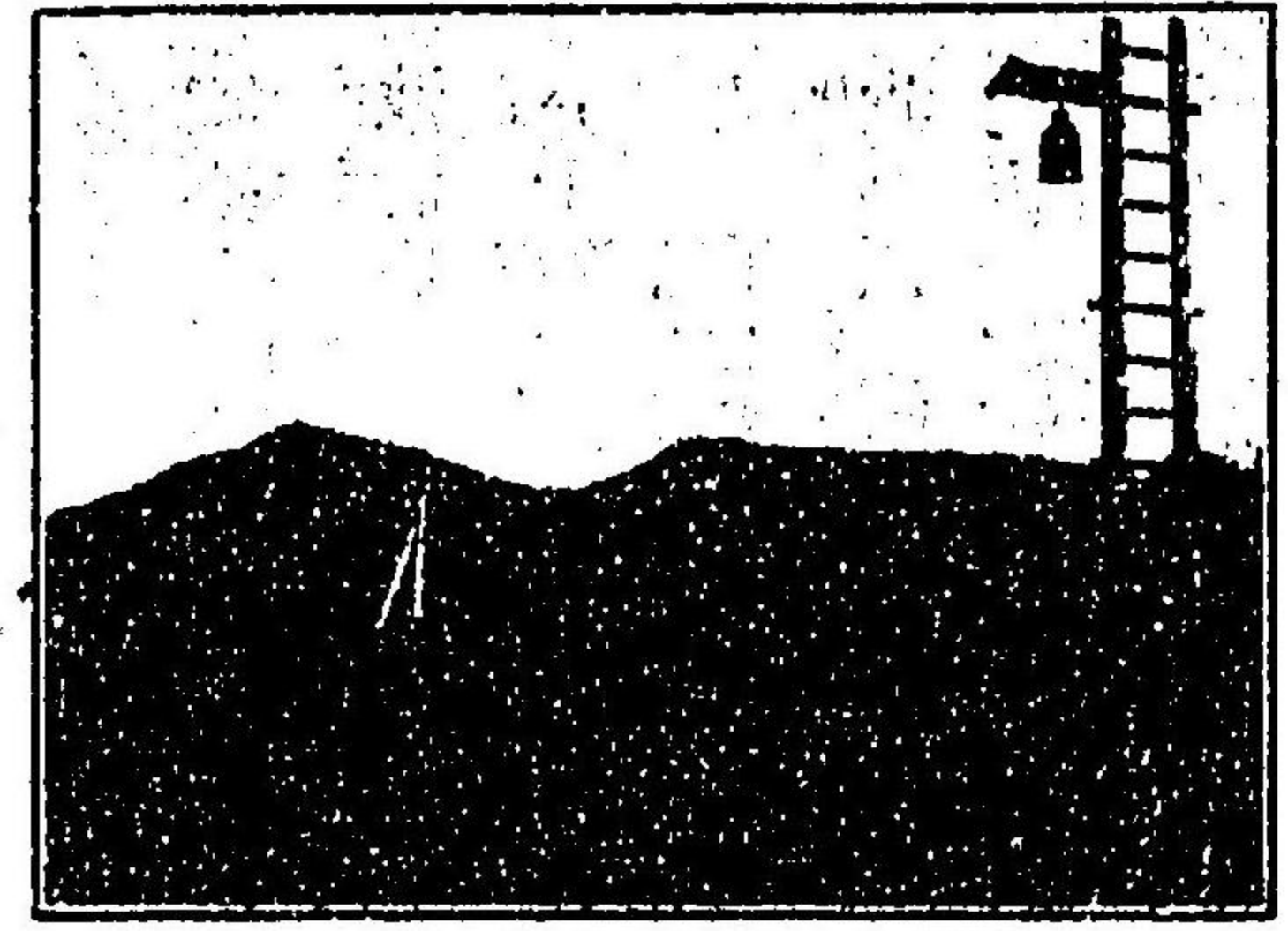
地形

北海道の南端、渡島半島の中央部に位して、前に渺茫たる日本海を控え後ろに波濤の如き岡嶺を背負うて、東經百四十度八分三十秒、北緯四十一度五十二分十秒、海岸線は一體に岡嶺直ちに海に迫ると言つたよ
うな所のみ多く、西より東に狭く北より南に長く概ね傾斜を作して連なつた
る一帯の市街こそ、我が江差町である。

山岳

八幡岳(海拔三千尺) 篠山(海拔二千百八十尺) 元山(海
拔一千八百尺) 此の三つの山が、江差町の後背を成して居る。豊部内川に添
うて奥へ僅かに二里餘、臥牛の如き姿をして居る篠山は、上ノ國村の夷王山(海
拔二千一百尺)迄、約二里の山脈の北端となつて居るので、山上には篠山神社

があつて毎年舊五月の節句を以て其の登山日とされて居る。それと殆んど兄弟の状をなして、直ぐ北に元山が屹立して居る。圓錐状の山形より推するに往昔は旺んに黒烟を漲らした活火山で、今は暫く冷たい夢に陥ちてゐる休火山か死火山に相違が無い。頂上近く溶岩質の巨石が有つて、その邊



む望を山元山篠りよ内部豊

里十八町、豊部内町と川原新町を横貫して詰木石町を經、海に入る。大橋中

河川 豊部内川は源を篠山々麓に發し、延長一

草の外に樹木が殆んど絶無である。記録に依ると、徳川年間一時、鉛を探掘したと云ふような事が見える。此元山篠山の東南には八幡岳がある。

橋上橋と、三つの木造の橋が懸つて居る。假川は同じく一里十餘町、源は篠山字龍巻で西流して、五勝手村字濱中に至つて海に注いで居る。其他九艘川等二三あるが記する程の物が無い。西二里上の國には天の川、西北三里土場村には厚澤部川がある、此の二川は附近に於いての二大川である。

港 灣

久遠郡帆越崎より、南檜山郡石崎村に至る一體の弓形をなした海岸線に依つて、形づくられた灣を名づけて江差灣と言ふ。江差港は其中の一港であつて、陸地を距る二百三十四間に嶋島が横はり、風波を遮つて停泊船の夢を衛つて居る。周圍二十四町餘、島上には嚴島神社と三等燈臺とある。此の島に依つて生れた港内は、港口左六百十六間、右五百八十一間、横五百十四間、水深七間五尺二寸、遠礁、伊丹礁の二暗礁が在る。

▽氣 候 △

温 度 江差は、北海道中、福山を除いて尤も暖かい土地と言はれて居る。之れ日本海を北へ奔る暖潮の、割合に陸地に近く接近してゐるのと緯度の南なると東北に山岳を負うて居る故であらう。一年中の最低温度、零度以下八度乃至九度で、最高二十八度である。

雨 雪 概して七月中は降雨多く、亞いで六月九月である。雨量は多くないが積雪は中々多量である。十一月初旬、時に依ると十月下旬霜が初めて結ぶ。初雪は大抵十一月上旬である。どうかすると、二月下旬三月上旬など、思ひ出したような大雪が来る事もあるが之等は、柔らかな春の雪なので、間も無く山の如き影も消えて了ふ。

▽交 通 △

概 況 往年、江差兩館間に鐵道を布設せんとして、有志者は百方に奔走して三十年、遂に政府より渡島鐵道布設の假免許状を得たが、其後連年の地方の不況に累せられ、着手するに至らずいつか幽霊の如く立消えとなつて了つたが、鯨漁の復活と共に今や人氣引立ち、地方發展策として再び渡島鐵道熱が燃え上り、其筋へ輕便鐵道布設の請願を出だし、當局者の容るゝ所となつて、近く數年後に、多年地方人全部の喝望し來つた鐵道開通を實地に見得る事となつたが、現下は、舊と同じく陸地は馬車或は馬背に依らなければならぬ。翻つて海路を見るに、兩三年廢絶された函樽定期船は、今年夏季より政府補助の下に、以前の如く航海を開始する事となつた。其他沿岸

廻りの小汽船は、絶えず旅客荷物の運送に従つて居る。

鶴山道

江差から函館へ出るには、是非鶴山道に依らなければなら

ない。尤も北海道鐵道が開通してから以後は、本郷村から汽車便によるので現今客馬車の終點は、江差と本郷になつて居る。行程十四里十六町餘、毎早朝雙方から馬車を發して、中間中山峠の晝飯所で其旅客の交換をやる。道路は大抵三間から廣い所は四間あるが、中間中山峠の難所は、險崖に沿ふて路を切り開いたので、處々土くづれした箇所や何かのために二間位しか無い所も有る。かて、江差から行く時は、峠路十餘町、阪甚だ急で客を乗せた儘輻を通じ得ないので、止むを得ず旅客は馬車を降りて歩行せねばならない。殆んど九十九折なる急阪を、汗押し拭ふて漸く頂上の中食宿まで辿り着いた時は、誰しもほつと一息つかぬ者はあるまい。鼻息荒くふうく言ひ乍ら、



松の谷の島鷗を望む

空車を牽いて馬が馭者の鞭に追はれて来る。——頃には既に本郷馬車到着して待つて居るのが常だ。此中山峠は、峻崖に沿ふて眼下に鶺川（厚澤部川の支流）の奔流が、激湍岩を嚙んで白沫を漲らすの光景、然かも此の邊り車輻の印する這幅甚だ廣からず、一鞭の操執を誤れば、萬に一寸丈の深密に落下する事絶無を保し難い。初めての旅客には、誠に夏猶ほ肌に粟を生ぜしむるものがあらう。

稻倉石

もとく鶺山道は明治十九年改修したので、初めて、辛ふじて人馬の通行が出来るように開鑿したのは、記録に依ると實に安政六年である。そして鶺山道中山峠何れも鶺川に沿ふて開鑿されてあるから、従つて橋梁の數に甚だ乏しく無い。——その一つ、長いく鶺山道が漸く盡きて、道は次第に峠にかゝらんとする所、人は其の白ペンキで書かれた稻倉石橋の

四字を發見するに難くは有るまい。一日の行程十五里間、之が尤も奇勝を以て其名高き稻倉石である。橋上に佇つて俯瞰すれば、十丈の眼下奔流と相争つて一巨石の横たはるを見るであらう。打見たところ長さは三間もあらうか高さ二丈計りの、覗き込んだ所臥牛の如しとても形容し度い、その頸部とも言ふ可き所にくぼみがある、开れへ落ち崩れた土へ根を張つて、一本の樹が枝を伸して居る。明治元年十一月十二日、賊軍の將、松岡次郎四郎、兵二百人を率ゐて五稜廓より二股口間道を通り、突如として守備して居た松前の兵を襲ふた、衆寡敵せず守りを棄て、松前兵の潰走したのは、實に此の稻倉石である。

熊石久遠潮棚

潮棚には、江差から壽都に至る假定縣道に依る。里程二十九里三十五町餘、乙部、小茂内、三ッ谷、相沼内、泊川、熊石、長磯、平田

内、久遠、太櫓、其他の諸村を経て潮棚村に至る。途中の熊石村は戸數九百餘戸を有して、江差以西潮棚までの市街地である。以前は此の熊石まで馬車を通つて居たものだが、近年旅客の減退と共に、いつの間にか廢めて了つた。

小砂子山道

福山へは小砂子山道に依る。其里程十七里七町餘、北、上ノ國、木ノ子、汐吹、石崎、小砂子、原口、江良町、清部の諸村を経て福山へ達する。江差から以南、上ノ國迄は道路平坦、車輛を自由に通じ得るが、それから前きは、或時は荒濤打ち寄する濱邊の道に出で、或時は胸を没する雑草の山間の道に入り、殊更ら小砂子山道の如きは、道路峻嶮、其難道を以て名高いものである。であるから旅客は、厭でも應でも馬背か、或は膝栗毛に鞭打たなければならぬ、こうした状態であるから、今では殆んど陸路は旅客の跡も無く、概ね海路に依るようになって了つた。

木子内山道

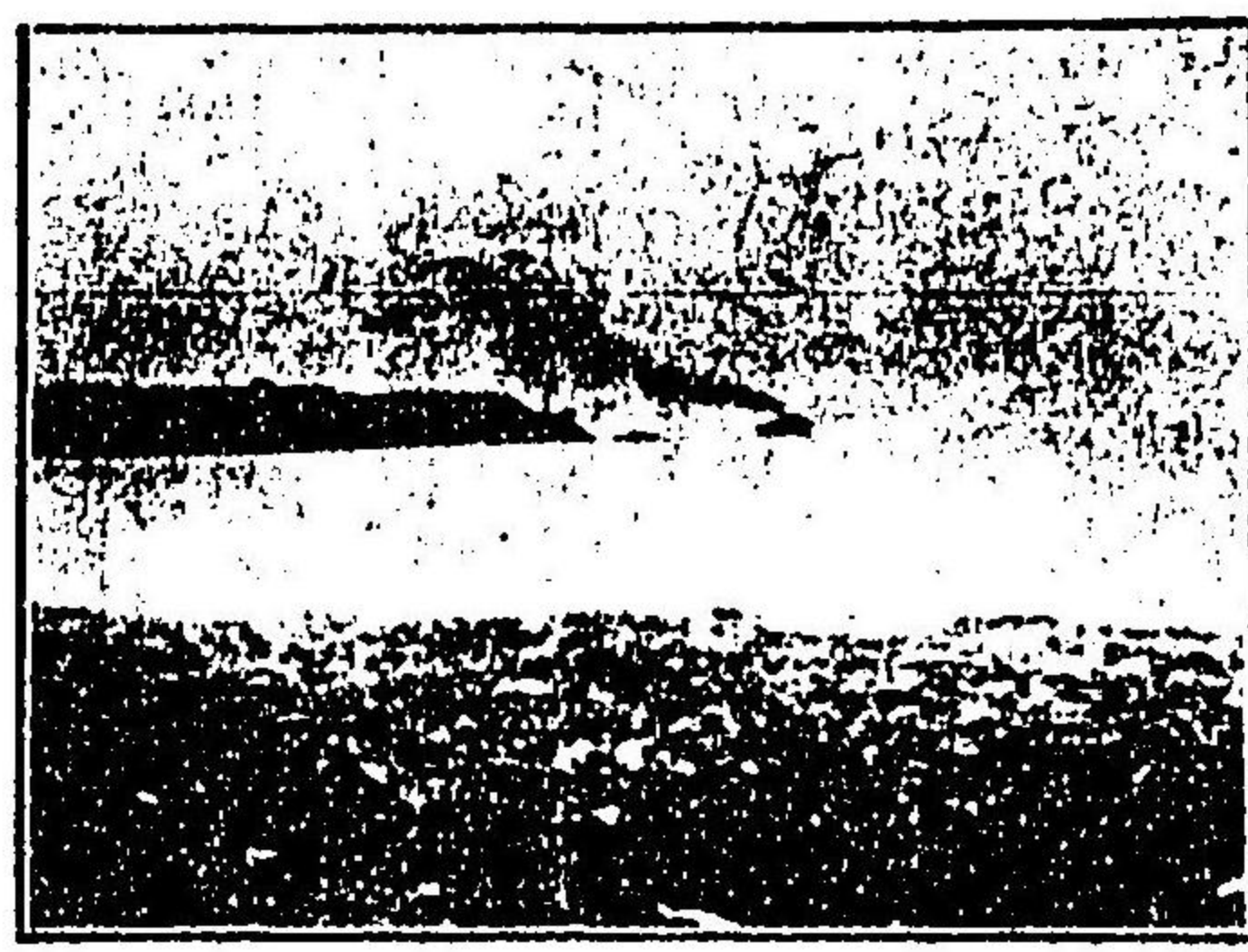
山道の開鑿ならざりし前は、旅客は皆此の山道に依つた。近く布設さる可き筈の函江輕便鐵道は、此の山道を利用して布設さる、計畫て有る。

海上

明治三十二年、江差の有志が率先して唱導し、函館壽都岩内内の有志と呼應して、兩樽定期船の必要を議會に請願し、運動の勞空しからず、國庫の補助を得て同年より、日本郵船會社の定期船が、沿岸江差、壽都奥尻、岩内へ寄港する事と成つたので、其爲めに各地方の商業界に大いに貢獻したが、後一年程して、或る事情のため中止した、再び又た開始する運びがついたが愈々四十年を以て期間が充ちて、暫く中絶して居たが、當地方の商人は、大いに其不便を感ずるので、茲に三度定期開始問題を議會に提出して、愈々その容る、所となり、今秋（四十三年）より又々郵船會社の船舶の

寄港を見得る事となつた。其他函館瀬棚間の定期航路が有る。途中福山江差

熊西久遠太樺奥尻瀬棚と寄港するので、五日間に一度づゝ航海する。其他は其折々で、冬期には出入共に船舶は甚だ不足であるが、春季から夏季へ掛けては、出入が大いに増加する。函館へは八十一哩、通常八時間を要し船賃一圓三十錢。壽都へは八十四哩で一圓五十錢。しかし二三百噸内外の小汽船が多いので大抵熊石久遠瀬棚などへ寄港する。凡そ十二三時間を要する。漁期等の際すると、時に青森へ直航するものもあるが、之等は極めて稀で、北越地方敦賀山陰方面へ往く船も又た甚だ其便に乏しい。



旅 館

交通機關が發達すればする程、之が旅客に満足を與ふる旅宿の設備に愈々改良發展を要するもの有るは言ふ迄も無い。我が江差の旅館は如何であらうか、特に交通の一篇内に此の項を加えた。先づ陸路であつたならば本郷からガタ馬車に投ずる、一日散々揺られ抜いてヤレ、漸うの事で日も暮れかゝる頃、今迄の道とは眼界一轉、山から抜け出て海岸に近い路を駛るようになる、最早や間ちかく江差の市街は海に沿ふて長蛇の如く連つてゐるのが分り懐しい灯かげが、招ぐやうにチラ／＼と瞬いて居る。やがて轆轤たる響と共に市街へ入ると、忽ち提灯を振りかざして「お客様は御座いませんか。」と飛び乗る客曳きに接する事であらう。汽船であつても同じ事に、矢張り客曳きに出掛ける。重なる旅店は各地に比して設備は割合に整頓してゐて宿泊料が甚だ廉だ、そして電話も設けられて居る。

▽ 風 俗 △

北海道志時代

餘り以前の事は記する程の事も無い。今、北海道志の記事を抜萃して讀者の一餐に供しよう。『松前(今の福山町)の西十八里に江差あり、地狭く俗樸なり、民は吏を懼れて敢えて法を冒さず、山に盜賊なく市に乞丐なし、倉庫を山に造り監守を置かず、其風俗の美、松前地方の及ぶ能はざる所なり。』と有る。然かし之れは、風俗の美と言ふよりも暮しの豊かであつた反證と見るが至當である。又曰く『松前函館江差の三港は、三陸二羽加賀能登越後佐渡大阪肥前等と海船相往來し、大賈富商互いに貿易して利を營み、各北地の一都會たり、故に其民多く奢侈を好み遊宴に耽り、小利を規せず生計に疎なり。』前に述べた如く、生計が裕かであつた所へ、もと／＼漁

業を本位とした土地である。加ふるに各地の船舶が常に輻湊すれば其住民の氣が次第に派出やかになり、華美を好むに至るは元より不思議は無い。それに、土地の住民と言つた所が、多くは津輕秋田地方や越後佐渡近江などから一帯で渡來した人間が多數を占め、それ等が偶々好運を捉えて一かどの資産を造るようになる、一方には極く儉約な側が出来ると共に一方に、随分花やかな事をやる人の出て來るのも不思議はない。要するに北海道志の記事は其半面を而已書いたので、單にあれ丈の記事で全部を推定するのも妥當を得た解釋で無からうと思ふ。

言語

扱て言語となると、北海道の各地に見るが如く、實に混沌を極めたもので、或は南部秋田地方の俗語あり、或は北越佐渡方面の俗語あり、或は遠く近江地方の言語もあると言つたような有様で、之等が轉じ訛つ

て、茲に一つの江差辯と言ふものが生れた。今其の一般を示さうなら、

あんちや	兄 <small>あに</small>	うづげる	あまへる
有るべ?	有るだらう	うんと	たんと、の意
あくど	踵 <small>かかと</small>	おち	弟 <small>おとうと</small>
あさあぢ	鮭 <small>さけ</small>	おんこ	弟 <small>おとうと</small>
あんこ	十五六から二十位迄の男子を卑稱した語	おぼさる	背負はれるの意
あべ	來い。行かう	おがる	生長する
いくべや	行こう	おつかない	怖い。恐ろしい
いすい	着物などの心の儘に着こなせぬ場合の、心のまいにならぬ意	おんこ	鬼ごっこ
うづく	傳染するの意	おど	父親

かしげる	傾ける <small>かたむ</small>	けれ	呉れ
かつばがへす	扱へす <small>あつか</small>	けつ	尻のこと <small>しり</small>
からがく	結ぶ或は縛る <small>むす</small>	けろつと	悉く、或は残らずと言ふ意味にて形容詞(副詞)
かいしき	雪掻きの事 <small>ゆきかき</small>	こんだ	今度 <small>こんど</small>
がめ	白禿瘡のこと <small>しろくそう</small>	こわい	疲れた <small>つか</small>
かっちゃやく	引つ掻く <small>ひつか</small>	ごしよいも	馬鈴薯 <small>ばしんじよ</small>
かはねかんとす	買ひませんかの意にて女の間にも使ふ	こまる	かどむ事 <small>かどむ</small>
きもやく	腹を立てる <small>はらた</small>	ごっこ	どもりの事 <small>どもり</small>
きびちよ	急須の訛り <small>きゅうず</small>	ごつぺかした	失敗した。或は手違ひしたと言ふ意味也
きじ	格闘して直ちに引つ掻いたり何かする亂暴の意味にして子供間に使ふ	こつぺ	出しゃばるな、或は小癪などの意
くべれ	薪や炭をさし入れよ	これびまつこ	これ計し <small>はか</small>

さつてば	稍々ともせば <small>やや</small>	しが	氷柱 <small>つらら</small>
さんばやし	さんだわらの事。俄の口底にする被ひ。	せき	下水、どぶ
じたら	そんならの意	だはんする	子供などの駄々。又た酔どれなどの理不悉なる言ひ争こと
じたら	産所の流しに用ゆるたわしの事を言ふ	たな	幼児を背負ふに使ふ帶
しばれる	寒い ^{さむ} の意	だば	ならば
じだらく	身持のしまりなく放縱なること	だす	呉れる
しやべる	口数の多い不足にかかはらず物言ふ事	たもづかる	絶る、取りつく
したはで	で、あるから	ちよっこり	一寸の間 <small>ちよつと あひだ</small>
しみる	凍ること <small>こほ</small>	ちようす	弄るの意 <small>あそぶ</small>
したつて	ではあるが	ちゝ	母親の事 <small>はは</small>
しばや	芝居、演劇 <small>しば</small>	ちよびつと	少しばかりの意 <small>すこ</small>

つらつけない	厚顔の意 <small>こうがんのい</small>	のこ	のこぎりの略稱にて殆んど全部に通用せり
づつぱり	澤山 <small>さわさん</small>	はんちや	半纏の事 <small>はんてんのこと</small>
でめんとり	日雇人 <small>ひよとひにん</small>	はさ	箒の事 <small>はらき</small>
とろけ	間拔の意 <small>まぬけのい</small>	はまつた	道路の悪い所などにて水溜り或は泥深き所などの陥りし場合
どんざ	木綿糸にて刺し子としたり上替の事なり	ふむくる	むしる事 <small>むしること</small>
なげべちよ	泣きみと	べちやらい	平つたいの意 <small>ひら</small>
なづき	額 <small>ひたい</small>	べこ	牛 <small>うし</small>
にわ	土間を言ふ <small>どまをい</small>	べろ	涎の事 <small>よだれ</small>
ぬくい	暖かい <small>あたたかい</small>	べろかけ	涎かけ <small>よだれかけ</small>
ぬる	乗るを誤りて發音する者多し。但し下流社會。	ほつぺた	頬 <small>ほ</small>
ねまる	坐る <small>すわ</small>	ほるく	拂へ落す <small>はら</small>

ほいと	乞食 <small>こじき</small>	もつちよこい	くすぐつたい
ぼう	追うの意 <small>お</small>	やばちい	汚いと旨ふ意味にて濁つばい、汚穢の意
まちこい	まばゆい	やっこい	早く、來 <small>こ</small>
まゝ	飯のこと <small>めし</small>	ゆまさ	腰卷、湯もじ <small>こしまき</small>
まかなう	身仕度する <small>みじたく</small>	わや	不仕舞の意にて、混乱して手のつけよう無き事
まさり	小刀 <small>こがたな</small>	わらし	小供等、の意 <small>こどもら</small>
みつたくな	醜い。不體裁 <small>みにく。ふていさい</small>	わっぱ	曲げ物 <small>まがもの</small>
むつたり	始終。何時でも。常に。等の意	わからぬ	いけない。できない。ならない。の意
めんこい	可愛らしい <small>かあい</small>	をんちや	次男と言ふ意。下流社會に限る
めっこ	片目、目つち <small>かため</small>	をんじ	同じく次男のこと。下流社會
めっこめし	半煮飯 <small>はんにえめし</small>	をどこ	父親のこと。同じく下流社會

そんげやの事 そのやうな事を
意にて女の用語
そんならこと そんな事を……

そてなしけや 然うぢや無かつたらう。
或は、そうぢやないか
ら見れの意
そだべ
そうだらう！

など到底枚擧に違が無い。尤も之等の言葉の日常使はれて居るのは、殆んど下流社會のみで、上中流では今ではちよつと、内地の各地方と大差ない。週々交通の頻繁になるに従つて方言が滅びて行つた。たゞ悲しいことには發音の不完全である。チとツ、シとス、どうしても明瞭に發音し得ない、殊更いとキ、エとエなんかは、殆んど注意すらも拂つて居ないのである。甚だしいはいとエを違つて平氣で居る。猶ほ、如何にも物言いが荒々しい、能く言ふなら活氣があつて潑刺たりとても評し得ようが、その亂暴な、下品な會話は甚だしく聞く者の聽覺に不愉快な感じを與える。北海の氣候の凜烈として、

變換の急激なのや、荒々しい日本海を控えて居るなども、大いに之等の源因となり來つたのであらう。

衣 服

實用、實用、常に之れが附いて廻つて居る。そんな物は體裁はいゝが後の洗濯が利かない、茶絲が入つて居るから弱い——中々綿密な注意が行き届く。既に斯うした考であるから、平常は多く木綿物のゴツ／＼したのを着て濟して居る。然かも之が袂物ぢや無い、中流以下全部それが妙齡の少女であらうと何であらうと、殺風景な茂尻を着て居る。それへケバケバしい友禪メリンスの前掛を締め、襟のかゝつた絆纏を羽織ると言つた習俗見得も何も有つたもんぢや無い、然かも之が『よく稼ぐ感心な娘』として捌け口が能いのであるから、誠や需用供給上止むを得ぬ現象かも知れない。それが最う、三十四と年の多い女となると、愈々以て實用の化身とでも言

い度い位の、かてゝ加えて氣候が酷寒であるから、一朝世は冬の領となつて、毎日／＼吹き亂るゝ雪に明かし雪に暮れて、寒さは肌を透すと言ふ頃になると、唯だ之れ着ぶくれて、激しい冬の力と相闘ふ準備に日も猶ほこれ足らず女のたしなみ等と言ふものは暫く忘れて居る。或る程度迄止むを得ない事なので、意氣を尙ふものあらんやだ。斯様な始末であるからして、夏の浴衣着の時だけ僅かに儼しい姿を見る事が出来る。實に今の日本の服装のうちで、中形の浴衣着の姿



江差頭巾に包んで、ゴム風靴でギウ／＼と進歩を運ぶと言ふに至つては豈夫れ驚かざる

くらの女に調和の能いものはない、然かも此の唯一の浴衣着の時さへも、尙ほ且つ茂尻を用ゐる者が多い、开して一般に柄の好みが地味で、苟くも、あんな派出なものと、人に後ろ指をさゝれまいとして居る。之に準じて男の方の柄の好みも一般に質素である。ところが之と正反對に、必ず備ふ可きものとして各戸それ相當の紋付を持つて居る。しかも之は喪式の時とか、婚禮の時とか或は元旦の回禮の時無ければ滅多に着ない。兎に角總じて衣服は實用の二字の下に律されて居る。

銀杏返しと束髪

頭髮は男女共に内地と格別の相違を見ない。唯だ各村落

へ入ると、悉く男子が髪を分けて居るのが目に立つ、之と言ふ原因も何もない。謂はゞ一時の流行で、しかも安價な俗悪なチツクをぬり付けて居るのが多い。女子は多く銀杏返しに結つて居る。丸髷は割合に少ない、町家の娘達

は矢つ張り銀杏返へしに結つて居る、尤も近來追々東嶽が勢力を占めて來た彼の一時都鄙を風靡したひさし髪などは殆んど見る事が出來ない、之も土地の人情が一體に眞率な反證であらう。正月とか盂蘭盆とか、改つた事がある

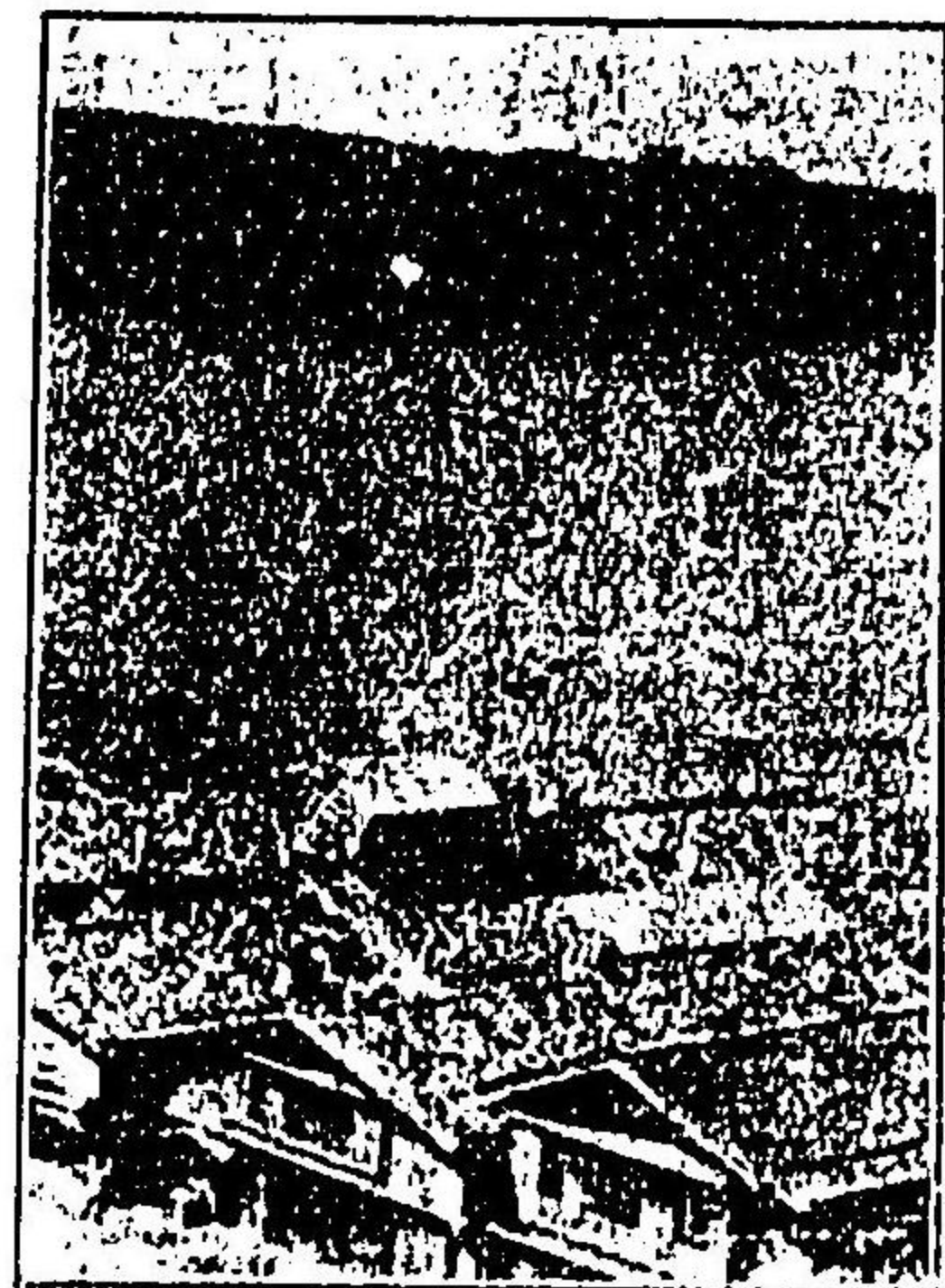
家屋

北海道は概して風が荒い——前に荒々しい日本海を控へ、猛烈な西風に露出しにさらされた江差の地勢は、どうしても之と闘ふ準備をしなければならぬ。——そろそろ落葉がする頃から天は險惡になり勝て、もう十一月に入ると、高く紺青に澄み互つてゐた空も鉛のやうに暗鬱たる雪もよひとなつて、偶々小春日の美しく晴れた日があつたとて、決して油斷が出來ない。一生懸命に冬籠りの仕度に忙がしい、戸の破れを打ち付ける、屋根の破れを繕ふ、と一日、不思議と雨が暖かく降り注ぐ、見る間にそれが

細かくもつれて行つて、忽ち轟と叫んで來る篠山あろしに横しぶくと、やがて急激な気温の變化を感じる——頃にはもう羽を千斷つたやうな粉雪が凄まじく吼え猛る暴風と共に、世は早や我が有と言はん計り、あらゆる勝手氣儘を悉して荒れ廻るのである、此の恐ろしい冬が來春の三月までは續くのだ。此の長い——四月あまりと言ふものは、雪に明け雪に暮れて、懐しい蒼空を仰ぐ日が指折る程しか無い。されば世はいつか點滴の音斷續して、折々雲間を渡る、陽影も春めいた色を投げ掛くる頃になると、初めて人々は生き返つたやうな晴々しい顔に『春が來ました。』『暖かになりましたねえ。』と言つて歡ぶ。あゝ斯く迄に凌ぎ難い嚴冬、其百有餘日と云ふものは、殆んど毎日風が吹きつゞける——時には屋を揺り家を蕩かして、夜もすがら夢路の結び兼ぬる幻つ氣に、いつか長い夜も明けゆく事もあると言ふくらゐ。恐ろしい風

の力と對抗して行かんがため、内地と家屋の建築法が著しく違つて居る。先づ直ちに目につくは、一般に家の造りが低い事と、屋根の柱木葺きである。しかもゴロ／＼大きな石を重しにしてある。何故瓦を多く用ゐないかと言ふと、茲に二つの理由がある、曰く僻卑な土地であるため、瓦を思ふやうに得難いのと、普通の瓦は寒氣のさびしい爲め往々破碎する事がある故である。漬物でも致るやうに石を上げておくのは、暴風に屋根を捲り上げられぬ戦闘準備だ。誠に由々しい次第で、しかも山々しい而已なら未だしもだが、此の爲め何れほど市街の美觀を傷くるか知れない、ではあるが之も止むを得ないのだ。も一つは、二階に障子や硝子戸を建てた家が殆んど絶無で、大抵高さ一間に横一二間位の宛格子戸造りにしてある、之も風の猛威に對する避難である。そして雪國では何處でも見る事だが廈が深い、従つて家内が陰鬱て何

となく濕つぽい。東北から北國へ掛けての人間が、如何にも進取の氣象に乏しく、其の癖皮肉な所があつて概して陰險なのは、こうした建築法の關係も幾分かあるのぢや無いかしらと思はれる。唯だ一つ他地方に勝つた、先づ誇る可き物がある。



家屋の概観

京地方の如く黒く塗らない、皆な白壁で物々しい。大いに地積の廣濶なのは、誠に此のためである。

江差が戸口に比して

人情

忘憚なく言はうなら今の江差の文明は、總べてに於いて約

十五六年も二十年も遅れて居るだらう。最近の思潮などは微塵も江差の天地に動搖を興えない、未だ昔しの夢を食つて息をついてる、然かし之がためにかへつて一般に物事に眞摯——まア眞剣で、苟も没義道の事や非理な事は、赦す事あるまじく眞面目に構えて居る。で有るから、義理堅く正直で、然かも成可くなら、土にかじり着いても我が生れた土地を去るなどしまいと云ふ覺悟をもつて居る。此の愛郷心は一方に甚だ進む事を懸念がり厭惡し勝ちになり、退嬰主義固守主義の根原となつた。然かし一利一害は數の免かれぬ所で此の固陋主義あるために、總じて投機的事業に手を出すものが少なく、細く長く主義で押し通して居る。そして親切氣に富んで居て犠牲の精神を有してゐる事も美點だ。吾人は茲に結論を興えまい。たゞ此の雜駁に書き飛ばした數行を以て讀者諸君のほしまゝなる推察に任ずる事としよう。

其 他

商店の飾り付けや店員の風俗を観察ると其土地の景氣と人情の幾部分を察知する事が難く無い。我が江差は此の點に於いて僅かに『消極的』の三字で説明が悉さる。派出な事を行れば忽ち買客の信用を失墜するのにおそれが有る、深い紺暖簾の蔭、つくねんと店員は若い顔をしてるのが其の一般だ。年始を除いては、年末にも暑中にも一軒として華々しく賣出しなどをやるものが無い。若し問はるゝ事があつたならば彼等は答へるであらう曰く『賣出しなんてやつたつてお客さんが來ないでせう……』。野菜類は町にも八百屋はあるけれど、多くは近在から駄馬につけて賣るに來るので日常の用を足して居る。その賣人は概して若い女が多い、赤い脚絆に草鞋をつけて、紀州ネルや伊太利ネルの眞四角な切れを三角に髪を包んで、後ろ手に手綱を曳き乍ら『大根買はねかんす——豆買はねかんす——』と

ふれて歩く。其の調子は中々面白いが文字の上には顯す事が出来ない。——
今度は肴屋だ、此地では五十集と言つて居る。沖で釣つて來た漁師は、大抵
其獲物を一箇所ある魚市場へ賣り渡す、魚市場から五十集が請ける、そして
各自に町をふれて賣り歩く。男の方は春に木で作つた蓋をして、秤を天秤
棒にとうして擦ぐ。女は、高さ二尺位に、脊負ひやすく平たく捲らへた一種
の箱——兩脇を入れるために綱で輪が作つてある、それへ腕を通して、矢張り
中の魚をふれて賣りに出る。『鯨かはねかーんす。』『鯨買はねかーんす。』但
し男は『買はねかーんす』はつけない。内地に見るが如き勇肌は夢にも見る事
が出来ない。多く女連の多いのにか、老いぼれがヨチ／＼と汗を絞つて
噎れた聲に不景氣なふれ聲をしてる。未だ／＼有るが限りある紙數がゆるし
ないから本項は茲に擱筆する。

▽産業△

沿革

天然の無盡藏なる我が北海道の海産は、其の以前未だ未開
の時代、土民等が生活の代は、春は練や鯨、夏は鱈や昆布、秋になれば鮭を
獲り、冬は鳥や獸を追い廻してそれで譯がすんだ。随つて凛烈たる嚴冬と相
戦ふ爲に貯へらるゝ薪採り、或は衣服を織ると言つたような事は全然女子の
仕事と極められて在つた。斯くして渠等は朦味なる口を送つて居たが、漸々
内地人が入り込んで來た、やがては交易が初まる、熊の皮や其の膽と米と取
りかえたり、海豹や臘膂を一瓶の酒に易えたりした。之が今を距ること三
百九十年程前、後柏原天皇の時代である、こんな状態であつたから、従つて
耕作の必要もなく、殆んど其の何であるかをさへ識らなかつたらしい、即ち

北海道は海産から開かれて行つた。江差も同じやうに海産から町が茲に形付
 けられた。然かも一つ忘る可からざるものは鷗島である。周圍一里弱の少い
 さい島影も、猶ほ且つ長途の舟路に勞れ果てた帆を、暫し休むる事を得たの
 である。之を天が成した江差發展の三番とすれば、松前氏が沖ノ口番所を置
 いたのが人為の序幕であつた。沖ノ口番所と言ふのは、謂はゞ和關のやうな
 ものであつて、内地間との取引を行ふ船舶は、一度必す此の番所所在の港
 へ帆を下して、出入の貨物の税を納めた。松前氏は、税をとるのが目的であ
 つたが、勢ひ多數の船舶の出入は其の土地の商業を繁榮ならしめた、江差が
 メキ／＼と發達したのは實に此の沖ノ口番所が置かれてからで、其の年月は
 詳かには分らないが、寛永七年頃（二百八十年前）である。

商 業

何を言ふにも根本の原動力となる可き鯨漁の連年の大不漁

は、直接商業界に大打撃を與えて振はざる事既に久しい、沖の口番所時代よ
 り十年程前迄は、外は遠く酒田土崎新潟地方より能登敦賀、一方は太平洋沿
 岸の各地と旺んに取引し、内は近傍の各地より、進んで壽都岩内邊に至る貨
 物の集散權を握り、それ等各地の物産は一度江差の商人の手を経由したもの
 であつたが、今は昔日の俤も無い。左に参考迄に最近の輸出入表を掲げて見
 よう。

	輸 出	輸 入	輸出入總額
三十九年度	一三三三・〇六二	二二二六・七八四	三六四七・八四六
四十年 度	一八七五・六五五	二六四四・三二八	四五一九・九七三
四十一年 度	二二八二・三九四	二七八五・一八五	五一六七・五七九

斯くの如く、輸出入の均衡を保たず、年々輸入超過はあまり面白い現象では
 無いが、近來殖民地移住者其他が、事業のために投資するのが多いのと、種

三六年	四八七	五八三	〇〇〇	二七〇	三〇五五	一五七六	八〇三三
三七年	—	七五	—	三〇〇	二七〇	一〇八	六九二
三八年	—	—	—	—	—	—	—
三九年	—	—	—	—	—	—	—
四〇年	〇三	〇五	—	—	—	—	—
四一年	三三	六四	—	—	—	—	—
四二年	三二	七八	—	—	—	—	—
	九二	九七	—	—	—	—	—

即ち明治三十年は實に二十萬五千五百石の豊漁であつたのが、翌三十一年は十三萬五千石に減り、更に翌三十二年は八萬六千八百石の減收を見、爾來年々其收獲を減じて遂に三十九年九十九石と言ふ情ない程の結果を見るに至り漁業家の倒産頻々として相踵ぎ、誠に由々しき事態となつた。斯くして續々他地方へ移住する者出稼ぎする者が出來たが、忽然として明治四十一年沿岸全體に亘つた數十年來見ない鯨群の大群來を見た。老いたるも若きも狂喜して慌てふためいたが肝心の漁具は、連年の大不漁に皆賣り飛ばして終つて、

賣れ残つたポロ網が僅かに、納屋藏に片づけて有つたと云ふ騒ぎ、眼の先に巨萬の財寶を見乍らむざむざと手を束ねて地團駄踏んだ。それでも二萬六千石餘の收獲を見たが、之が若し十年前の如く漁具が揃つてあつたならば、三十年の大漁に決して劣らぬ好結果を見たのであらうにと、其當時皆殘念がつた。道廳より派遣された水産技師は、之れ潮流の舊に復した故であつて、今後は以前の如く鯨の必ず群來す可き事を、以上の理由で説明した。翌四十二年は天候險惡に亞ぐに險惡、遂に不結果に了つたが、一度び斷念した鯨漁も茲に再び光明を得て、今年の如きは建網の統數などは、十年以前の大漁時代に劣らぬ數字を示して居る。

鹽 産

江差は元來海に臨んで而かも後ろは、直ちに山を負ふて居るのであるから、隨つて耕作に適す可き地積も無く、何等擧ぐ可き收獲が無

い。馬鈴薯とか大根とか言ふやうな物を植えて、日々の用に足して居るだけであるが、翻つて江差の集散権内に属する各村落の産出額を見るに、水産の甚だしく減退した今日、實に第一位を占めて居るのである。しかも海産の頼むべからざる事を自覚し來かゝつた各村民は、何れも必死に耕作の事に従つて居る。今後益々發展して行つたならば、蓋し六郡の生活は、やがて之につながるの日も遠くは有るまい。今例に依つて最近数年間の農産物實收額を金額に表すと、

三十九年 四十年 四十一年 四十二年
 一〇一〇七六七 一五二九二三八 一二五三九五四 一二九六九二七

と言ふ表になる。更に四十一年と四十二年の細かい内譯を示すと次のやうな表が出来る。

四十二年	石		四十二年	石		四十二年	石		四十二年	石	
	價	數		價	數		價	數		價	數
米	七九六九	二四八六三	大豆	七九六九	二四八六三	小豆	四〇五五	一〇六六九	小麥	二六四四	二七九
大麥	三九四八	三三〇四五	裸麥	八三三三	二六四四	其他	〇	〇	燕麥	二七九	七五八四五
小麥	二六四四	二六四四	其他	〇	〇	合計	一〇一〇七六七	三三〇四五	合計	一〇一〇七六七	三三〇四五
合計	一〇一〇七六七	三三〇四五	合計	一〇一〇七六七	三三〇四五	合計	一〇一〇七六七	三三〇四五	合計	一〇一〇七六七	三三〇四五

◀圓と石は位單字數▶

即ち水産物で鯨が其首位を占むるが如く、農産では米でなく大豆が第一位となつて居る。兎角地味の具合や季候が水田に適せず、却つて大豆や麥がよく出来るから右の表のやうな具合に成つて來たので有らう。表中の其他と有るは、或は馬鈴薯或は大根、南瓜葱のやうなものから以下、あらゆる物を網羅

したので、總産額の三割から四割強を示して居るのを見ると、之れ又た中々
 悔る可からざるものである。

其 他

林産畜産工業品鐵産物等は特に一つく擧げる迄も無いか

ら一束として之が統計をお目に掛けようならば、

	畜産	工業品	林産物	鐵産物	合 計
三十九年	六〇・五三五	一八四・九七九	二〇三・五一八	二三八〇〇	一五五〇・五七三
四十年	八九・七六〇	五九・三五〇	二六二・二二二	六八・八七一	二二〇一・四八三
四十一年	九三・四〇〇	六四・九三六	二〇七・一四二	一三三・五七八	二〇八七・二三九

右のやうな次第で、林産物が第一位を占めて居るが、之等の物は多く他地方
 へ出るのぢや無く消耗して了うので、但し畜産だけは逐年盛んにならんとす
 る趨勢が有る。

▽官署學校△

檜山支廳

北海道廳檜山支廳は、中歌町五十一番地に在り、管轄區域

は檜山爾志久遠奥尻太櫛柵瀬の六郡で、支廳長一人、屬官八人、技手二人、
 事業手十人、事業生三人、雇八人で事務を處理して居る。本年から土木課は
 函館土木派出所へ在勤を命ぜられたので、事業手技手事業生一部は函館へ引
 き上げた。

江差警察署

檜山支廳と同一の建物で、階上を支廳に階下を警察署に充

用してゐる。檜山爾志久遠柵奥尻太櫛の六郡を管轄して、上ノ國乙部熊石
 久遠奥尻柵利別に其分署を置いてある。外に新地町入口に巡查派出所を設
 けられてゐるが、津花町の水上警察署は其後廢止された。事務は警部一人警

部補一人、巡查二十餘人（分署在勤を除き）を以て處理して居る。人情の醇朴と地方の不況とからして概して犯罪事件に乏し。

江差區裁判所

法華寺町百十五番地から百二十三番地に跨がつて居る。管轄區域は桧山爾志久遠奥尻太櫛瀨棚の六郡で、出張所を、乙部熊石久遠瀨棚奥尻の五箇所に置いて登記事務を執つて居る。判檢事各一人、書記四人の外若干の雇を置く。

桧山稅務署

元法華寺町に在つたが移轉して現今は切石町に在る。函館稅務管理局に屬し、管轄區域は支廳警察等と同じく、稅務屬八名と、雇三名て其事務を分掌して居る。

江差郵便局

切石町から四十一年中歌町の新築局舎に移轉した。特定三等局で、局長一人の外若干の事務員其他を以て事務を執つて居る。法華寺町

と九艘川町の二箇所に無集配の郵便局を置き、一般の郵便事務を執つてゐる四十一年、特設電話が架設されてから、其交換所を局舎の一部に設け、目下五名の交換手が通話交換の事に従つて居る。架設者は目今七十七名で、猶ほ増加す可く遠からず百番以上に達する事有らう。

江差町役場

中歌町に在り、明治三十三年七月一日、一級町村制施行と共に設置された。町長助役収入役各一人づゝの外、若干の書記事務員雇等を以て事務を處理して居る。管轄區域は江差町一圓である。

柏樹高等小學校

中歌町に在り、一帯の丘を負ひ地域甚だ廣からずであるが遠く日本の荒浪を望む可く、近く市街を瞰下し得る高燥の土地で、教室十二を有し總坪數六百五十三坪、外に御眞影奉置所がある、土藏造りて坪數四坪、教師は目下八人より居ない。創立より卒業生を出す事五百名に近し。

署察警差江と廳支山楡



中歌尋常小學校

同じく中歌町に在り、明治三十一年、柏樹小學校の生徒増加のため、校舎が狹隘を告げ別に一校の新設を要する事となつたが、之を機とし、天性を異にする男子と女子を分離し、新校に從來の柏樹其他の女子を收容して女子小學校を開く事となつて、三十二年愈々工事に取かり翌三十三年落成開校し江差女子尋常高等小學校と稱してゐた。之を本校の前身である。然るに後再び女子小學校は廢止さるゝ事と成つて舊の如く

女生徒は各校に分れくとなつて、元の女子小學校は中歌尋常小學校となつた。校舎四百九十九坪五合、教室六個、其他唱歌室裁縫室職員室宿直室小使室が備つて居る。教師は目下七名。

茂尻尋常小學校

中茂尻町に在り、明治二十八年十一月二十日、柏樹小學校西分校として設立し、三十一年十一月八十坪の校舎を増築して翌三十二年三月より獨立して、茂尻尋常小學校と稱するに至つた。爾來年々兒童の數を増し教室の狹隘を告げたので三十四年八月三十五年七月兩度教室を増築し四十二年十二月更に運動場を増築した。校舎總坪數二百五十五坪教員七名。

五明尋常小學校

五勝手村に在り、明治十三年創立し同じく二十六年、校舎の狹隘を來したので改築し二十八年十二月開校式を舉ぐ。四十年七月更に増築工事を起し目下の校舎總坪數は百四十六坪、職員は男二名女一名。

▽社 寺△

姥神神社

その昔江差の未だ開かれざる時代に、いづこより来たか漂然として一老女が杖を茲に止め、さゝやかな庵を結んで住つて居た。不思議な事には、流るゝ雲を仰いでやがて来る嵐を知り、翔りゆく翼の影を望んで晴れたる天の忽ち雨となる可きを悟るなど、凡そ天地間あらゆる現象の豫言一として老女の言ふ所と違ふ事が無かつたので、住民皆畏れ敬ふて、神の如く思つて居た。老女も又た我子の如く住民を慈しむので、益々彼等は敬ひ事へて老女の事を於隣姥と言ふて居た。ひと年如月寒の七日月が、細いその笑顔雲間に顯はしたり、つと薄れ行つたり、夜も更け亘つた真夜中に、突如銀の如き一條の光が鵜島から老女の庵を射た。夢醒めた老女は、驚いて其の

光の影を趁ふて鵜島に至ると、折おり雲間を洩るゝ弓張月の淡いしろがねを浴みて、雪と白い銀髻の一老翁が、静かに巖の上に端座して切りに柴を焚いて居た。恐るゝ進み出た老女に、一つの小さい瓶を與えて「此の瓶の中に白色の水あり、なんぢ家に歸りてより、身體沐浴して清め、後海濱に出て柴折り焚きて、瓶を波間に投じなば、蒼暝忽ち銀と變じ、鯨と稱する小魚海濱に群來せん、春毎に之を網して獲なば、住民安らかに世を送るを得べしゆめ忘るなよ……。」と告げ了るや、忽ち柴火は消えて老翁の影も無く、たゞ岸打つ浪の碎くる音のみが夜の寂寞を破る——仰いだ老女の瞳には忝なさの涙が一杯であつた。家に歸つて言はれし如く、沐浴して身心を清め、柴を海濱に焚き、含嗽して神に禱り、瓶を海中に投ずると、驚く可し銀蛇の奔るとばかり、瓶口を迸つた一帯の白光は、忽ちにして溢れ行き潮水白色に變じて

尺餘の小魚が群來した。それと計り此の由を告げたので、住民は前を争ふて網を投ずると、苦も無く船に充ち満ちた。老女はある日、「これから後は、春毎に鯨を獲つて世々業とするならば、永く飢に苦しむ事はあるまい。」と告げ終つて、再び漂然として行く所を知らず、住民は驚いて八方に其行衛をもとめたが、遂に分らなかつた。草庵に至り見ると、一體の神像を奉祀してあつたので、何神であるかを分らずながらに、姥が神と稱へて祀つた、春秋二度此の大祭を行つて漁業を護るの祖神として居るうち、或夏一人の漁夫が、老女の草庵の下で網にかゝつた不思議な形の石を獲たので、之を靈石とし祠を建て於隣堂と稱へた。それから數十年後藤原永武と言ふ人が、彼の姥が神の神像を見て、其天照皇太神天兒屋根命住吉大明神である事を識り、此事を告げたので、其奉祀する箇所之餘りに海濱に近く時に波浪の害を蒙る事が有つ

たので、斯くては畏れ多しと、正保元年現下の地に奉遷し、安永二年於隣堂をも次いで移して折居大明神と稱した。此の姥の神こそ、縣社姥神太神宮であつて、市街の中央姥神町の後ろに丘を負ひ、參差として枝差しかはす樹間に拜殿の瓦屋根、花崗石の華表から左右に煉瓦を疊んだ瑞垣、境内八百十六坪、市街の中に在りとは雖も人あつて詣づるならば、一種の身に沁む森嚴を覺え思はず襟を正しむるものがあらう。境内には前に述べた折居大明神の外猶四社あり、菅原道真を祀つた天満宮、大綿津見神を祀る海神社、倉稻魂命を祀る稻荷神社、同じく明治十一年豊部内町より移し合併した稻荷神社、此四社である。

賢光稻荷神社

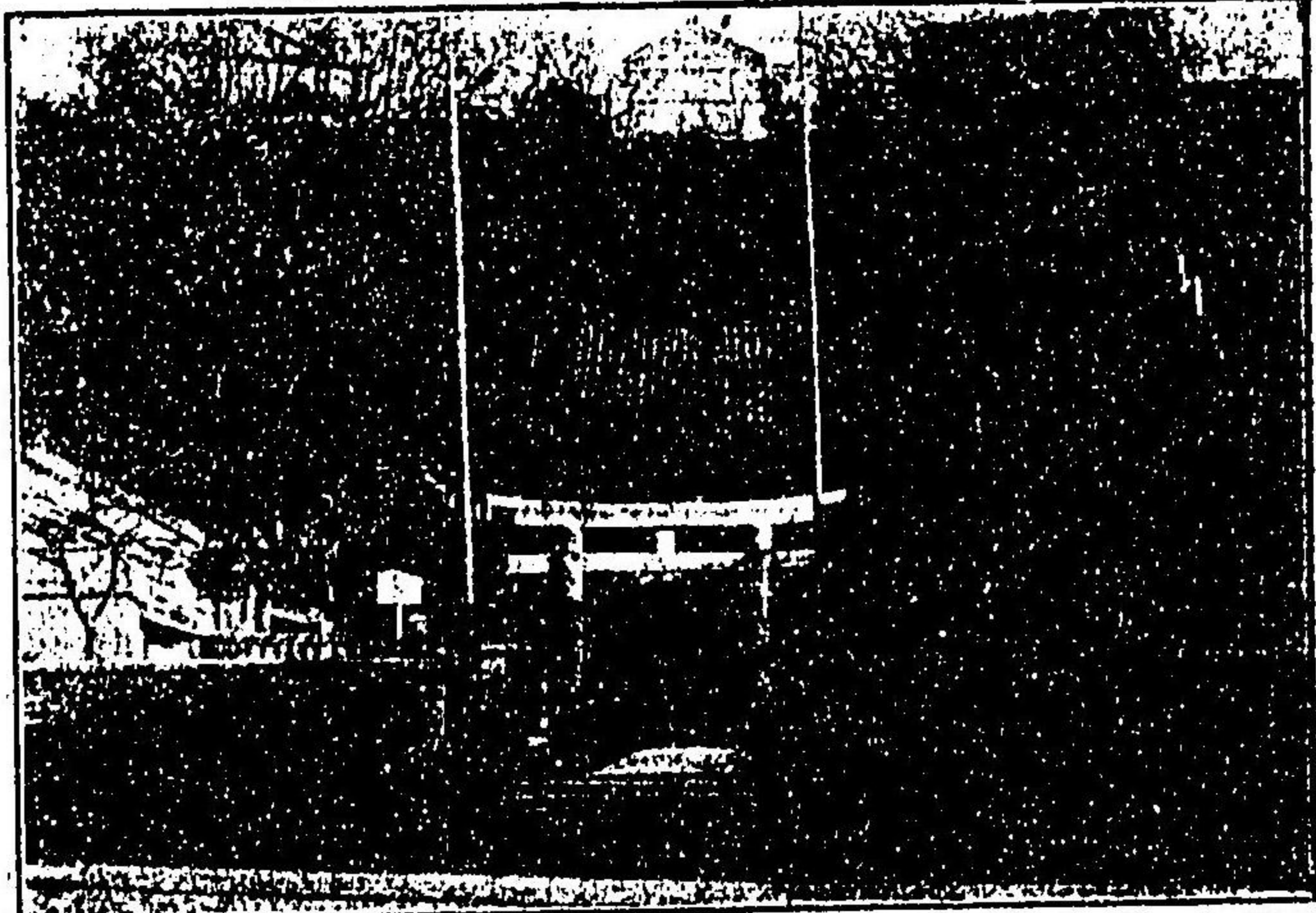
村社で所在地は新地町二十一番地字賢光山である。寶曆十二年の創立に係り倉稻魂命を祭つてある。毎年秋季に大祭を行ふので、餘興

として夜間、例年新地組合見番藝妓の寄附に係る手踊姥が奉納さるゝので之を見ようとして境内は灯ともし頃太から人出があつて大いに賑ふ。

嚴島神社

鴨宮

島一番地に在り、多岐津比賣命、市



杵鳥比賣命田心毗賣命を祭る。社格は明治元年辨天社を嚴島神社と改稱すると共に村社に列せられた。境内千六百坪、瞰下すれば足下に繋留する帆船、漕ぎ行き漕ぎ去る磯舟小舟時に月清き夕べなど、澄み互るやうな唄の聲を聞く事が出来る相な

例年初秋にお祭りが行はれる。舳船の寄附が有つて、絶えず往復して参詣人の便を圖り、餘興として相撲や撃剣などが勇ましく行れる。

檜山神社

碓町百三十二番地に在り、大山津見命を祭つてあるので、

境内四百坪、社格は村社である。例祭の時相撲の餘興が有る。

愛宕神社

村社愛宕神社は北新町六十八番地に在つて、火産靈神を祀

つてある。位置は小さい山の上で、津花崎に至る迄市街の半圓を瞰下し得可く、何となく地静寂に、自ら神氣人に迫るものがある。

篠山稻荷神社

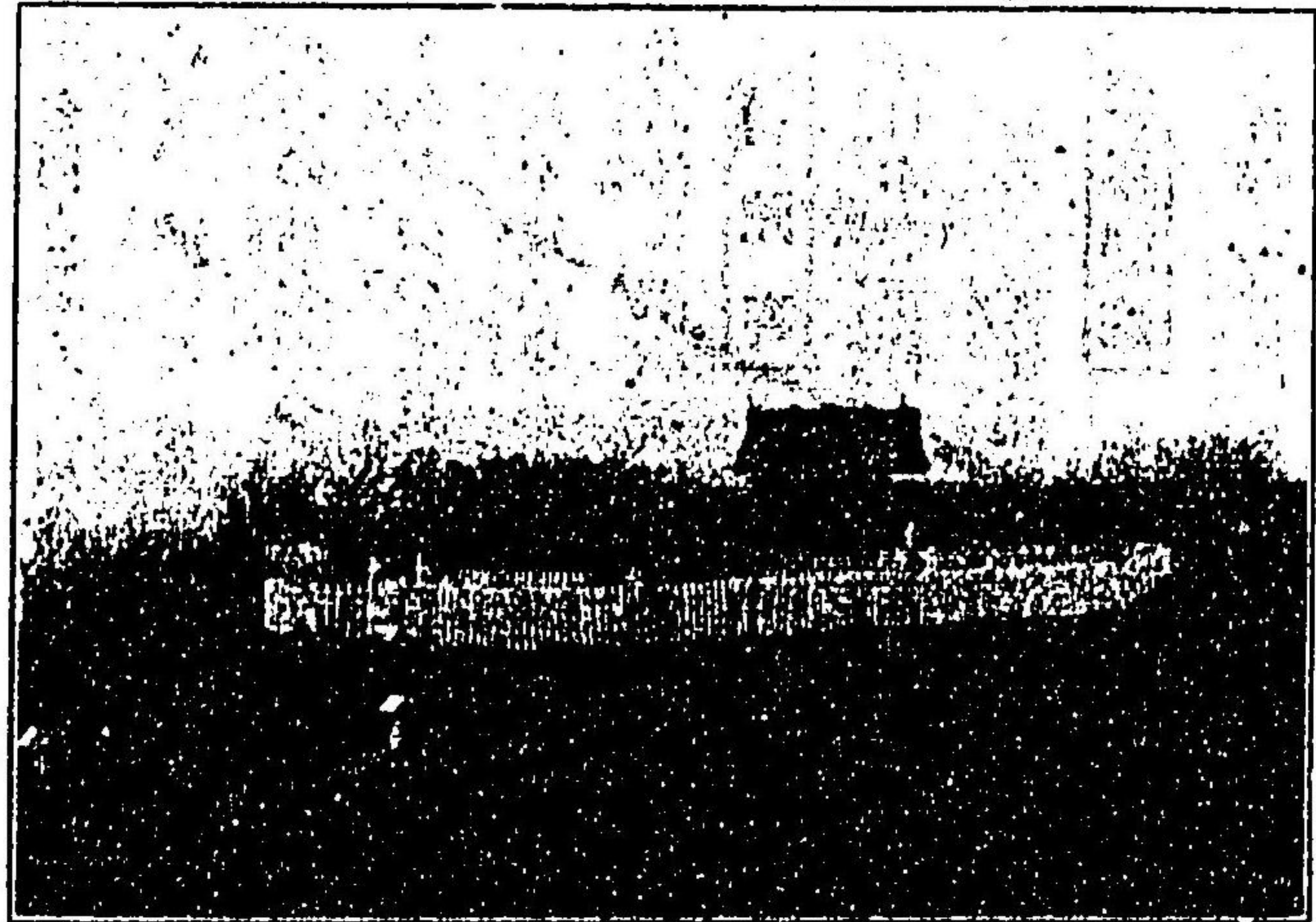
豊部内町を距を凡そ三里、篠山の絶頂にある、社格は同じ

く村社で境内九百坪、土地が二千尺の山頂にある丈け俗塵を絶つ物がある。

柏森神社

五勝手村にあり、村社で大巳貴命を祀る、境内五百〇九坪

神明社稻荷社の二社を境内に合祀してある。此他は無格社のみである。



自ら奔走して富豪の間に、之が救済の資を募つた。然るに豪家柴田與次兵衛は、戯れて和尚に向へ「こんな事は領主のする事で、事政に屬し、敢えて貴僧がこんな骨折る迄の事で無く、餘裕があつたならば施こさうし、無ければ止める迄の事では無いか、斯うして煩しくもなく戸毎に訪づれ給ふのは、寧ろ不思議に思ふ」と言つたので、怒るまい事か智雄、忽ち與次兵衛を爐側に取つてねぢ伏せ、幣を荒らげて「貴様のやうな俗漢！慈善

江差招魂社

市街の東丘角瓶山に在り、社地坪數二百八十二坪、墳墓地坪數二百九十四坪で、明治戊辰の年、松前戦争の際に於ける戦死者九十二人の靈を祀つてある。毎年七月八日九日の兩日を以て旺んなる祭典を行ふ。餘興として相撲や撃劍や、藝妓の手踊などが有る。近在からの人出もあつて以前は見世物や何かで大した賑ひで、夜間は又た煙火などを打ち上げたものだ。

嶽淨山正覺院

寛永八年の創立に係り、元祿三年嶽淨山正覺院と公稱するに至つた。明治十六年十二月堂宇舉げて焼失したので、廿二年現在の新地町字賢光山に移轉する事を許可され、二十七年六月二十六日假堂宇竣工した。此の四世の和尚に智雄と言ふ僧があつた。清貧を以て自ら甘んじ、邊幅を飾らず、大いに慈善の心に篤く常に窮民の恤救を以て私かに其快事として居た一年作物收穫無く、細民は其糊口に迷ふの慘狀に、和尚憐憫の情に堪えず、

の事を何と思ふて居るぞ、邪念の塊を此の腕で打ち碎き、たつた今引導渡し呉れて、穢れなき佛體としてつかはさう！」と言ふより早く、炎々と燃え立つ爐中の薪を取つて撲たんとする凄まじい權幕に、組み敷かれた次兵衛も家人も色を失つて只管其粗忽を陳謝して漸く救された。此一事を以ても其性情の一端を窺ふ事が出来るであらう、亂暴にして稍々奇矯な所は有つたが、兎に角時流に諛びない一風變つた人間であつたらしい。

阿彌陀寺

淨土宗末阿彌陀寺は、澤茂尻町字寅十郎澤に在り、明暦元年日本寺正行寺五世常立和尚、隱居の後渡道して創立したものだと言へられて居る。元彌陀堂町に在つたが二十四年焼失して今の處に移轉した。

本願寺別院

眞宗大谷派別院は九艘川町二十五番地に在り、承應二年福山專福寺六世淨玄九艘川町に一字を建立し、順正寺と號し弟子順正をして留

守居せしめた。天保六年祝融の災に罹り後現今の地に移轉し、明治十三年三月本願寺別院順正寺と改稱し、爾來本山から輪番を派遣さるゝ事となつた。十四年十月又もや回祿に罹り、目下の寺院は二十五年五月落成したもの、同じく二十七年七月より、寺號を單に本願寺別院と稱する事となつた。

本願寺別院

眞宗本願寺派別院は中歌町六三番地に在り。萬延元年僧堀川乗經なる者が上磯郡清水村で農夫教導の目的で一坊を開き、願乘寺休泊所と稱してゐたが、明治十一年六月江差に移り十二年本願寺別院と改稱した。

金剛寺

淨土宗末無盡山普門院金剛寺は九艘川町二十四番地に在り。眞言宗大日坊末密雲山漫茶羅寺は豊部内澤一番地に在り。

法華寺

日蓮宗本滿寺末で法華寺町五十番地に在り創立は承應二年元祿八年八月法華寺と改稱した。大雅堂遺筆と傳へらるゝ天井畫の龍が有る。

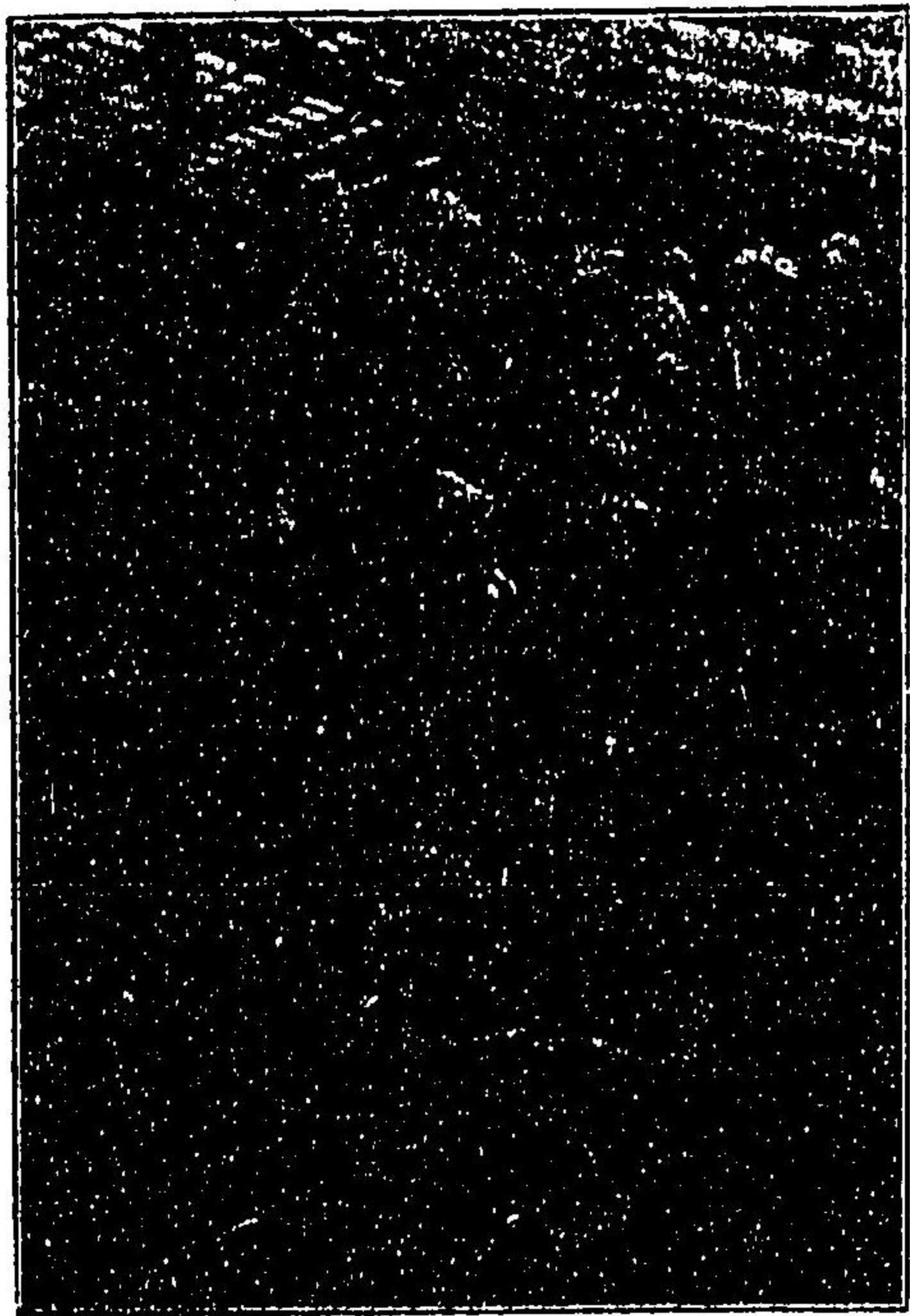
▽半面の江差△

園藝

江差は、概して園藝の趣味が普及して居る、尤も取り立てて之と言ふ程の事も無いが、唯だ秋菊の栽培のみは盛んに流行して居る、寒氣の激しいために、實生を得る事が難いので、毎年愛菊家は各地方から優秀な菊苗を輸入するに血眼になつて居る。輸入地は福山南部邊を重として、以下遠く名古屋東京あたりより、或は函館札幌など、交換をしたり、近年著しく菊花界は進歩して、本道では、秋菊の栽培に於いて正に其首位を占むるに至つた。重に花壇へ培えるので、鉢はあまり多く流行らない。一つの莖に一輪づゝ花をもたせるので、成可く丈を短かくして大きい花瓣をつけさせようと苦心して居る。十一月になると、何時雪が來るか、暴風があるか分らない

ので、天長節がすむと、そろ／＼切り出す。此の時一年の成蹟調べとも言ふ可き菊花の品評會が開かれる、そして一般の縦覧をゆるすのである。目下栽培して居る人は約二十人、追々殖えて行く傾向がある。尤も以上挙げた人数の外に、慰み半分に培けて居る人は、未だく澤山有る。左に最近の品評會に於いて優秀の位置を得た菊花の銘を紹介しよう。雨乞小町(紅) 朝日龍(淡紅)蝦夷の

江 差 の 菊 花 壇



都(淡紅)開運(白)大瀧(白)阿良々仙人(白)越の浪(白)平安城(黄)太平の春
(淡紅)許しの紐(紫)佐野の渡し(白)安達の關(紫)神遊(外黄内紅絞)紅雲龍
(紅)等が有る。此他、朝顔や盆裁の類も、同好者の間に熱心に騒がれては居
るが、要するに菊花を除いては江差の園藝界に取り立て、言ふものが無い。

演劇

花の廓の大通り、奥へ突き當つて正面に、平屋建ての建物
之が江差に於ける唯一の劇場江差座だ。観客は優に一千人を容るゝ事を得可
く、此町の劇場とすれば相當の建物と言つて差支ない。扱て観客の演劇眼の
程度と言ふ段になると、何しろ連年の漁の皆無に起因する町の衰退と共に、
近年碌な一座を見得る事が難くなつた。そして新舊何れが歓迎さるゝかと言
ふと、青年子女間はいざ知らず、其七割通りは舊派の方に手を上ぐる事であ
らう。新派劇も、未だに下らない筋書風のもものが歓迎さるゝ傾があつて、不

如歸や己ガ罪乳姉妹位の所で、もう消化し得ない。尤も之は観客の悪い計
りでは無く、之を演ずる俳優が俳優であるからでも有らう。ケレンやドン
チャンが斯うして嬉しがられる。舊派には、比較的眼が高いやうに思ふ。

其他の藝界

江差の藝界は、今述べた新舊の演劇の外に言ふ可きものが
一つも無い。近年非常な勢力を以て都鄙を風靡した彼の浪花節などは、お隣
りの函館へは雲右衛門でも風右衛門でも奈良丸でも樂遊でも京山でも小圓で
も始終來るが、此地へは來ない。浪花節とは何んなものか、知らない者が多
からう。絃もの鳴ものとなると、良家の娘達に琴へ通つてゐる者には乏しくな
いが何地も同じ事、三味線などは大いに卑められて、苟くも良家の子のかき
鳴らす可きものに非ずと排されてゐる。之等は藝妓か、或は行々藝妓になら
うとする卵とも見る可き小娘の間に而已殆んど限られて居る。

文學の觀念

最近我が江差に如何なる雑誌が多く讀まれて居るか、先づ各書店に就いて調査すると、實業の日本太平洋婦人世界等が首位を占め、次いで純少年少女雑誌、太陽婦人畫報文藝俱樂部演藝畫報等が重になつてゐる、文學雜誌では文章世界ハガキ文學新文壇秀才文壇などの比較的級の雑誌が各々十部から二十部位入つて居る外、中央公論趣味スバル早稲田文學等になると、精々七八部から甚だしいは二部三部と云ふ有様、之を以て見ても一般の文學的趣味の如何なる程度なるかを察知するに難くはあるまい。概して文學に對しての觀念は、極端なる戯作者待遇と言ふの外なく、懷手で、のらりくらりと勝手な事を書いて賣るのがまア文士で、小説と言ふものは勿論暇つぶしに見る可きもの、草紙紙に少し毛が生えた位のもと思つて居る。最近の小説を解するのは一部の狭少なる範圍に限られたる青年子女間で、之等を

外にしては、現今でも弦齋と言へば文豪であると心得、其作品日ノ出島や小猫は不朽の傑作だ位に考へて居る人ばかり多い。一葉や西鶴などと言つても恐らく名も知るまい。かと思ふと、田舎新聞などの誇張した穿きちがいを遵奉して、一も二もなく、自然主義と言へば、卑猥文學肉慾小説だと信じて居るらしい。新しい文學が、丁度夜明のあの清々しい冷たい風の如うに、未だ昨宵の夢を食つて居る寢臭い室の空氣を一新するの日は、蓋しいつの日になつたら實現するゝ事か、前途遠しと言ふ可しだ。此點に於いても青年は常に先覺者で無ければならない。近來喜ばしい現象としては、假令それが狭少なる範圍に止まるにしてからが、新しい文學を研究する青年の、漸次殖えて行く事である。それから一方、俳句が一部の人に或る程度迄熱心に研究されて居る。しかし之などは忌憚なく言ふなら、まづ低級なものだ。

▽江差變遷史△

夢の如き繁榮

げに世の中は何一つ、春、花なりし榮華の夢の、いつか凋落の淋しき秋に遇はて果つ可き。祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色盛者必衰の理を顯す、奢れる者も久しからず春の夜の夢の如し——然なり、春の夜の夢の如き、思ひ見れば過ぎ去りし我が江差町の繁盛よその昔——英吉利の詩人、パーシー、ビッシ、シエレーは、羅馬の亡びたるを見て其の情抑え難く、滿腔の熱誠をかたむけて、

あわれ、羅馬は亡びたり、

それとも辨かぬ舊墟の、

たゞ山なすを君も見ん——

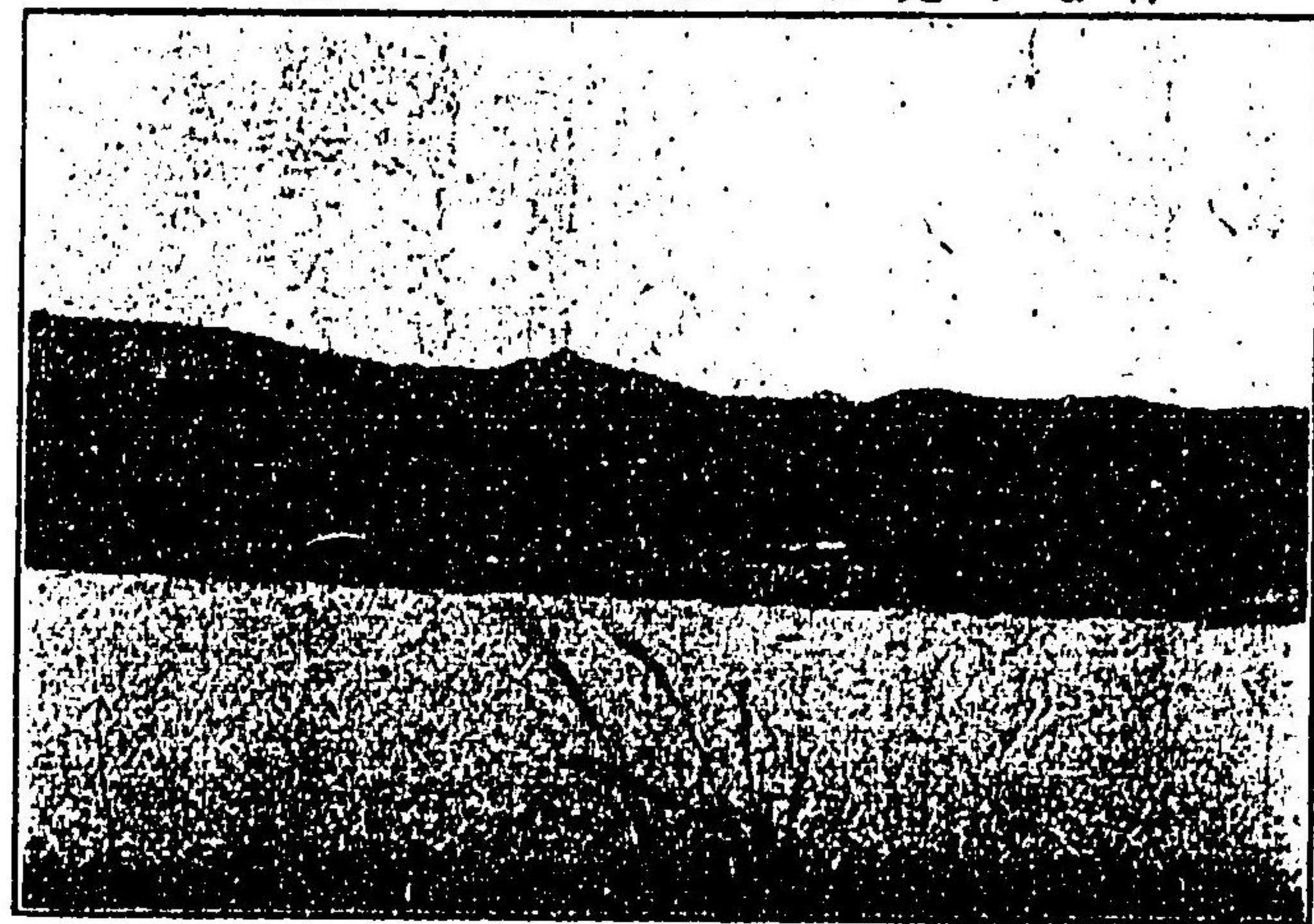
自然はひとり衰えず。

と歌つたが、噫わが江差の衰亡も誠に此の感がある。實に其以前は、

江差の五月

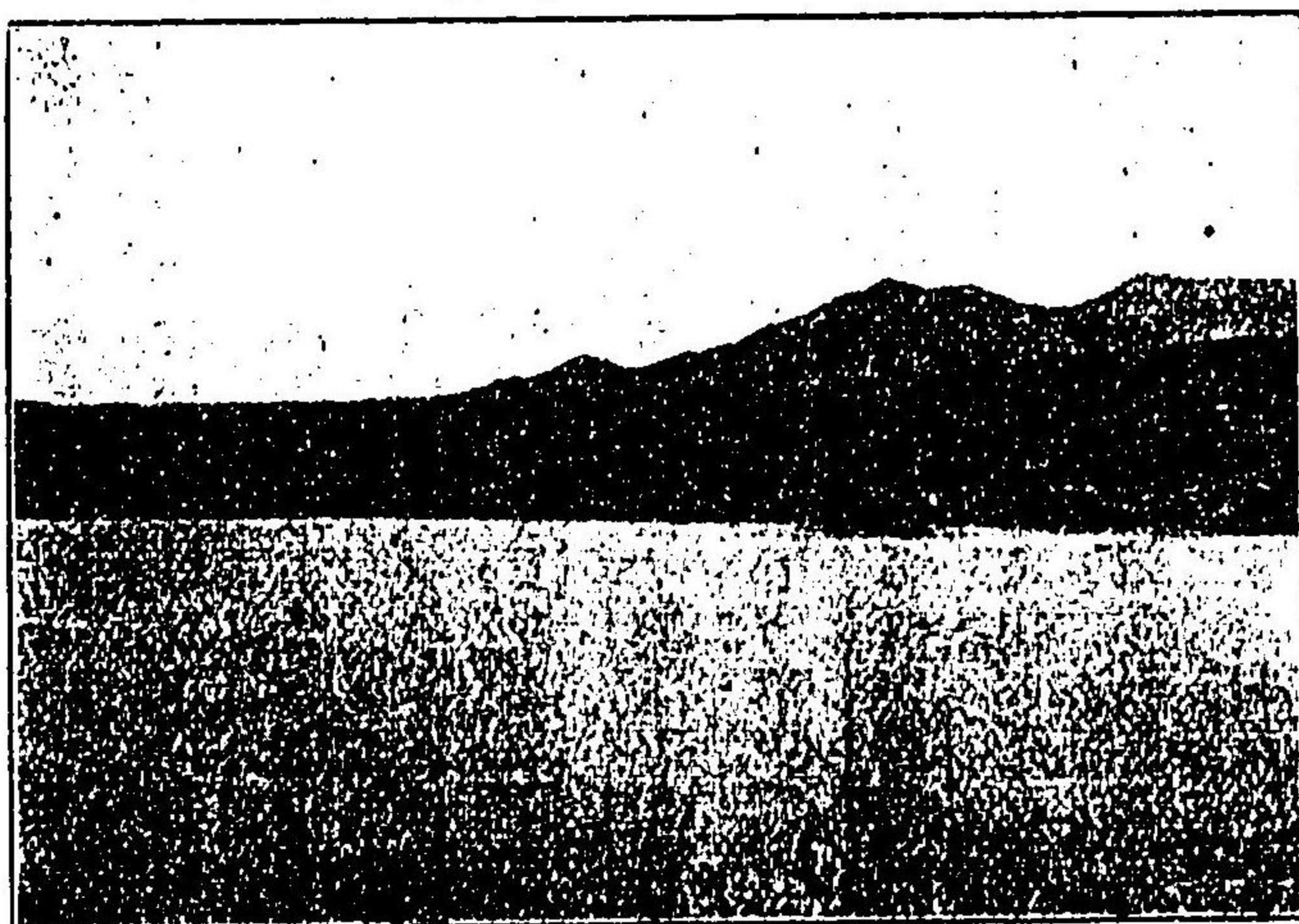
は江戸にも空いと唄はれた。茲て又た少しく記事が産業の篇と重複する所は有るが、沖ノ口番所の事を説明しなければならぬ。松前氏、船舶搭載の貨物に課税して、乏しい勝の其財政を補ふと思ひ立ち、城下の福山と、江差と兩館、此の三港に沖の口番所と言ふものを置き、沖ノ口奉行を遣して之を司らしめた。即ち此近海を航行し其領域内に於いて賣買する一切の貨物は、此の番所の検印を得なければならぬ、江差は前に横たはる鷗島に依つて、和船の出入の便あるにかへ、此の人爲的の繁盛策は、更に江差をして長足の進歩を促した。遠く壽都岩内小樽邊までの貨物集散権は、斯くして容易く江差の掌に落ち、商業は旺んになる、一方重要な海産——殆

んど其生命を制するかの観が有つた鯨漁
 は連年大漁に次ぐに大漁、豊漁に亞ぐに沖
 豊漁で、萬民鼓腹、又た生活難を咄く者
 が無かつた。此の鯨漁に、建網差網の別
 がある。委しくは紙数がゆるさぬから極
 く大體を説明しやうに、建網は元と南部
 地方より傳習し來つたので、安政年間、
 三つ谷村の阿部吉右衛門なる者が、初め
 て試用したと傳へられてゐる。鯨漁期が其
 來ると、豫め一定の海面に大きな網を建
 て、鯨が産卵しようとして陸岸近く滑



集し網に入るを待つて引き揚ぐるので、梓船起し船と二艘が、時化で網を建
 てる事の出來ない日を除いて、晝夜鯨漁期中は一定の位置で網をたてゝゐる。
 此一統に要する經費は五六百圓から八百圓を算する、其代り一朝鯨群の大來
 集の際さうならば、天候さへ佳かつた日には僅かに數日で五百石七百石の收
 獲が出来る。差網と言ふ方は、鯨が群來してから、小舟を出して投網するの
 で、網の種類も違へば、同より規模も少なく收獲も同日の談では無いが、資
 金の無い者は之より致し方無い。开れから直接漁業者では無いが、仕込みと
 言ふ事を職業にしてゐる者が在る。薄資の漁民、如何にやさもきした所で六
 百圓七百圓と言ふ金を支出して建網を建てる事が出來ない、そこで漁場や漁
 具を抵當とし、年限は當年限として、收獲の幾割かを利息として收める約定
 の下に其の資金を資本家に仰ぐのである。一朝薄漁に了つて借りた金を返済

(二 其) 街市差江るた見りよ沖

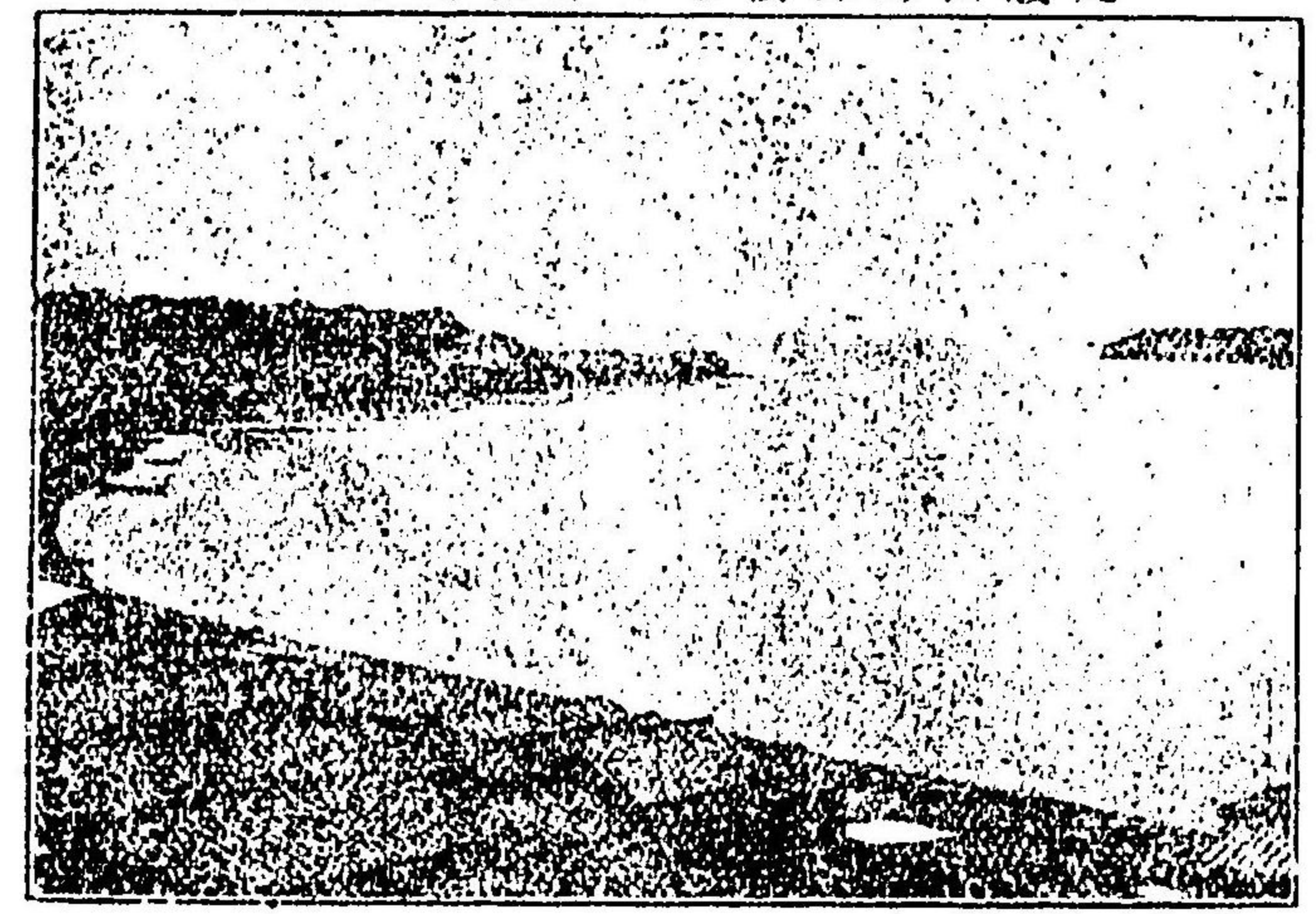


する事が不得いとなると、漁場漁具の一切を提供し名義を變じて資本主の有となし、翌くる年は、之を貸貸の名義で使用を請ふので、其年の收獲て之等の負債全部を償還するのだ。然かし不幸三四年も不漁が續くと忽ち漁業者は倒産して資本主の損失を受くる事となる。然かし此の江差全盛時代は、幸に睡ぐに幸來れるの觀があつて、連年大漁く、鯨を獲ると言ふ事は置いたものを拾へ上げる位にしか考へられてゐ

なかつた。仕込する者も借りた者も雙方従つて泰平無事、加ふるに奸黠なる資本主になると、漁業者などの無智なる者の多いのに付け込んで、随分不當な暴利をむさぼつた。幸なる哉、斯くても年々の豊漁は面倒な悶着を此間に生ずる暇も無く、仕込の親方には逐年白壁の土藏が殖えて行き、漁業者は春一月の勞力は後は寝て食へ食つては寝、又た來る春迄一年間、譯もなく夢のやうな日を送つて行く事を得た。殊更ら五月は、鯨漁を了つた尤も懐ろの暖い時だ。遅い北海道の季節は此月に入つてから櫻も桃も一時に笑ひこぼれて自ら人の心も浮立つに、鯨身欠積取て港一ぱいに福湊した和船の荒くれ男も、當時積丹より奥地へは内地人の女は通行をゆるされなかつた故、其墓底を傾けて遊情を此に慰めた。日夜絃歌湧く由々しい景氣、興行物は絶ゆる間迎も無く、それが皆素晴らしい人氣でたゞもう往來は織るが如く、狭い街は真に

湧き返る賑ひを呈した。斯くして（江差の五月は江戸にもない）と唄はれた、
 遠来の客をして、その華やかなる繁盛に驚駭の眼をみはらしたのであつた。
影の町の殷賑 天保十四年の頃、安宅伊兵衛と言ふ人が、新らしく新地町
 を開いて、上野町切石町邊に散在してゐた茶屋三十軒を纏めて自分が世話方
 と成つて移轉し、公然遊廓地として官許されるのと之と同時に、影の町が大い
 に繁昌し出した。それ迄は單に、餅屋蕎麥屋うどん屋のやうなものが、女を抱
 えて居て客席に待らせて居たのが、いつか貸座敷娼妓と紛はしいものが出来、
 斯くては弊害が多い所から明治十五年、遂に其筋より遊里として許さるゝに
 至つた。其頃此町の町幅は、非常に狭く苦しいもので、蜘蛛の如うに抜け合ふ
 小路く、甚だしい箇所になると僅か三四尺しかない所もあつた相で、何の
 事はない、軒下をくゞつて歩くやうなものだ。夕暮から宵へかけて船の者達が

九艘川町海濱より花崎を望む



多勢ゾロ／＼と出掛けて来る『むらし
 やい！』『お休みなさい』『寄らない？』
 など、言ふ叫び、からかふ聲、酔つばら
 いが来る、忽ちわー／＼といへ喧嘩の
 人集り、巡査が奔る、懶次馬が續く、そ
 れが一問かせい／＼二間の道路で出来
 る事だから堪ら無い。能く怪我も無か
 つたもの。江差の繁華の中心は殆んど
 此町であつたのだ。
帆橋林立 星移り物變つて、順
 風に浪をさる眞帆片帆の時代はいつし

か昔の夢と残り、其昔、浦賀へ来た時には「それ黒船よやれ黒船ぞ。」と、時の政府の膽をてんぐり返さした其黒船が、津々浦々まで影を見せない所も無く、海上の通商機關は汽船となつた今日は、水深浅い鴨島の内へは錨を投げる事も出来なくなつたが、未だ千石船何反帆など、言つてた時代は、それでも立派な港であつた。潤い集散權は我が掌に在り、沖の口番所は在り、遠く近く凡そ近海を馳せゆく程の船は、しばし紫の倒影淡きかもめ島かけ、その帆を下していく日かを茲に送つたのである。されば橋は帆柱と、形容に言ふ林かそも船の橋か？百艘二百艘と幅濶しては、時に九艘川の沖まで橋の林立を見たと言ふ。空には星の華、靜かな波の上にはチラ／＼と碎かるゝ赤い青い、黄いろい紫の、百千と數しれぬ舷燈の彩り、白い翼を浪に浸して、餌をあさる鴨の柔毛も、嗚や美しい色を浴みたことであらうよ！まアどんなに、夜の

江さし瀧は、賑はしく美しく、そして華やかであつたことか……。

濱小屋

『——せめて歌樂磯谷まで。』と切なる情に唄はれた如く、當時積丹より奥地へば、一切内地人の女の通行を赦されなかつたから、自づとこ、江差へ船着けたのを幸に、乏しい其財布の底を叩いて、果敢ない一宵の夢を買つた、のが抑々濱小屋の起る原因となつたのだ。名の如く、濱へ丸太を組んでそれを葎かこひにした、極めて粗末な堀立小屋のやうなもので之に一人から二人、三人も女を抱えて置いて、鬼のやうな荒くれ男の船の衆の上陸のを見込んで、連れ込ませ、酒を賣り、春を擲がした。浪風あらい北海道の海とは言へ、朧る月の夜は優しい波の調べも聞かれたらう……よしんばそれが、たゞ一夜の果敢ない契りとは言へ條、誠の戀も叫かれたかも知れない。潮に烟る丸木小屋、朧々一灣の風光は幾多の儚ない夢をまも

つて、更けてゆく、『やませ風、あきらめしやんせ別れては、いつまた逢ふや
ら逢はぬやら。』——白い鴨、白いかもめ、白い翼は遠くかすんで……。

輪通しの小路

此の濱小屋に近く津花町に輪通しの小路と呼び馴らした小路がある。矢張りそれ等と類似の營業をなし來つた者が多かつたが、明治五六年頃、濱小屋が其跡を断つてから、停泊船の漁夫や船方の便利な遊興の箇所が無くなり、嫖客の数が次第に減じて來たから、斯くては江差の般販にも影響すると言ふので、町から其筋へ請願する所があつて、遂に十七年、貸座敷の開業を許され、毎年五月から十月一ぱい六箇月間を限つて其營業を官許された。しかし間も無く廢止されて之等は影の町に移轉する事となつた。

鐵道築港水道

忘れもしない明治三十年、未曾有の豊漁があつた。此年から翌年へかけては、眞の人氣沸騰、江差全盛の時代であつた。地價は暴騰す

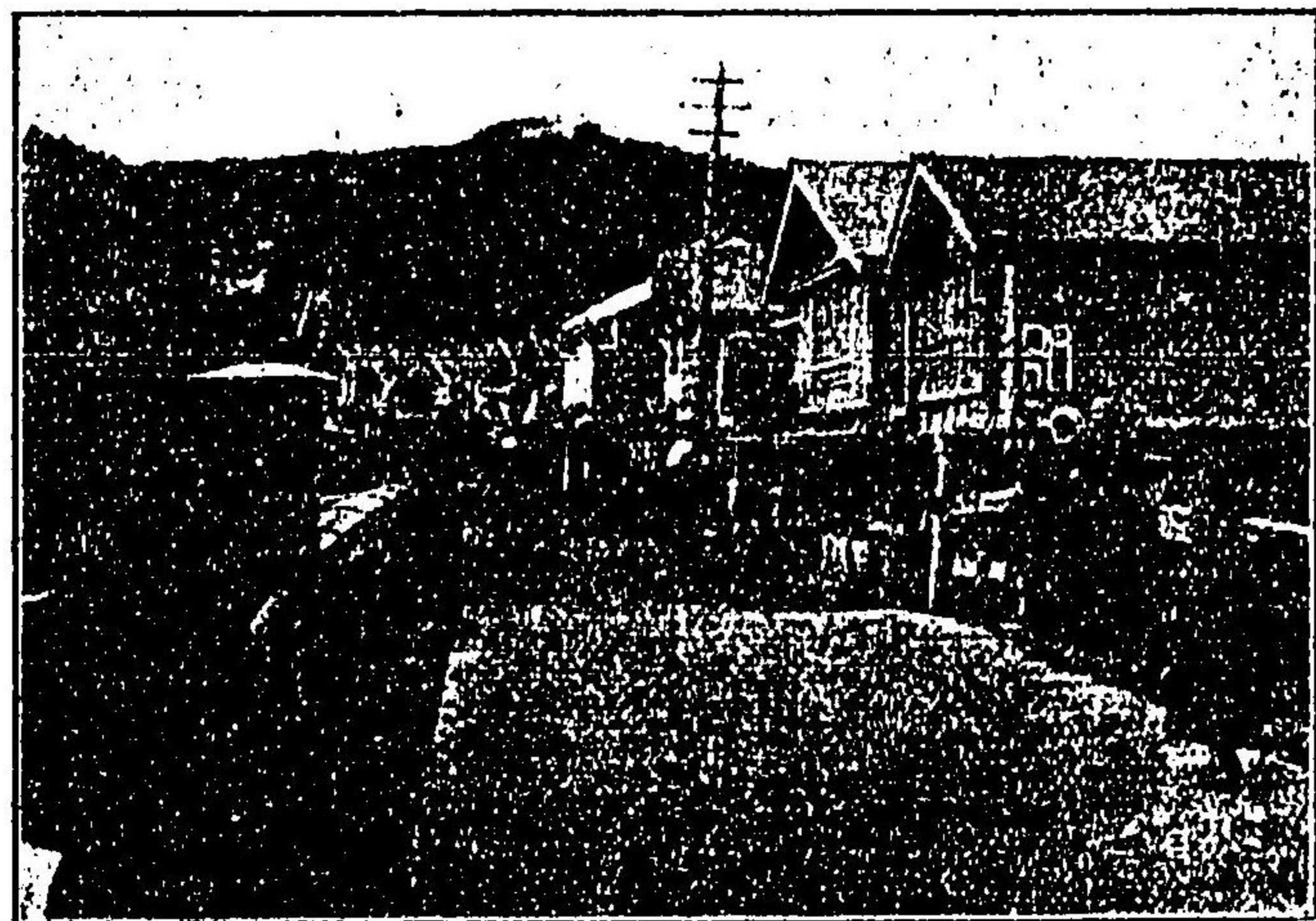
る、新しい建物は建つ、商買は何れも目を廻さん計りの繁昌、新地は盡猶ほ管絃の音の絶ゆる間とて無かつた。數年間唱導され來つた函館へ通ずる渡島鐵道は、愈々布設しなければならぬと言ふ騒ぎ、其鼻息の荒さも一と通りでは無かつた。中央に於いての運動空しからずとあつて、遂に假免狀まで天下る仕儀。一方港灣修築を絶叫する者も出來て來て、今日にして之が決行を成さずんば遂には隣港壽都岩内邊に壓倒さるゝであらう。六郡の貨物吞吐港として、其運輸の事に從ふ汽船の安らかに碇を投じ得るようになしようとならば、宜しく躊躇せずして今日築港の工事を起す可しと、大した勢で敦圀く者があるかと思へば、水利の便を缺く江差町として、火防の點より見るも衛生上より考ふるも水道布設こそ最大急務で、然かも渡島鐵道港灣修築等の大工事から見れば費用の負擔も至つて軽いぢや無いかと叫ぶ。かと思ふと、夫

れ火災の統計に據つて論ずる迄も無く、失火の大部分は洋燈の粗忽に起因する。此際町の體裁よりいつても、是非共電燈は點けねばなるまい、と喚き出すと言ふ混亂、何が何やら分らず終いに此年も暮れたが、明れば三十一年、當時の統計を調査すると、一躍戸數四百、人口四千餘の激増を來した。

鯨魚絶ゆ

然るに其後、江差の前濱には殆んど鯨が姿を見せなくなつた。けれ共其勢力範圍に屬する郡部の收獲は、兎に角相應に在つたので、今年こそは、と思つたのに又た的が外れた、と言ふ嗟嘆の聲の中に、三年四年辛くも過した。所が爾來一年は一年と郡部各沿岸の鯨群來も、頗る薄くなつて行き三十九年に至つては、誠に九十九石も言ふ數字を示したのであつた。殆んど漁業本位の土地で、十年に亘る此不漁に何として糊口の路を得やう。彼等は住み馴れた墳墓の地を後にして、續々他地方に移住し出した。それは

既に三十三四年から初まつたので、忽ちにして戸口は數千の數字を減じた。昨日迄は花やかに洋燈を運ねて、大僧小僧幾多の店員を使つて居た大店も、憐れや表戸は閉ぢられて了つて、貸屋札が淋しく木貼られる。こうして悲劇の幕が開かれた。でも人間はをかしいもの、何年か前まで石の榮華の夢が如何にも忘れ難い——幾年前のそれとは打つて變つた、みじめな此町のさびれ！何アに鯨だつて群來ないと限つた事があるものか、と果敢ない反抗

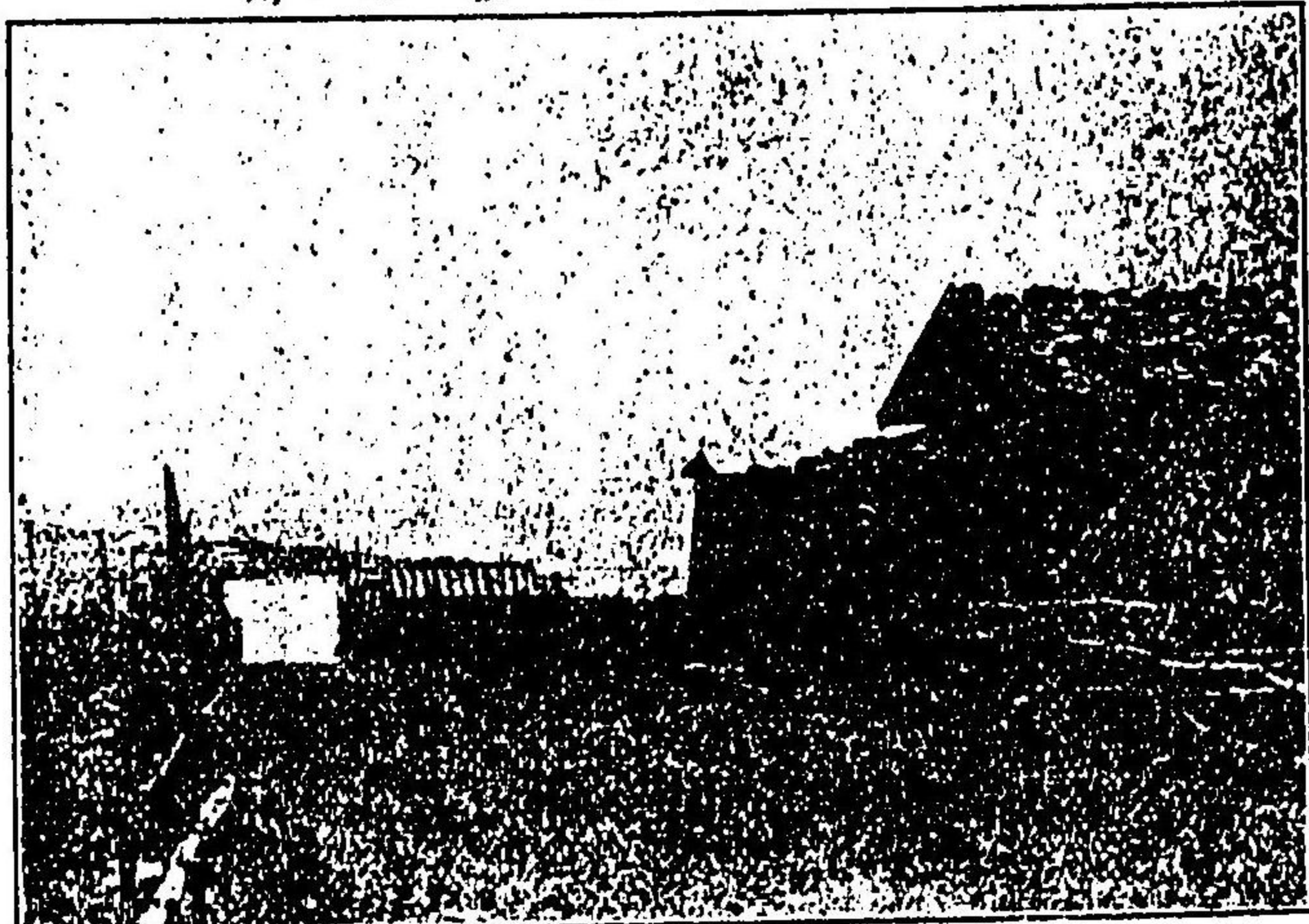


心が加はつて、どうにか斯うにか、なる中は土に嚙り付いても離れない。恰度自分の惚れ込んだ女の、何うの憊うのと言ふ噂は耳にしなからも、心の動搖の苦しさは勉めて嘘にして終ふ、——扱てそれで、安心がなるかと言へば安心どころか、始終こゝろもなく危つかしく、如何にも心配で堪らない、と言つた開れと等しい虚ろの、然かも惱ましい胸を抱いて、打絶えて久しく姿を見せない海面遠く見直しつ、今年も又た鯨の群來を待つ——濱には、今年こそはと、反るか伸るか、家財道具を迄犠牲にしてこれ丈は持ち堪えた網や舟。同じやうな狭い眉をした人が、あつちにも一人、こつちにも一人。海は油を流したやうに静かに風いて、鷗の啼ごゑも長閑に磯には高い藻の香がする。『今年若しも漁が無かつたら何うしよう……?』何うして食つて行こう、何！獲れる、獲れるに極つて居る、獲れないで堪るものか、神様は人を

見殺しにやしやしまい。』と元氣能く思ひかへした其尻から、去年のやうな事で終了つたら、何うしたものであらう……』と思へば、立つても座つても居られない。三日二日と過ぎる。壽都で獲れた!! 岩内が群來た!!! 如何にそれ等の聲が痛々しい惱みを彼等の胸に刻む事か——無意味に、たゞ譯もなく齒切りして『何糞ツ』と力んでは見るが、海はあらう事か夏の若葉を見る如く、何の濁もなく清らかに澄みわたつて、空翔りゆく鷗さへ、ひたすら北を指して群れゆくではないか、その空ゆく鳥の影逐ふて、少いさい、大きい、思ひ思ひの帆に風を孕んで、漁待ちして居た船もみんな出て行く。鷗島もさびしくなつた。——さア斯うなると氣が氣で無い、何となく町の人氣も銷沈して火が消えたやうになる。商店といふ商店は悉く無聊に苦しんでたゞ心の裡に大漁を祈りながら、うつら、うつら、と春の日永を新聞に暮す。相變らずち天氣は

明けても明けても能い日ばかり打ち續く。あ！鯨！鯨！何をしてるんだい！！と、ひと日、朝からどんより雨催ひの、沖を見ると如何にも柔らかに濁りを見せて、磯には白い鳥の翼が花のやうに翻り、何をあさるのかクンクン喘いで居る。漁師の顔には見る／＼勇ましい血潮が湧く、『鯨模様があるぞ！』模様が直つたぞ！』それと計り戦闘準備だ。浪はまるで沸き立つ如き賑ひ、向への浪も隣の老爺も、それ／＼大活動を初める。さ、茲今年の輪扇を決する所だ。細い春の雨が絹糸を下したやうに打ち煽る、沖遠く糶糊として、たり／＼と磯打つ浪の悠長な調べ、すべてが詠へ向きになつて来た。やがてしづかに暮れて了う。弓形した長汀いく里、美しい篝火の花が咲き競ふ。こうなると漁師はもう血眼、寝るところか夜ひと夜、トロリともしない。いつ何時でも『そらッ』と言へば漕ぎ出す事の出来るやうに準備は整へてある。差

して置いた(問ひ網)をそと起しに行く舟、かへる舟、油のやうな波の上でチラ／＼と舷燈が碎かれる。向う鉢巻で力味返してゐる——、居る中に、そろ／＼一枚づ／＼紙をはぐやうに夜は白々と明けて来た。？——！！……！！と雲脚が疾くなる、忽ち一陣ゴーツとやつて来る。もう駄目だ、駄目だ。急いで漁具を始末しなければならぬ。舟を上げる掛聲だけ『やつとこどつこい、えんやらほーい』と其所でも此處でも——雨が横しよく、浪が白い齒をむき出して攻め寄せる。二日も三日も荒れが續いた。忘れたやうに今度はケロリと霽れる。——網を納屋倉へ片づける連中がソロ／＼出はじめた。『莫迦な！今から網をしまい込んで何うする氣だ、ほつても無い、舊曆の何日だてこと、む、べら棒なッ』と、要らない人の事にまで食つて掛りたい程苛くする。感情が荒々しくなる。尻の重い媽の頭なんか撲りつけてやり度い！



からぬので其財産信用、殆んど全部を賭して居るのだ。それが、それが、これは何うだ！たゞの一匹顔さへ見ないと言ふんぢや無いか。恐らく此情ない終漁期の彼等の顔ほど、力の抜けた、いかにも落膽したと言つた表情の顔と言ふものは有るまいと思ふ。年一年と商内高は減するし反對に子供は殖えた、他地方より住み馴れた土地と思つて我慢するにいいだけは堪えて見たが、もう此年の漁もこれつ切り、背に腹は換えられぬ、江差に居ち

『それ見なえな、言はんこつちや有るまいし、今年もし此まゝになつたら一體どうする氣だい。』と噂も猛り立つ。雙方ムシヤクシヤ腹だ。随分取組合もやる。所へ『腹減つた、阿母、何か。』とぐりぐり坊主が吐鳴り込む。實は自分等の食ふ物も覺束ない仕儀なのだ。悲劇やら喜劇やら差づめ活劇とも銘打つ可きドタンバタンも隣りや向へが駆け付けて納る。こうした中に春も名残なく暮れる。彼等の生活は之から以後真に悪戦苦闘せねばならない。然かし生活に追はれれば追はれる程年も速く暮れよう。夢見たやうな中に新らしい年が来る。それ！忘れられぬ鯨のこと！前の年の其苦しみも、今年こそは一番何年振をも取つてかへして見せよう、と言ふ空な頼みに忘れるとなく忘れて了つて、新らしく泣きつき縫い付き、又ぞろ網を建てる事の出来るまでに消ぎつける。三月も暮れかゝる頃から再び彼等は半狂になる。なるのも無理

や食つて行かれぬ。岩内か壽都か？忽ちにして町と言ふ町、空家がバラ／＼と殖えてゆく。誠に昔の繁華が花やかに頭に残つてゐる丈、一層亡び行く町の悲しさが沁々と感ぜられた。残つた細民の多くは馬鈴薯を蒔いたり、大根を培けたり、食はんが爲めに畑を作つた。凡そ市街附近の岡陵は、全部鍬や鋤の目に堀りかへされ、春から夏へかけて、毒々しい肥料の臭ひに、通る程の者をして鼻持のならざる感を抱かしむるに至つた。

花ちり亂る

鱧漁の皆無に依つて、直接間接打撃を受けざる者は絶えて莫かつたが、先づ眞つ先に眼に見えて困つたは花柳界だ。其打撃の受け方も寂れ方もひと通りや二通りの段では無い。所謂出稼ぎが初まつた。いくら泥水の荒い流れに、揉まれ抜いた身ではあるにしろ、未だ年よわい十五か十六の少女の、唯だ三筋の絃のほそ／＼と、派出には見ゆれ心細い世渡りの、故

郷を出ては、さこそは世の風も辛いことであらうを！嗚呼業なれば是非もなく『酒事つらきお座敷に、涙不吉とせめられて、かくす戯れ唄——胸打つ鼓』と或る情熱の青年詩人の歌つた如く、遠く故郷の空を偲びながら、海山いく十里、へだてゝ酒の席に侍る胸のあわれさよ。——それも是非がない。『なが／＼お世話になりました、こつちの方は不景氣だから……暫く今度、岩内の方へ出ることに成りました。』揺重き黒髪に挿した白ばらの花！その花のやうな清らかな節操も、悲しいかな君は女だものを、一旦知らぬ土地へ流れ行つたならば我と我身の操をもまもる事のできない運命を知つてゐるか……今日は剛なくなる江差の浦の、ひと本の花と唄はれたその身の、明日は彼方の浦に咲く、萍のはかない、あゝ君の身……にぶい汽笛の音がする見送りの人、母アさん、父さん、『行つて参ります。』と言つてつと胸が迫る。

船からもう一度と思つてしげく濱の方を見かへると、仲のよかつた優ちやんの、白い顔がホツチリ、夕闇の中から咲いた花のやうに此方を見てゐる。之から行く知らない土地のこと、抱え主のこと、朋輩のこと、悲しい懐ひ出嫌しい思ひ出、それが一緒にゴチャ／＼ともつれ合つて、言ふに言はれない淋しい心持と一種の戦きを感じる。『けれども能い、あつちには小仙姐さんも初子姐さんも行つてゐるんだから、何、さびしい事がありやしない。』と思へかへしてゐる中に、船は本船へ着く。ドヤ／＼と客は動き出した。大きな男に打つかつたり青服着た船員に怒鳴られたりして、やつと隅に自分の場所をとるホツとする中に錨をまく音、吼え猛るやうな恐ろしい汽笛の音。微かに機械の音が響いて船は動き出す。棧子にすがつて甲板へ出て見ると、十何年のながい間棲み馴れた江差の町は、だん／＼遠くなつて行く。川の流のやうにザ

ーッザーツと舷を洗ふ潮の音、凝乎と陸地を見つめてゐると、自分を置いて、江差の町も、篠山も、元山も、みんな一所に遠く／＼流れてゆくやうだ。と我しらず眼がぼんやりなつて熱い涙がたまつた。——今日二人、昨日一人として彼等は他國へ稼ぎに出た。残つたのは僅かに十六七人となつた。

新地の寂寞

遁げ足のところを、どんと後ろから突きのめした如うに。辛つと餘喘を保つて來た新地の料理店や貸座敷も、三十六七年になつて全く持ち堪えがなくなつて成つた。世は恰かも日露の大役で、五千萬の同胞は寐ても起きて邦國の前途と、戦の成行に熱中し、數ならぬ身の猶ほ苦しい中から貯めた金を、惜し氣もなく陛下の御許に捧げて赤誠を獻じようと言ふ我國興亡の大役なので、自然と世の中は不景氣になる金廻りが悪くなる、況んや遊里へなど捨つる金をや、だつ所へかへ、加えて、未曾有の大不漁に了つた

新地の打撃は、嘘にもほんとうにも殆んど致命傷を與えられたので、之又た續々家財道具を二束三文に賣り飛ばして他地方へ移住した。空家は毀たれる。遊廓地の夜は、思ひ出したやうにあちこちに残つた御神燈、軒燈、それらの淋しい燈の間に、音もなく唯だ打ちしめり勝ちに夜の更け渡るが常であつた。その軒燈の洋燈も、明る過ぎては油が無駄になる、もう少し引つ込めれと言つた、殆んど消極的な寂寞を茲に現出したの。

法 華 寺 町



汽笛の音毎

明治三十三年、本道西海岸の商業發達のため、それまで商船の定期航海するものが無かつたので、江差が首唱して岩内函館壽都と提携し、其筋へ補助定期航路を請願運動して漸く其容るゝ所となり、同年八月より日本郵船會社の船舶が、函館を起點とし、江差奥尻壽都岩内を経て、小樽を終點とする航路が開始された。町の人は之を『定期、定期』と呼び馴らして居た。愈々此の定期が航行するようになったと東電に依つて分明した時、此ため江差の商業が急速な發展をでも見るかの如く飛び上つて嬉しがつた。町の東丘、翠色永へに清らかなる松の俗の畔り、一日之が祝賀の盛んなる園遊會は開かれ、各自杯を擧げて江差の前途を祝福した。然るに其後連年の大薄漁である。細民の多くは衣食の道すらも得る事が出来なくなつたので、彼の太古の民が隨所に水草を透ふて生活を索めた如く、また魚群の游泳につれ

て翔りゆき翔り去る鷗の如く、僅かに一包みの莖こうりと、果敢ない希望とを胸に抱いて秋の木の葉のちる如く、思ひ／＼に旅に出た。彼等の目的は唯一の鯨漁に目標を置くので、今年はどこが大漁だ、どこそこが景氣がいゝと言ふ聲につれて飛び出す。此兩三年前から、恰度此方が獲れなくなつてから岩内は連年非常な大漁つゞきだ。續いて壽都島牧余市小樽と、凡そ此方面へ彼等は行くのであるから、其道を海路にとつて、定期に十人が九人まで投じた。大抵一週間に一度づゝ往航がある。時刻は朝明けて、春深いどんぶりした空気に波動を興えて、太い汽笛の音がポーポーと聞える。嘗つて江差の前途を之によつて祝福せしめ、之によつて商業の發展を企圖したるに係らず、今敗残の人を他地方に送り出す事によつて定期の存在を認むる迄に至らうとは、恐らく誰しも豫想しなかつたのであらう。汽笛が鳴る。

國なくなる

汽笛が鳴る。姥神町の解船の出る濱には出稼ぎに行く人間が忽ち山をなした。在方から出て来て、昨夕一夜だけ宿つた者もあるだらう。何かなした、新しい土地へ行つて見ると言ふ事に、若い血ををどらして居るのも居るのだらう。揃へも揃つた、無意味な顔、無意味な眼、無意味な口、その口をポカンと開けて今乗り込む船の方を眺めたとして、幸福は轉がりこんで来る筈も有るまいに……。大抵は草鞋穿さだ。脚絆へ木綿の色糸で刺繡した(ぼし)と言ふのを着けて、重そうな柳桐や、或は竹桐を、白木綿を幅狭く疊んだので背負ふ。解が一度行つて歸るまでには、波打際まで押かけた頭數が、もう五十にも八十にもなる。之等の群を一口に(やん衆)と言つて居る。雁ひ衆と言ふのからなまつて来たのであらう。以前盛んに鯨の漁獲のあつた頃には、南部、秋田地方から幾百千人と數知れぬ此の雁ひが

町から村へ入り込んだ。物變つて今では反對に此方から、二十圓三十圓の僅かな前借に身を賣つて、こうして春二月か三月の勞力を金に換ゆるのだ。やがて舢舨が本船を距れて漕ぎ出す、さ之を見たやん衆連は、忽ち我れ先にと波打ち際までせり出すから堪らない、其騒々しさは一と通りでなく、かて、大きな荷物を背負つての事だから、何の事は無い火事場の騒ぎだ。一向然う急がねばならない道理は無いのだけれ共、たゞ一氣に人先に／＼と辛つて我一番にと舢舨に乗り込まうとして揉み合へし合ふ、——其中に巡查が来る。人通りも無い朝の町を、息せき切つて一人、二人、又た駈け付けて来る。と向うの空地から濱へ下りて出た夫婦連れらしいのが、こつちから舢舨へ乗るのを見るやさア事だと言はん計り。手を引つたくる如うにして奔つて来る。そして人の脇の下へ頭を入れて跳ね除けようとする。頭を庇て撃退する。足を

いやと言ふ程踏みにじられる。「ア痛！つゝ、」此の野郎何だい『糞食へ。』などいふ悪口や叫びやが、蜂の巢を打ち壊したやうにたゞもうぐわんぐ舢舨はつけは着けたが荷を上げる事も出来ない。「オーイ少し退つて呉んな！え退れ、退れ!!」巡查も加勢する。一方の血路を開いて其所から荷を擔ぎ出す小山のやうに固まつた彼等は機を計つてどつと鯨歌を擧げる。そして『わつしよ／＼ッ。』と前を攻めつける。何と制しても怒鳴つても無駄だ。押しに押されて腰までも波に浸る者、舢舨へ匂へ上つて突き下される者、そのぬれ鼠見たいな様を見て一同はどつと笑つた。彼は眞つ赤になつて怒つた。忽ち一場の激論は舢舨の人夫との間に起る。怒號、叱咤、絶叫、——と汽笛が又たポーと鳴る。後ろの方には、回漕店の番頭だの、その邊の商店の小僧だの、青つ鼻垂れたのなどが、懐ろ手してぼんやり之を眺めて居た。學校へ行く子供が



軋りは、亡びゆく町の挽歌を奏した。堆
く積まれた家財道具の煤けた茶いろは、
その主の敗残の運命の象徴なのだらう。
いつもと同じに、定期は錨を下して物に
動じぬ維人の如く済ましてゐる。いつも
見馴れた少女などの、今日に限つて、ちよ
つと美しいのに着換えて、何にも知らぬ
胸には賑やかな今ゆく町を想像して、は
しやいでもう何分か後には、別れねばな
らない友とにこゝく話してゐる。假令ば茲
に別れたとて、今の別れが永久の別れぢ

三三人、ぶら／＼とやつて来た。『また、ひとつとく行くんだらう。』『むー。』と
一人は何か考へるやうにしたが、『江差に人居なくならなえべか?』と問ひか
けた。その昨には一種の不安と、ある寂しい影が宿つて見えた。『何してが、
未だ一萬三千人も居るんだでや』と之は打ち消した。そして暫く騒ぎ狂ふや
ん衆の方を見てゐてが、こゝも、こゝも、いつか行つてしまつた。其うしろ影を見る
とも無く見送つて居た問屋の手代は、生仲をして、駒下駄を引きづり乍ら歸
つて行く。犬が尾を垂れて踵いてゆく。——鵜がクンと啼いた。

漣 漪 細 か

雇ひは大部分出て了つた。今はもう前の日の如き混乱はな
いけれども、漣ぎ行く解を遠く望んで、誰か哀れ深い感を抱かぬ者があらう
ぞ、堆く積んだ古ぼけた家財道具——晴々しい藍を溶いた春の海に、茶色に
煤けたこれらのガラクタ道具を満載して、靜かに櫓を漕ぐそのさしり、その

やあるまいし、いつでも逢いたけや歸つて来る。そんなに遠い所へ行くのでもない、僅か一晝夜足らずの船路だもの、と思つてるかも知れないが、君よ、世の風は荒い！世の潮は疾い！一度相別れたならばいつか又た相逢ふことのあるものか、將た無いものか——楚雲湘水、思ふに任せぬが浮世の常では無いですか……故郷！故郷！屹斗海山へだて、は、宵寝の夢のふと破れた時、言ふに言はれぬ甘いしかも深い哀しみを感ずる事であらうと信ずる。オ、もう船は出た。——鷗灣のむかし變らぬ漣漪を裂いて、鷗島がけ紫を淡くとくほとり、漕ぎゆく舟を見送つて無心の鷗が高く啼いた。紅の帯と黒髪の白いリボンが、ヒラ／＼と胡蝶のやうに、お、起ち上つて……手巾を振つて居る。いつまでも、いつまでも赤い帯が藍いろの海に際立つて美しくもえ立つ。——さアもうお別れなんです、——、お別れなんです、お別

れ、な、ん……。ですね、と、これが自分の別に親しい人でも女でも無くても、人の胸を衝いた。そして何だか美しい陽炎となつて、町が亡びてゆくのでは無いか知らと言ふような感じが、漕ぎゆく船の紅の帯の花やかな色と頭の中で溶けあふ。美しい夢の後逐ふ如き、頼りなき感じがする。

於隣堂さん

鯨の漁獲法を此の里人に傳へて、いづくとも漂然と姿をか
くした老女の事は、縣社姥神太神宮の項に委しく述べた。そして老女の行衛
を見失うて後、幾何もない事で、一漁師の網にかゝつた不思議な形の石、し
かも开れが彼老女の草庵の直ぐ下に當る場所て獲たので、之を靈石として祠
を建て、祀り、於隣堂と稱へたと言ふ事をも合せ述べた。その於隣堂は後姥
神太神宮の境内へ遷座して、折居大明神と稱した。毎年鯨漁期になると、一
艘の解船を借り受け、鯨豊漁の神様、折居大明神と遷し奉つて、旗、吹流し

など美しく飾り立て、社司や氏子を乗せて嶋島の周囲を遠く祈禱を捧げ乍ら
漕ぎ廻るのである。太鼓の音が静かな春の海を亘つて、ポコボン／＼と聞え
て来る。五色の旗を押し建てた船は、勇ましい櫂の閃めきと共に、迂るやう
に春の海をゆく。「お?! 於隣堂さんが廻るナ」と此太鼓の音を聞きつけた者は
皆な漕ぎゆく舟を見送る。鯨の獲れなくなつた年も、その翌る年も、又た次
の年も、その又た次の年も、静かな春の海に於隣堂さんがポコボンと面白相
に太鼓を叩いて漕ぎ歩いた。「お?! 於隣堂さんが廻るナ」と皆な沖を見た。

建物毀たる

あつちにもこつちにも、ドン／＼空家が殖えていつた。オ
ヤ茲がいつ空いたらうと思つた二三日して、又た通つて見ると隣りも貸や札
が貼られてある。之はと呆れる四五日して見れば又た新しい貸屋札、殆ん
ど近い中に江差町は空屋町と化るんぢやあるまいかと、人の胸をして不安の

感を抱かしむるに至つた。所が茲に悪税建物制と言ふものがある。坪數に應
じて凡べての建物に賦課する税で、之が家主は、店子の居なくなると共にた
だ無益の支出をのみしなければ成らない建物割の負擔は愈々重くなる。もう
町の體裁も何も言つてゐられない。二束三文に古物屋へ賣り飛ばした。彼等
は直ちに人足を伴つて来てドシン、コッソなどと言ふ激しい響の中に、鼻唄
掛けて毀して了ふ。空地になると思ひの外狭い地面であつた。——サア棟數
が一棟でも二棟でも減れば減る程一棟／＼の頭へかゝる率は重くなつた。今
迄耐えて来た連中も既う駄目だと投げ出す。土藏までどん／＼毀たれた。建
物割を逃れようのみに斯うして打ち壊して瓦だけ呉れてやるやうにして手放
す始末、目も當てられぬ慘劇が開かれた。こつちの町から向うの町が見え透
されたり、お隣りまで二十間も二十五間もある町が出来て了つた。その空地

には莖や大根が蒔かれて、春になると青い芽を出す。思ひも掛けぬ屋敷裏の
向やらの樹が、ぬつと往來から見事が出るようになって夕べには鴉がそ
の枝にとまつて啞々と啼いた。夜は往來が眞つ暗で、大雨に出来た穴も未だ
修繕されて居ず、見かへしても見送つても人つ子一人通るではない、淋しさ
を通り越してもう死んだ町——さうだ死んだ町としか思はれなくなつた。往
時其繁榮を以て全町の中心點となつてゐた影の町は、あわれやだゞ草茫茫と
していづくにも當時の面影の片影をだも求むるよすがもない。思ひもかけぬ
所に屋根構へした車井戸がボンヤリ立つてゐる。——町費削減は町會議員の
一派を中心として漸々として起つて來た。その削減によつて建物割の負擔を
軽減しようと言ふのである。斯くして今や江差は瀕死の境に陥り、僅かに其
餘喘を保つに過ぎない。——じぶる町——アーじぶる町！

小 鯨

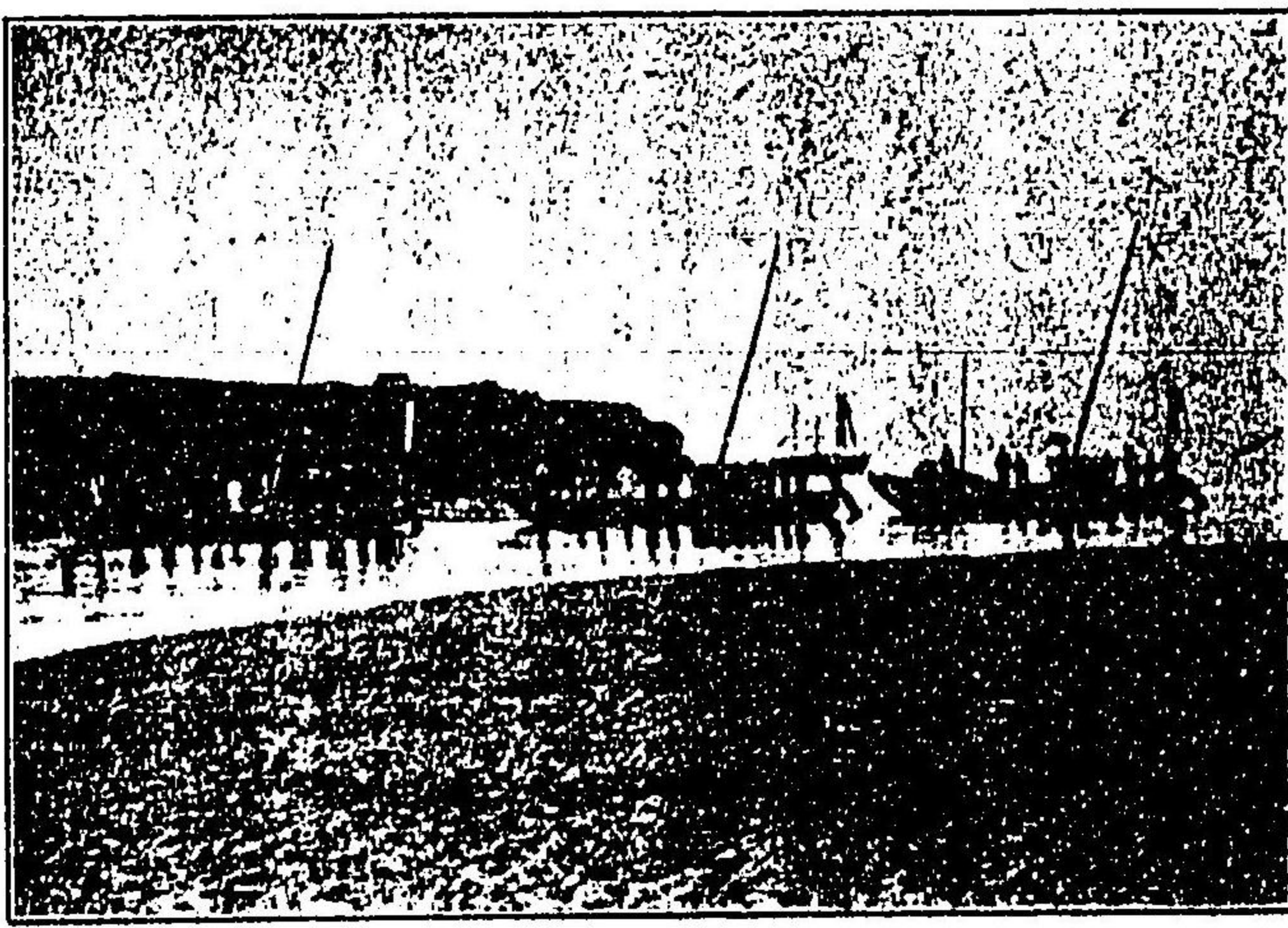
泣いても喚いても仕方がない。獲れなくなつた鯨は矢張り
獲れなかつた。一旦死んだ人の歸らぬ如く、鯨の事も既う諦めて了はなけれ
ばならないのだらうか……、明治四十年、之れ迄幾多の物議を惹起し、屢
々いろくな議論と言争を見た江差海面の建網が愈々ゆるされた。此年まで
江差海面だけは、差網業者保護と言つたやうな理由の下に、建網の建設を禁
ぜられてあつたのだが、連年鯨漁は皆無だ。一つは以前とは異つて差網業者
もずつと減つた事でもあるから、と言ふので茲に許可さるゝに至つた。細い
雨のそぼ降る日、茂尻町沖合に建てた網に少しばかり鯨がのつた。同時に詰
木石町沖合の網にも僅かばかりだが漁獲を見た。その鯨は常のものとは稍々
異なる質で、所謂小鯨と稱するのであつたから、愈々鯨には縁の切れたこと
かと、人々は落膽してしまつた。尤も小鯨であつたにしろ、此漁獲に依つて

建網業者は損失を蒙るだけは免れた。

明治四十一年 三十二年の頃より江差

の前濱では鯨の漁獲が全く皆無となり、人々の記憶には、以前の其の大漁時代の般賑が昔の夢と残るばかり、今では諦め兼ね乍らも、諦めて了はねばならなくなつた。十年続いた大打撃に、網も舟も、如何な粘着力の強い側でも手放さずには居られなくなつた。未だ三四年前までは、そろ／＼雪溶の候から、身欠鯨を干すために作られるナヤ（北海道殆んど全

其 川 崎 船 川 發



體斯く稱す。を空地に掛けた。それが此の年あたりから遂々見る事が出来なくなつて、昔は血眼になつて争つた程の其空地には、勢よく青い草が茂り合ふた。全く斷念し切つた細民等は、毎日のやうに鎌をかついだり、鋤を持ち出したりして、不景氣で金廻りの悪い事ばかりクドク／＼繰り返して居た。埃を浴びて眞つ黒になつて働いて居た。——一方道廳からは、態々水産技師がやつて来て、之迄沿岸一の豊漁地であつた檜山附近一帯が、十年來打つて變つて、散々な結果をのみ見るに至つた、其原因を調査した。そして之が報告は如何と言ふに、第一沿岸潮流の變換が主なる原因で、第二には、海底藻艸の發育不良、水中温度と投網期の適しなかつた事、其他を擧げて道廳に調査の結果を報告し、自らは改良川崎船に乗じて沖合に流し網を試みた。果然！果然！絶えて久しき、銀鱗潑瀾たる肥大の鯨が、其ながし網に依つて得

られたては無いか。彼は断言して、肥大の形状其他に推しても、今年こそ頗る有望也と言つた。然かも其言葉は馬耳東風裡に聞き流され、そうかいと言つて網を引きづり出して来る周章者も無かつた。然るに、それから約十日を過ぎて實に明治四十一年四月三日！我が江差町を南端とし、北久遠村に至る迄、沿岸約十數里に亘つて、未曾有の厚群來を見たのである。今茲に、筆を取つて書かうとしても思はず頬に紅の血の湧くを覺ゆるのだ——狂喜！東奔西駛！歡喜の聲！こうした言葉を幾十羅列しても其日の、湧くが如き人氣の狂喜して沸騰した實狀を悉す事が出来ない。海は油を流した如うにトロリと淀んで、小さい皺なら一つ見當らない。藻草の上に置いた白子で、海の水は白色に變つて了つた。沈む計りに網を積み込んで漕ぎかへる舟、新たに網を差しに行く舟、豆を撒いたやうにバラ／＼と亂れた小舟が入り亂れて繰る

が如く往復するの光景は、紙や筆では到底及ばない。然かも漁具は大概賣り飛ばして終つたので、狂氣のやうになつて譯もなく濱を喚き廻る者もあつた。若い者や手助けの出来るやうなのは、出稼ぎに行つた後だから、残つてゐるのは藥鏝や女共ばかりと言つていい。しかも網が無い、いや舟が無い、魔誤つきづくめへ眼の前には鯨が群來てる！其混亂と周章狼狽は何に例へんものもなく、老いも若さも濱でも町でも、一樣に狼狽てふために如何ともする事が出来ず、地團駄踏みつゝ巨萬の富をむざ／＼と逸した。沿岸の各村皆をの通りで、中には數日間、群來に尋いて群來、晝夜去らなかつたが、徒らに口惜しさに齒切りするばかり、手の下しようなき村もあつた相だ。『もう二三年前——いやせめて去年あたり來て呉れたら……』と其當時、顔と顔と突き合したら屹斗どの人の口からも残念相に言い交された。

▽紅燈綠酒△

新地

安政年間遊廓を切石町から新に開かれ町に移して、浪華の新地をそのまゝ探つて、此の町名とした。兩側には枯れかゝつた柳、淋しい御神燈、毀たれた家の跡には雜艸が我物顔に延蔓つて、秋も開けて夜毎に露も滋くなる頃には、細い聲を傾はしてよく蟲が鳴き競ふた。その昔の繁榮は唯一場の夢と淡く、今は其名残をも止めぬのであるが、それでも矢張り花の悲である、春の宵など何となう我人ともに浮かれ氣の、駒下駄の音が賑はしく入り亂れて、しめやかな三味の調べ、華やかな笑ひ聲、一種のどよめきを作つて、此の雜音の中に夜は更け亘る——時計がぼんと一時を打つと、此時見番が退けるので、報知の拍子木を箱屋が打つて歩く。——幻か夢か、悪酔

の苦しい夢路を破られて、ふと我に歸つた歡樂の後の、淋しい哀しい心持を抱いたまゝ、いそいで家路につく客も珍らしく無い。斯くて藝妓もそれゝ歸つて了うと、眠そうな軒燈の灯も消される。遅い新地の夜は來た。——

旗亭

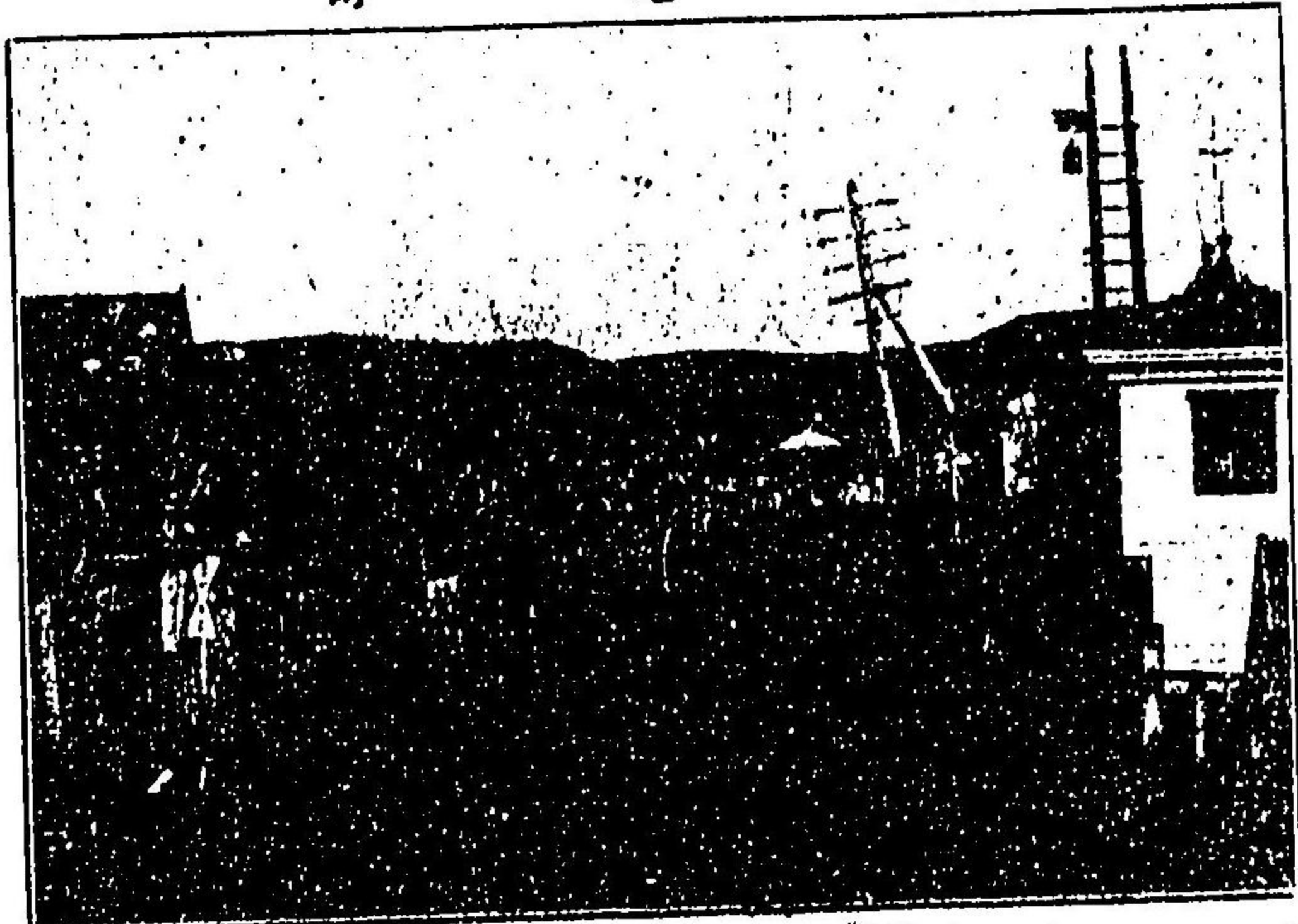
茲に面白い事には我が江差の料理店と言ふ料理店は皆この新地に軒を連ねて居る。別に之と言ふ特別な原因も見當らないが、或は斯うではあるまいか……新地であればお隣りからおとなり悉く女郎屋料理屋、浮かれ騒ぐも我のみでは無い、あちらの旗亭でも嵐のやうな三味線、やけな唄聲、と裏の料理店では濁み聲絞つて絃にも合はない唄を怒鳴る客がある、亂れた手拍子酔ふて叫ぶ金切聲、さてく俺れはこんな所へ來る筈ぢや無かつたが來て見れば又た我のみかは、平常眞面目な顔してゐるあの人迄があつた、お互い様、もう遠慮は要らん、一つ負けずに浮れてやろう、パチく

と激しく掌が鳴る——と所で之がぼつちり一軒間に離れて居る料理店だとす
 る、大浮れに浮れ度いは山々ながら、扱て後ろめたい、ひつそりかんとした
 往來を覗んで、眠い目をこくり／＼火鉢に欠伸を生殺しにしてゐる連中は、
 俺れが今此所で騒ぐと屹斗物好半分やつて来るに相違が無い、萬々一そのお
 蔭で露現れた日には大變だ！桑原々々。先づ斯うした原因として考へると、
 主因は土地の狭い故であると言ふ事になる、所がどう言ふ狭い町でも、未だ
 もそつと小さい狭い町でも江差の如うに一區劃にくちやく／＼と詰つてる所
 は無いと言つても能い。之れやがて江差の人間の、己れの良心に耻ぢ入る行
 爲をなし乍ら人を欺き自らをも誤魔化そうとする、卑劣な根性の表現で、一
 方此の要求に對する發現が、料理屋町の新地を拵へたのだらう。

仲居がゐない

『むらつしやい』の弊に迎へられて廊下の草履を穿く、案

内された一室へ通
 る、先づ型の如く
 酒が運ばれる、所
 が江差の料理やに
 は仲居が居ない。
 其家の下女か女中
 が不愛想な面をし
 て拵けて来るのだ
 此邊何處までも江
 差式を發輝して居
 る。そして酒なら



一つさゝないて去つ
 て了うのだ。夏など
 足袋も穿て居ない。
おしらせ 淋
 いから直ぐ藝妓をよ
 ぶ事にする。どれが
 出、だか或は居るか、
 所謂(お知らせ)を貰
 ふ。土地／＼に依つ
 て電報だとか、號外
 だとか、種々此の符

牒ていが有るが、新地しんち、藝妓げいぎと言ふ連想れんそうと此のおしらせと言ふ優しい發音はつおんとは、頗る調和ていわが能い。電話でんわのかゝつてゐる亭ていではチリン／＼と鳴る、無い亭ちんは一走り見番けんばんへ行く直ぐおしらせは来る。西洋紙せいやうしの美濃紙みの半截位はんせつぐらゐの、に、仰々げうげうしく二號活字ごうくわつじで藝名げいめいが行列がやうれつしてゐる。既いう出た妓こには、頭に赤あかい判はんで出と捺なしてある。

見番

大小藝妓だいせうげいぎ三十餘名よめいは、皆みなその籍せきを組合見番くみあひけんばんに置いてある。

矢張り新地町しんちまちに在るので、二階建にかいでんの、其二階かゐだけを取り毀つた天井てんけいの高い、表おもてを格子造りにした四間々口けんまぐち、入ると直ぐ右側に帳場ちやうばが在る、絶えず線香せんこうの細い煙けぶりが、／＼と立ち迷ふて居る。鼻先はなさきの障子せうじを引き開けたなら、それこそ大變たいへん、美しく着飾きかざつたニヤン／＼が、二つ切つてある爐側ろばたにそれ／＼陣じんを取つて、面白可笑おもしろおかしい話はなしに空な時ときを費つひしてゐる。正面せうめんにはまぶしい洋燈らんどうの光を反映はんえいして姿見すがたみ、右側みぎがはへ寄つて掛時計かかけどけい、細かく仕切つた棚たなには頭數あたまかずと同じい

三味線さんまいせんが、人待ち顔ひとまちがほに何の家何子なんのやなんこなど、白く抜いた風呂敷ふろしきに包まれて並んで居る。も一つ右へ寄つて電話室でんわしつ、悪戯いたづらやらお座敷ざしきやら、チリン／＼と能く鳴る。藝妓げいぎの詰めるのは燈あかりが點いて間も無くで、三人、二人と集る、箱屋はこやが金棒かねぼうをチャン／＼突ついて新地しんちを歩く、そろ／＼下駄げたの音ねが入り混まつて響く。

自前と抱え

江差全盛時代えさしぜんせいじだいには百數十名居た藝妓げいぎも、漸時土地ぜんじとちの衰退すたたいと

共に出稼でかせぎに出たり廢めたり、全く往時かうじの俵わらを失つて今では僅かに三十四妓さんじゅうしご所ところが之が他地方たかちほうと違つて大抵自前たいていぜんだ、そして大部分は江差えさしで生湯うぶゆをつかつた連中れんちゆうだから面白い、他から單身たんしん來つて業げふを營いんでゐるなど、言ふ者は一人も無い。却つて此方こちから遠征えんせいに出掛ける者が年々絶えない。娘むすめに藝げいを仕込しこむ、覺おぼ束つかないがピン／＼弾けるようになった。然かし此地こちの見番けんばんへは出せないからと言ふので、僅かな仕度しどをして、俱知安黒松内くちあんくろまつないあたりへ賣つてやる。聞くが

如くんば夫等の新開地の藝者などは、よくさうした土地に見る如く殆ど二枚鑑札で無ければ通らぬ位の、然も開れを承知でやる、又行くのだ相な。思ひ見れば彼等の萍のやうな生涯、浮々に送る果敢ない身の行末はどうなる事か……然も此出稼ぎを何藝妓や其輸出地となして名高くなつたと来ては情無い、み讀お今や江差藝妓は全

る、とは聞いたが、江差は衰えて藝者を出だしたと来ては聊振ひ過ぎてゐる。



お座敷 「久龍さんにとんぼさんとはいく、かしこまりました、左様なら。」チリン〜と電話が切れる。帳場から聲を掛ける。二人は立ち上

つた『家は？』『常盤。』襟をかき合して皆にちよつと挨拶していそくと兩妓は出る。今まで赫々と炭火に上氣せた柔らかな頬に夜風が冷たい。芝居小屋の屋根に眉のやうな細い月が懸つて居る。急にゾク〜するので、小さい肩を押し並べて、びつたり寄り添えながら足早に急ぐ、駒下駄の音がカラコロ言ふ。——直ぐ後から箱屋が、三味線箱を包んだ風呂敷をかついて行く。今でも箱に入れて持つて歩くのだ。箱屋さんは二人居る。

今晚は 鬨を跨ぐや『今晚は』と女將に挨拶して、それから衣擦れの音爽やかに、心の裡に（何處の人だらう……若しやあの人ぢや……？）などと思ひながら、静かに障子を引き開けて『今晚は』と頭を下げる。順序は珍らしくも無い斯の通りて至つて平凡だ。後は勝手な騒ぎ。唯一つ面白いのは此地の半玉である。一體半玉と言ふ名稱は線香が半分だから起つた名で、踊

を重に専門とするから踊り妓とも言ひ、お酌をするからお酌とも呼ぶ。然るに茲の半玉は聊か趣を異にしてゐる。中には十八にも十九にもなつてゐるのがあるから、年から行つても無理では無いかも知らぬが、お召縮緬の羽織などを引つ張つて、態度なり口吻なり、座の幹旋から何から一本と見さかえの付かぬのがある。暫くすると起つて行く、三味線を持つて来るのだ。ピ、ンピンなど、音締めをして弾き出す、中々勉強なものだ。だから半玉の二三人も招べば唄も歌へば踊りも踊る、酌にも抜目が無いと來てゐるから聊か頼もしさを乗り越えて恐縮な程、まア強いて一本を招ぶには至らぬね。

左り馬

三味線の胸へ縁起の左り馬を書くと言ふ事が今も流行つて居る。満更ら偶にしか顔を見せない客や見ず不知の客が、書くとも言はなければ書かせもしまいが、酔ふた元氣などで腰の抜けたやうな馬を書いてやつ

て色男ぶるのであらう。大抵の藝妓の三味線に馬が跳ねて居る。いやに瘠せて脊中をゆがめたのや、骨組のどこやら抜けて見える奴、四つ脚を引つ張られた格好、かと思ふと、へたばつた上へ火でもつけられたやうに跳り上つたのや、どれもこれも却つて縁起を悪くしさうな馬ばかりだ。呵々。

その服装

一本の藝妓にも絲織を着て居るのがある。以て全般を推す可しだ。例の左袂をとると言ふ事を多くしない。並の着丈に羽織杯を着たり

する。如何にも目に立つは十八十九となる、頗る柄の好みを地味にして老けた作りにする。尤も是には經濟の關係もあるのだらうが、一般の町家の娘杯より反對におとなしいの



は不思議だ。そのくせ不斷着などは今度は派出なのを着込んで居る。お座敷着ても紋付などは、三ヶ日五ヶ日七草とか、盆のおやすみの時で無ければ殆んど着ない。半玉は大抵友禪メリンスを着て居る。服装の點に於いて他地方より劣るものある事は争ふ可からずだ。

線香

藝妓の玉代は一本三十銭で、一本は見番で立つてる線香一本の灰になる間の時間、凡そ三十分弱である。一本悉さる毎に線香の立つてる旗亭へ更に直すか否かを質して、直すと言へば更に新しい線香が烟をなびかせて客の懐が三十銭だけ寒くなる勘定、半玉の一本は線香の二本燃えつくす時間である。然かし此三十銭全部が藝妓の所得になるかと言ふに左様でないので、内一割を見番へ、一割をかいつた旗亭へ差引かれるのだから、實際の収入は二十四銭になる譯だ。その中を又た五分か一割各々醜金してゐて

病氣で箱を引いた朋輩のある毎に五圓づゝ見舞としてやる事になつてゐる相な、とすると二十一二銭しか質收が無い。所を抱えと成ると抱え主に又々頭をはねられる。彼等の内實は側の見る目のやうな樂なものでは無い相だ。所で又もや江差特有な事がある。宵の口であらうが出盛りの時であらうが、線香は必ず一本迎へだ。一本で歸す事が自由に出来る。其かわり眞つ晝でも線香に割引が無い、退け過ぎは其旗亭へ手加減で幾分か負けもするが、八時九時頃の出盛る頃も、十一時十二時過も線香代の同じなのは珍しい。

電報

ところで茲に電報と言ふ事がある。所謂お貰へだ。招ひ度い藝妓が出て居る。そこで電報をかけるので、其旗亭の女中は直ちに駈つけて、そつと其の藝妓を呼び出してもらつて耳打する。馴染客だと先方を能い具合につくろつて、大概やつて来る。勿論來られない場合も有れば、只今

参りますから、ちよつと！の間待つて、下さい……。』など、手際よく丸めて置いて到々來なかつたりする事も無い譯では無い。忙しい時などは二軒からも三軒からも此の電報が輻輳する事もある相だが花柳局の電信にはウナ報が無いから極めて遺憾だ、此場合は好きな方へ足の向くのは人情だらう。

藝妓の風儀

概して其筋の警戒の嚴重な故かどうか、藝妓一般の風儀は先づいゝ方だ。然かし乍ら嘘か真か、空氣枕を帯にはさんで居た藝者が東京に有つたと言ふ位の今の日本の花柳界、底にそこあり蓋もあり、先づ言はぬが花の譬もあり、旁々中には非どいのも居る事だから、餘り矢釜しくほじり出さぬ事とするが、兎に角一般的に見れば、前にも言ふ如く能い方である。そして全體に亘つて、藝に身を入れるのは嘉す可しだ。毎月一回、

月 渡 び

十日に見番で技藝温習會をやる。重なる料理屋の主人や女



將など連座の中で、命ぜられたものを各々演る事になつて居る。種類は義太夫常盤津新内長唄清元、其他何でも殊に彼の邦國平民文學の白眉、不朽の名謡たる松前退分は、その唄に、その踊に、當地が本場であるだけ其眞價を發揮しようとして熱心に勵み努めて居る。されば之等が自づと技藝を練磨する根源となつて、三十餘名悉く皆絲竹の事に暗からぬと言つてもいい位、此點で服装の方と差引勘定を立て置く。

ゴ ム 靴

雪の上に行がふり積る、下駄や足駄で踏み固まる上へ又た降り積る。之が激しい寒さに凍て付くのだから堪ら無い、迂つかりしようものなる大の男も踏み違つて岡天倒と行かぬと限らぬ。此の危険を豫防して冬

のち座敷通はゴム靴となる。黒い東コートに踏む靴の音ギユウ、湯かへの素足、蛇の目傘など、言ふ人などに見せたらそれこそけ反るかも知れず、如何に寒い、北海道とは言へ、あんまり振へ過ぎた話ぢや無いか。

貸座敷

僅々十年前までは妓楼十四軒、娼妓は三十五名も居たのが現今では、妓楼が四軒、娼妓は十五人しかゐない。そのむかし、二十五六年度の頃、百人近い藝妓と百數十人の娼妓が居つた頃と思ひ比べると、斯うもまた、衰えるものかなアと呆れない譯にはいかない。

娼妓の服装

所て之等娼妓の服装はどうであるかと言ふと、都に見るやうな襦の伊達姿に装ふ者などは絶えて無く、藝妓の方が却つて立ち優れて居るとは面白い事實ぢや無いか。そして娼妓は何れも籍を貸座敷に掲げて、其寄寓する家でなければ客に侍さない。

▽江差十二ヶ月△

【正月】

降り切る雪に明けて新らしき年を迎ふ。氏神姥神々社に、朝まだきより詣づる人多し。神殿の朱いろに燃ゆるともし火や、柏手の音、何となく人のこゝろを新たにす。この日一日、羽織袴の折目正しう、廻禮の人に常には淋しき町も賑ふ。二日三日は、商店の初賣なり。あるは萬國々旗を飾り、あるは球燈を花の如くつらねて、買客の眼をひかんと争ふ。賑はしき初荷の馬車の鈴のね、人の心の、常にはあらで浮き立つもをかしや。月も央ばとなりぬ。十五十六の兩日は、商店の小僧大僧、下女の果にいたるまで、身は籠の鳥うれしくも、今日ひと日は自由の翼ゆるされて、甘き慈愛の懐に常より更に短かき日を消し果てつ、見はてぬ夢の跡を逐ふ、それにも似たる

胸を抱いて然らばとて、立ち出づる我が家の軒の、いたくも雪の積れるよ！
北の國なりき。霏々として鷺毛に似たるしら雪の、いつ止む可しとも見え辨
かず。【二月】 肌を切るらん寒さはいよ、暮りゆきつ、老いし人に限
らず、外に出づる事も思ひ病み、唯一の友は火なりけり。空は明けても明け
ても雪もよひの、然かも恐ろしき風、日暮れ頃より吹き募ることも珍らしか
らず、世は擧げて、冬の神の威に狂ふのみに任せつ。終日體々と打ち寄する
日本海の怒濤の叫び、白帆も萎えて、行き悩む船を見ることもかづあり、時
には、帛を裂く如き非常汽笛の、斷續して、訴るが如く泣くが如く、嵐に吐
絶れくして聞ゆることもあり。人の心は荒みゆきぬ。【三月】 彌生と
は言へど春遅き北海道は、やうく山と積りし雪の、この月に入りてより懐
かしき光を投げ掛け初めし、日かげに溶けゆきつ。ながき冬に飽き果て

し人々は、蘇生へりし思ひして『春は來ぬ！』と嬉しさうに口々に咳く。日
は一日と、寒さも衰えゆきつ。街は雪溶の泥こねかへして、往來の難き筆に
悉すべからず。若さをんなど、深き泥に穿物とられて、空しく白足袋を
汚すなど、笑止なり。此の月も了るころ、各小學校にては、修業式を舉ぐ。
一と年の、朝な夕なに勉め勵みし影しは茲に、嬉しく修業證書に譽れを飾る
身となりて、三々五々、嬉々として家路につくも可愛しや。木の芽は未だ出
でず。【四月】 小鳥の囀る聲さへはれやかに、世は春となりぬ。往
來の雪まつたく消え失せて青き草の息吹かすかに見ゆ。柔らかき雨ふること
もありき。多くは蒼空雲もなく、拭いたらんごとく晴れたれば、鷓鴣のほ
とり波平らかに、沙干狩の舟たゆることもなく、かしこに静かに釣りを垂る
る人あれば、此方には又た潮あさりゆく素脛の二人、一人、姉さん冠りもな

つかしや。若芽とると、舟押し出すもありき。鷗、來啼きぬ。藻の香たかさ
 磯邊の細かさうねりに身を浮きしづませて、クン／＼となきかはすも長閑な
 り。白き翼、白き和毛、とこしへに海の青には染まざれば、かれ等にも浮世
 は有りと見えにけり——いくばくもなく。餌を慕ひあさりてその昔の、松
 前追分に唄はれける潮路高島、とうく翼をやすむる暇もなく、翔りゆきぬ。
 梅、蕾をやぶる。【五 月】 若葉の香り高うなりぬ。梅、さくら、桃、
 杏など、一時に咲き匂ふ。梅のすぐれて氣高き、櫻の艶なる、桃の鄙びたれ
 ども愛ほしき、杏の飾りけなき卒直など、みなとり／＼に嬉し。この夜ごろ
 澄みわたるみ空の星の、聰げの眼ざし眞珠のごとく美し、夏にやなりけらし
 ——翠りきよらかなる高臺、松の岱に散策の人、やう／＼多し。近き郊に杖
 曳くなども面白からん。【六 月】 牡丹、藤、水仙、芍薬、山吹、黄な



成田屋おもちや

花の屋富久

る、紅なる、思ひくのいろに咲き競ひて、見る目もまばゆき計りなり。海は清く澄みて、平目しきりに市を賑はす。暮るゝに先立ちて、遠く舟を出して釣し、朝日のいまだ登らぬ間に、冷たき黎明の波蹴破りて、獲物を市に運ぶなりき。かくて彼等漁り夫の、銅いろの腕に獲られしその命は、町の人の晝食の膳を賑はして、その運命を了りぬ。この月、市内四小學校の合同運動會開かる。會場は荒浪打ち寄する古樞海岸の濱地にて、二千五百の少國民が茲を先度と各々日頃鍛ひし腕をためすさま、頼もしとも頼もし。このあたり濱蒚の花多し。【七月】 氣早き側は古き裕を打ち棄て、紺の香なつかしき單衣に更へぬ。七日八日は招魂社の祭典なり。數十旒の旗朝風に打ちなびく状、何となく今この土の下に眠る。勇士の勇ましき奮戦の様など思ひ起さしむ。有位者、官署吏、在郷軍人小學生徒の參拜了りて、後は思ひ思ひ

の参詣者の、行くさ來るさの賑ひ、路傍の翠り、セビヤいろに染れて熱苦し。正午に近き頃、組合見番より奉納の藝妓の手踊りの一團、新地町を繰り出す。手古舞姿に装ひし、金棒引を先として、友禪模様の浴衣着派出やかに、花か？人か？三味線、太鼓、（はアーおー）の懸聲もなんとなくなまめきて、重なる町々を經めぐり招魂社にといたる、彼方には相撲、あるは撃劍など、それく人をおつめて、さしもに廣き境内も、今日のみは狭く思はれぬ。在方より赤き脚絆、白き頬かむり、うしほの如く集いきたる。夜は又た夜にて、各戸球燈をつるし田樂提燈を飾りて祝意を表す。——この日頃、日に増し暑ささびしうて、氷やは俄かに店を打ち擴げ、赤毛布など敷きて客を待つ家の漸く殖えゆくも目に見え立ちつ。【八月】晴れたる空の一隅より、つと湧き出でし黒雲の、忽ちにして世を掩ふかと思れば、雷鳴轟き紫

電奔り、白雨矢の如く降る。霽るれば、露ひたる西日は遠く落ちんとして、隅灣の漣漪しはしがほどは、金波銀波を揉みかへす。世は夏の最中となりぬ。潮のはな亂る、津花の濱は、海水浴の人に打ち賑ひぬ。打水の跡涼しげなる往來は、日ぐれ頃よりそゞろ歩きの人に、つねには淋しき町も賑ひて、水々しき果物ひさぐ店などの、ともしの光まばゆきを見る。月の十五十六の兩日は、縣社姥神太神宮の大祭なり。家々は業をやすみて、國旗を掲げ、球燈を吊し、あるは金屏風など打ちめぐらして、お祝の赤飯に一日をたのしく暮すなりけり。神輿の渡御あり、之に供奉する各町の山車は、賑はしき囃しと共に、『えんや〜』の掛聲勇ましく、町々をねり歩いて、時には、その社前に再びかへり集ふころには、ほのく〜と明けやすき夏の空の、はや白みゆくことも珍らしからざりき。夜に入りてよりの、町々の雜鬧は、名狀すべくも

あらず、新地に山車を引き入れし頃には、肩々と相摩して、しばしが程は路
ゆく事も心に任せず。巡査の提灯の、たかく人の群をやぶりて八方にとぶも
をかし。澄みたる月は、瑪瑙の如く招魂社の林に懸る。【九月】 みぢ
かき夏は逝かんとして、はや何となく秋めきぬ。松の偕のほとり、夕月にす
だく蟲のねも聞かるべく、鳥賊つると、遠く漕ぎゆく船のいざり火、點々と
して花の如く美しく。篠山、元山、くつきりと彫刻の如く、高き空にそびゆ
るを見る。日脚のみぢかくなりゆくことも、人の心ををびやかして、そろそ
ろと秋の仕度にとりかゝる。誰れを招く？ 芒の花の、なよやかなる腕の、し
ろく野をかざりぬ。【十月】 月見草咲く。かよはき花よ、幸あれ。ひ
と雨ごとに涼しうなりまざる。ながき炎熱にくるしみし人々の、やうやく生
きかへりし思ひもして、渾身の血の、うつくしう澄みゆくを覺ゆ。天、たか

く紺青に晴る。馬肥えたり。野路には桔梗、女郎花、とりくくに咲く。露、
夜ごとに滋くなりゆきて、蟲のね鈴をふるごとし。町を北に距りて三里、蛾
蟲村とよぶ小さい村あり。縦貫して流るゝ厚部川といへるに、打ち架せし
つり橋の畔り、山容ちかく迫りて急流飛沫をとばすところ、血しほを浴みし
かと疑はる紅葉の葉の、ふた葉、ひと葉風なきに、落ち散りて名残の花をな
がれにまかせ、浮きつしづみつ遠くゆく。かくて秋はゆくらし。ひと日を消
して杖を曳き、こゝに遊ぶも興ありなん。天の川に鮎上す。菊咲く。戸ご
と大根洗ひに忙がはし。鮎、はじめて市にあらはる。初霜くだる。綿入れに
着ぶくるゝ人もいで來ぬ。【十一月】 鷗じまに、名残の舟あそびするも
あり、浪やうやく高さ日のみ多し。初雲ふる。遽かに寒暖計はくだりて、蟲
のね、まつたく絶ゆ。法華寺の林、葉ことごとく落ちつくして、青き月のか

げ、病う人の頬を見るごと、わびし。重き雲とづる日のみ多く、東風吹き荒
みて、頭痛やむ女おうし。木枯梢に夜もすがら騒立ちて、風にふかるゝ小雀
の羽さむげなり。雪ふりつもる。【十二月】 雪にあけ、雪に暮る。はげ
しき吹雪の日のみ多くして、電信電話の細き線、悲しげにヒュー／＼と打ち
叫ぶ。ひねもす波の音響々と打ちよせて恐ろしげなり。往來ほとんど絶ゆ。
歳悉さんとす。人の心も、各々忙がはし。二十日過ぎより、かしこ此處に、
餅つく音賑はし。『松や松——』『べめ細かはやえかんす——』『繭玉木買
はねかんす——』やうやく物賣りのふれ聲かしました。商店はそれ／＼、初賣の
準備に油断なく、少女子は、春着の赤き青き、さまざまの美しき衣撰るに日
も足らず、かくして晦日來る。この日一日、掛取血眼になりて、八方に奔り
まはるさま、目眩るし。錢湯賑ふ。日暮るれば、姥神々社へ詣づる人多し。

▽ 鷗 鳥 △

肩か？翼か？ 白い胸、白い翼、何だか鷗といふ鳥は愛らしい鳥だ。——
鷗鳥に對する毎に、私は此の鳥を思ひ出す。それは、同じ鷗といふ字が連想
をひくのみ故ではない。春、雪が全く溶けて、あたゝかい日差が快く照ら
す頃、南の國から遠く來たこの鳥の、初めての啼き聲を聞きつけると、誰で
も思はず知らず（ゴメが來た！ゴメが啼いた！）と言つて騒いだ。鯨や、其
他の小魚の群を逐つて來るので、幾何もなく遠く北の空をさして翔んで行つ
て了ふ。かうして次の年まで、その愛らしい白い翼の影を見せない——。昔
鯨の漁獲が盛んにあつた頃には、花の亂るゝ如うな數しれぬ白い翼の翳るの
を見得たであらうが、だん／＼鯨が群來なくなつたに連れて、鷗もあまり群

れ来る事が無くなつた。鷗島と言ふ名の起因も、元よくこの島を中にして、近くで鯨の群來ることが多く、従つて島には敷しれぬ鷗がつた所から、名づけられたのであらうと思はれる。とすると、鷗じまと言ふ名も、淡い一種の悲しみを私等の胸には與えるのだ。しかし、鯨が獲れなくなつても、町が衰微しても、自然は永劫に變らない——小貝の夢おどろかす磯のさざ波、藻の花咲くテツカヘシの鼻、それ等は恐らく永久に、榮枯盛衰の浮世を超脱してゆく事が出来るのであらう。周圍半里強丁度真中の所が凹んで、兩翼を張つた形だ。右翼の端をテツカヘシの鼻と言ひ、左翼の端はクツレと呼んで居る。夕陽のこる頃、散歩の杖を松の傍の畔りにひいて、金波銀波美しき日本の海原遠く見渡したならば、遙に藍色の臥牛の形をした奥尻島、左に遠くはなれて里謠追分節に唄はれた大島が、うすれゆく夕日の海に、巨人のごと

く動ぜず、靜かに眠りに落ちてゆくのを見得るであらう——更に近く、殆んど濱にくつついて、翼の如き形をした小さい島！それが鷗島だ。やがて名残りなく昏れる。濃い藍碧のみ空には、夕月が花びらのやうに浮んだ。鷗島は、細く眉のやうに横つたまゝ、だんぐうす紫に變つてゆく……。

瓶子岩

頂上に見える白堊の建物が燈臺だ。三等で六里、夕暮から夜が明け放たれる迄あれでも職務は大切と言つた風に、ポツチリ灯つてるんだからねえ……舟をつけるのは殆んど中の濱に限られてゐる。尤も濱といつた所で僅がばかりの濱地、茲は上へ登るに都合がいゝから誰でも舟を茲へ廻す丈けの事、海は平らかだ、舟の矢の如く駛る、と此時、初めての者には猶更奇に、見馴れた眼にも不思議な、頭の大きい岩が濱ちかく屹立してゐるのを見出だし得よう。高さ二丈餘、上の方の直径は三間もあらうか、浪の浸蝕と

自然に崩れた、めや何かで、根元はぐるり一丈足らずの丸い岩、瓶子岩く
 と言ふのはこれだ。口碑によると、此の岩が例の、鯨を漁獲する事を告げた
 ましいづこへか姿をかくした彼の老婆が、神様より頂いた白色の液體の入つ
 てた瓶で、老婆の海へ投じたのが化して鷗島の岸に岩となつたのだ、と傳へ
 られて居る。固より荒誕無稽、取るにも足らぬ話で、此の岩質と鷗島の地形
 土質を仔細に参照すれば、其幾千年前までは、慥かに此岩の邊りが鷗島の
 部であつたに相違が無い。それが永い間の波浪の浸蝕に、追々削られるとも
 なく剝られて、遂に今日に至つた。柔らかな土質はくづさるゝ儘に流れ去つ
 たが、隠れて見えなかつた此の石が、取り残されて獨りポツネンと起つてゐ
 た。——かゝる間にも、浪は千歳に變らず毎日打ちつけてく、岩根を噛む
 そしてあんな奇妙な形に造り上げたのだと思ふ。其證據には、此岩に近く肩

を張つた如うに突き出て鈍角の崎をつくり、左右は共に弓形に食い入つて舟
 着き場を拵えてゐる、此地勢が極めて親切に説明して居るではないか。

紀 念 林

岩の根角、のさばつた樹の株、いつ付いたとも無く出来た
 頗る自然な、然かし急な坂を登る。二人並んでは行くことの出来ない狭つこ



瓶 子 岩

い道、頭の上の枝で何かの鳥が啼いてよくザワザ
 ワと笹が鳴つた。三つばかりうねると其まゝ、頂
 上へ出る。鼻つ先の脚下に、帆前や大和船の繫留
 してるのが、何だか玩具でも見てゐるやうな心持
 がする。思ひ出して竿でものべた如うに、こつち
 にも彼方にもぬつくと、帆船が聳えてゐる。白
 い建物の燈臺は直ぐ其處、あたりは芒や笹や、雑

艸が一體に生ひ茂つて、三角形に細い道が岐れてゐる。路を右手にとると、嚴島神社を通つてテツカヘシの鼻へ下り、裏の千疊敷へ出る事ができるのだ。その嚴島神社の手前に、六尺ばかりの土堤を廻らした一區劃のあることを發見するであらう。一千三百八十九坪、これを去る三十三年五月、東宮殿下の御慶事のあつた際に、町の有志者が相圖つて、紀念のために造つた紀念林であるのだ。松、楓、落葉松、櫻等の苗木を四千本植えた。其中央に高さ一丈二尺の碑石を建て、『皇太子殿下御婚禮紀念』の十字を刻んである。

テツカヘシ鼻

嚴島神社の前を越えると、路がだんく下つてゆく。茨が雜艸に雜つて脛を引つ搔いたり、と思ふと、古繩の腐れを踏みつけて臍を冷したりする。波形に削り立てられた島の北端、もう此の邊りからは草も何もない。兎もすると下駄では危険だ。二丈計りの高さから、自然と波に浸蝕つ

て出來た階しを一步々、靜かに下りると凡そ十疊敷程の間、岩が平らになつて直ぐ岸は、グル／＼と渦を捲いてゐる。この邊海の水が如何にも蒼く小氣味が悪い位、そして莫迦に冷たい日が多い。何年前か、九艘川町の海濱から、その町の東本願寺別院の坊主が、いつもの通り頭へ衣服をく／＼り付けて拔手を切つて泳ぎ着き、暫の間このあたりを泳ぎ廻つてゐたが、ふと姿が見えない。夜に入つても歸らぬ所から大騒ぎとなつて、寺から警察へ急報する、直ぐ船を出して隈なく搜索したが、此のテツカヘシ鼻の岩上に、冷たい着物と下駄がある計り、とう／＼死んだと言ふ事が分つた。九艘川の海岸からは彼之れ九町近くある。彼は非常な水練達者で、平常衣服や下駄を首へくくりつけた儘、休みもせず島へ泳ぎ着いて、悠々岩上に戯れては、又た歸つたものな相な。自殺か過失か、遂／＼分らずじまひになつたが、魔のひそ

むやうな此の深い渦巻を覗き込むと、何だか怖いやうな心持がする。

千疊敷

島の裏へ出るには、茲からは廻れない。岩が切つ立てたやうになつてそれへ浪が打ちつけてるから、是非又た上つて別な道をとらなければならぬ。別な道といつた所で、例の自然が刻んでくれた階を上り、向う側へ下りるのだ。時化の時になると、直ぐこの後ろへもつて来て、ドシンドシン音が打ちつけ、ゴボン／＼と、言ふばかりもない恐ろしい、氣味の悪い凄まじい音を立てる相だ。岩と岩とのトンネルを、辛ふじて下りる。と茲が所謂千疊敷だ。一面廣濶い岩盤になつてゐて、所々凹んだ所へ潮が溜つてゐるのを、辨慶の足跡だとか言ひ傳へて居る。岸は直ちに蒼々たる深海で、一歩轉倒して落ちてもしたらお陀佛だ。此邊頗る海岸線に富んでゐて、屈折端倪す可からず、至る所に小さい港や藻の密生した湖が出来てるのだ。方言

でヒル貝と呼んでる小さい貝が、一體に岩に密着いてゐる。春から夏へかけて、此の貝狩りの舟で賑はしい。三十間程離れて、周囲十間ばかりある飛び島がある。鳥の糞で白くなつて居るだけ、いつでも鴨などが、ク／＼啼き交しながら群れてゐる。頻りに餌をあさつて居る所へ、「ゴ／＼と浪がくると、花の亂る、やうに白い翼が翻る。此のあたりから向うは、だん／＼岩の起伏が激しくなつて、小牛の臥たやうな形した岩や、舟が打ち上げられたやうなのや、中々奇観である。中程まで行くと、ずつと深く海が食い入つて居る所がある。陸から見ても、真中の凹んだ所に當るので、前面の方も深く食い入つて居るので、トンネルでも鑿らうと思つたら譯もなく出来相だ。之から向うは斷つたてたやうな絶壁へ、直ちに浪が打つて白い泡を立てゝるから行かれない。

馬の背

細い道を這らないやうに要小心して、やつと上へ又た出る。

此處から前に言つた中ノ濱へ下りるには、此の川んだ所を通らねばならぬ。しかも兩方からずつと食い入つてゐるので、岩で出来た路が馬の背のやう、勢々二尺か三尺、十間程の間この恐ろしい背骨を歩かねばならぬ。右も左も、覗き込めば打ち寄する白い浪が、恐ろしい泡を嚙んでゐる。臆病者には、脚が嘸ふるえる事であらう、いや臆病者ならずも、通り越えてから大抵ふり向いて見る。——少し登り阪になつてゐて、うるさく纏る芒を振り乍ら、平かなあたりへ出ると、其所がさつきの燈臺の横になつてゐるのだ。燈臺の後ろからも下りる事が出来る。勿論こんな所は好事者でなければ通らない。昔、此所で、儘ならぬ身を歎き、情死した藝妓があつたと傳へられてゐる。

馬 岩

例の中ノ濱から南の方へ漕ぐと、此の川みを越して一町程の所に、馬岩といふ岩がある。一丈程の高さ、何の事はない首をもたげて、

草を食まうとする馬の形そのまゝだ。口碑にても残つてゐる事があるまいかと思つて、探して見たけれ共、何も無かつた。此あたり能く、小魚の釣れる所な相で、風ぎのいゝ日などには、静かに糸を垂れてゐる舟がよくある。

怒濤の叫び

此の南端をクツレといふて居る。静かな日には忘れたやうにけろりとしてゐるが、一旦恐ろしい風が吹き出して、山のやうな怒濤が崩るゝような日になると、猛然として襲ひ来る巨浪がこの岩根に碎かれて、數丈の水煙を上げて物凄い位、——テツカヘンから避難した汽船が、こゝでも持ち堪えられず、救助汽笛をピーピー鳴らし乍ら、とゞ哀れや一片の信號旗と共に座礁して了つた事などがある。——無心の鷗はなんにもしらず、長閑に啼き交しつゝ、小さい波に浮き沈みしてゐるが、岩に碎くる波は悲しげに、こうした悲劇のあつた事をば、ひとり語り顔である。

▽濱小屋△

濫觴

文化年間、津花町に福田屋のいと、さとい呼ばれて居た二人の女があつた。其當時は、所謂詩人の筆に美しく謳はるゝと帆檣林立の何のと描かるゝ可き時代で、鴨島には大小幾十艘と數しれぬ船舶が碇泊して居た。夜でも晝でも、遊廓地の影の町には管絃の音の絶ゆるひまもなく、江差の般賑は誠に茲から生れたのである。然かし何れの船場も、そのために風俗が淫靡にながるゝのは事實で、濱小屋といふ、全國に其比を見ない、一種の不思議な遊廓のやうなものが、津花濱に出来るに至つたのも、此の淫靡な土地の風俗が、間接の原因をなしてゐる。それは扱て置き、今言ふた二人の女は、半片豆腐だとか、或は餡焼餅の類を携へて、港内の船舶の間を賣つて

歩いた。飾らずと雖も、若い女の血に飢ゑた彼等舟方には、潮に窶れたその姿が何となく心をひいて止まなかつたのであらう、自然最負にされてあつたからも、こつちからも、二人は眼の廻るやうに忙はしい目に遇はされて之等の物を賣り廻つた。漸々酒のやうなものをも鬻ぐ、猶更ら繁昌する所から、今度は津花の濱に丸木小屋を建て、茲で酒肴を賣つて嫖客を招いだ。影の町より近くて都合が能し、今て言つて見たら輕便と言つたやうな所が大いに繁昌を極める原因となつて、遂に何軒もゝ眞似を仕出す者が現はれる迄に至つた。後年江差風俗史を研究する上に、多大の興味を附與して呉れる此の濱小屋は、實に此の二人の女によつて斯うして初められたのだ。

丸木小屋

濱の砂の上に丸太を打ち込む。全部繩で粗雑に組み建てただけの事、そして之を簀垂張りにし、入口の六尺だけ蔀を下ろした。安政年

間になつてからは、何分狭い濱へもつて来て、我もくと丸木小屋を建てようとするのだから、屢々紛争を生ずるに至つたので、遂に官から干渉して、一戸分の地積を、二間四方の四坪と制限し、濱と町方と兩方數丁の間、之を番號で區別し、抽籤に依つて營業者に下渡す事とした。幸にいゝ場所に當つた者は能いが、反對に不利な方面の籤をひいた者は、見るも氣の毒な程、情氣かへつて引き退つたものだ相な。彼等は斯くして、多くは三四人から、一人二人位づゝ、女を抱えて居て、酒をすゝめさせ肴から暴利をむさぼり、春を嚮がして己れの懐を肥やした。

雁の字

度々重複するが、當時前にも言ふた如く、神惠の崎を限度とし、それから先へは内地人の女は渡れぬ、と言ふ海神の掟に制せられて、當時未だ無智なる時代であつた所へ、無教育な彼等は、自分で女といふもの

は不淨なもの、若し掟を破つたなら如何なる災が降るかも知れないといふ迷信に依つて、自然江差が美人の溜り場になつて居た。さてこそ出船入船の數毎に、尸の字形した青錢把が江差女郎の懐ろに落ち、直ちに之が代名詞となつて尸の字と言へば女郎のこととなつて了つた。かうした譯であつたから、越後や酒川津輕邊の莫連者などが、男から錢を捲き上げる事を唯一の目的として、續々春から夏へかけて入り込んだ。濱小屋の營業者は之等の女を雇ふて醜業を營んだのである。

おほろ月

濱は一體に小屋が掛つた。入口の扉の奥の火鉢には、申し合はした如うにどこの亭主もく、脂詰つた煙管を横くはひして、跣座を掻きながら濱を見入つてゐる、若しい客種でも見つかつたら、無理にも上げようとするのだ。首筋を、滅法に白く塗りこくつた女共は、早く日の暮るゝ

のを待つて他愛なく一日暮らす。やがていつとはなしに空のいろは黄昏れて夢のやうに朧ろの月が、かゝる。——渚は一體に、薄すり、黄金の縁をとつて、寄せくる波は静かに何をか囁いた。林のやうに樹ち並んだ帆柱の間からは、思ひくゝの色いろの舳燈げんとうが、花のやうに咲き揃ふ。——波は美しく彩れて、勇ましい櫓拍子ろべしと共に、ギイ／＼漕こいで来る舟が繪のやうに見える。——

一宵の夢

宵から掛けて十時十一時頃までの其雑鬧といふものは、名状すべからざるものであつた。露商店人のカンテラの火、簀垂れを洩るゝ淡い燈火のかけ、燥はいだ聲こゑ、媚めかしい聲こゑ。戀も愛もあつたものでない。彼等は斯うして果敢ない肉慾の満足を購つた。何を言ふても僅か八疊敷しか無い丸木小屋の中のことであるから、二組三組と客が込み合ふと、さゝやかな屏風一重に夢を結んだものな相な……沖は朧々行衛も知らず遠く霞んでゐる

——白く頰るゝ波は、磯邊に小さい花を散らして優しい樂の音を奏かなでた。彼等の夢は、この明るに易やすき短か夜を、何處へそも徜徉さまよたことであらう。僅んだ屏風一重を距へだては、自分と同じ様に寐ねて居る者があるが、夫が何處の國のどんな人か丸て知らない……此女も、一體どこの甚麼女か、何をして來た者か、一向に分らない……然かし憊うして別れたら——然矣だ、明ければ帆を張つて遠い舟路ふねぢに上るのだ、もう恐らく一生の別れなんだらう……氣がつくと、枕の直ぐ下



津 花 園

で、ちやぶ、ちやぶ、と渚を洗ふ波の音が、遠い國から來る音のやうに聞える。

いざ時化と

變り易い北海道の天候は、何時急激な變換がやつてくるか